
自分は男だ！！

博多っ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自分は男だ！！

【Nコード】

N3524B

【作者名】

博多つ子

【あらすじ】

小さい頃から男の友達としか遊ばなかった少女。そのせいで自らを女としては見ていなかった。男の心になりたいのになぜか女の心に邪魔をされてしまう。しかしある男をきっかけに少しずつ女としての心が目覚めはじめる。性同一性障害ではありません。理解をしてお読み下さいね。

プロローグ（前書き）

はじめて書く小説です。投稿は遅くなると思いますが頑張ります。
それとジャンルの《恋愛》とは少し違うかも知れませんが一応、ラ
ブコメディー感覚で書こうと思っています。

ブローグ

「由美こっちにパスパス」

「OK、分かった。…おりゃーパス!」

僕はボールをすばやくまわす。

「シュート」

ボールは見事にゴール。

「よっしゃ、ナイスパスだったな由美」

「やっぱり運動神経抜群だよな由美は…」

僕の名前は上野由美うえのゆみ高校一年の女の子。

…なのだけ僕は自分の事を常に男だと思いこんでいる。小さい頃から、男の子と思い育ってきた。男とスポーツをやったり、一緒に喧嘩したりする。女の子がやる、あやとりとか、ママゴトとかは昔からやった事がない。親はその事を心配してるけど僕の心は変わらない。……で今はサッカーをしてる最中だ。

第一話「女扱い」

「今日はもう遅いから次の日曜にまた、サッカーしない？」

一人の男子がそう言い、今日のサッカーは終わった。この調子でいつも週に一回男子と混ざって遊んでいる。

「由美帰るぞ」

「ちよっ…待って」

僕に声をかけてきたのは中原浩という男。家が隣という事と高校が同じということがあって、幼なじみという感じだ。

「まじ悔しいー。また由美のチームに負けちまったよ」

「浩のチームが弱すぎるんだよ」

「ちげーよ。由美の運動神経が良すぎなんだよ。ほとんど由美がゴール入れたじゃんか」

浩はまだ僕にスポーツで一回も勝った事がない。水泳でも、陸上でも、テニスでも、もちろんサッカーも…

別に運動神経が悪いのではないがそれ以上に僕が強いのだろう。

自分で言って恥ずかしいが…

「由美さー」

「何？」

「髪をもう少し伸ばしたほうがいいんじゃない？その長さだと男みたいだよ。そんなに可愛いんだからさ」

「僕は男だからいいの」

僕は顔を《プー》と膨らませ言った。

「またそれだ。いい加減自覚しろよ。お前は女だ。」

いつもこんなふうには浩に言われる。僕を男と思ってくれない。スポーツは浩より出来るし、喧嘩だってそこら辺の男には負けない自信もある。身長だって170センチちかくあるのに… 身長は関係ないけど

とにかく浩が自分を女扱いするのが僕はいやだ。

「なんでみんな僕を女扱いするんだよ」

その問いに浩は…

「だって由美って普通に笑ったら可愛いじゃん。」

「……」

僕はその言葉を聞き、浩から目をそらした。

「あ、照れてやんのー。そういう反応が女なんだよ由美は…」

「ばか…」

僕はそう呟いて再び浩から目をそらす。

(ビューー)

「わっ！」

「ひっ！」

冷たい風が突然僕たちに吹いてきた。

「さみーな。そういえばもう一月だもんな。寒いはずだよ」

浩は体を《ブルツ》と震えさせ言った。

サッカーで汗をかいたので余計に寒く感じたのだろう。

二人で自宅に向かって歩いていてあと少しという時に、フッと空を見上げた。

雲一つない空と、冬の気温と空気のせいかな星がキラキラと輝いていた。

「ねえ浩」

「……ハ」

「ちょっと聞いている」

「ハックショーーン！」

「わーちょっと、ちゃんと口を押さえてよ。」

「ごめんごめん……で何？」

僕はその答えを無視し、自宅の門の前に立った。そして浩に手を振った。

「あ、由美」

「何よ」

「これで100回目くらい言ったと思うけどさー。口癖直せよ。自分の事を《僕》じゃなくて《私》に変えたほうがいいぞ」

そう言っつていつも言う言葉を残して浩は自宅に入っつていった。

「もうバカなんだから……」

第二話「自覚してる事」

「姉貴―――火事だ―――!!」

《バ!》

「嘘嘘!!」

僕は布団から慌てて這い上がった。

「嘘だよー姉貴。もう朝だから母さんが《早く由美を起こしにいつてきて》って言われて起こしにきただけ」

弟の大哥の言葉に僕は…

「だーいーすーけー」

《ゴツン!》

殴っちゃいました。

「いってー。殴る事ないじゃん」

「じゃあ、もっとましな起こし方で起こしてよね」

「分かったよ…イテテ…」

少し強く殴りすぎたかな。

「じゃあ姉貴。下で朝食の準備してるから…」

「はいはい。分かったから出てった出てった」

そう言い、弟を追い出す。

「全く、中2にもなってへんなイタズラするんだから…情けない」

僕はため息をしながらパジャマから私服に着替える。

私服とはいってもスカートは絶対に履かない。男が着そうな服を着て、下はジーンズを履く。学校の際は仕方なくセーラー服を着るが

：

「由美ーご飯よ。早く来なさい」

お母さんが僕を呼ぶ。

「ちょっと待つて。もうすぐいくから」

そう言い、みんなが食べてるリビングに向かった。

「あら由美、またジーンズを履いてるの！せっかく可愛いスカートを買って置いておいたのに」

「お母さん。僕に気を使わなくていいから……余計なお世話だよ」

お父さんは会社でほとんど家に帰ってこない。だいたいは弟とお母さんと僕の三人でご飯や家族の会話をする。

「姉貴」

大介が焼けたばかりのトーストをかじりながら言う。

「姉貴って、男を好きになったりしないの？」

は！？

何をいきなり…

「お母さんもそれが気になるのよー」

お母さんまで…余計なお世話だよ。

「好きになれないね」

率直にその問いに答えた。

そう答えた瞬間、大介とお母さんはお互い目を合わせ、また僕に視線を写した。

「姉貴ってさー。弟の俺が言うのもなんだけど、スタイルは結構いいし、顔も美人で、もったいないなーと思うんだけど…」

「そりゃー、私の子だもの。あとはその心さえ治してもらったらねー」

その言葉に僕は少し頭にきた。

「僕は男。それでいいじゃん」

少し怒鳴り声でいいはなった。

「胸は…」

お母さんが自分の胸を指し、私に言った。

「由美はもう、高校1年生でしょう。あと少しで2年になるのよ。男の子も女の子も思春期があつて体の発達も明らかに違ってくるのよ。その胸は明らかに女の子の印でしょ」

それは今までお母さんが言わなかった事だった。言い返したかったけど言い返せなかった。確かにこの胸は男子より大きいし、女の証でもそれでも自分は男なんだ。そう信じるしか方法がなかった。

なのに…

なのに…

「食べる気をなくした……」ごちそうさま」

僕は皿をその場に残したまま自分の部屋に戻った。

第三話「ショック」(前書き)

第三話「ショック」

《ぴんぽん》

(……………)

《ぴんぽん》

(……………)

「すみません！浩ですけど」

(……………)

「家にいないのかな？」

(ガチャ)

「ごめん浩君。朝ご飯の支度をしていたから全然気が付かなかつたわ」

「あ、別にいいですよ。それより由美はいますか？」

「由美……ね。今、自分の部屋にいるけど……」

珍しいな。あのいつも活発な由美が…

「何かあったんですか？」

長くこの母親に会っているせいかいつもの元気がないの分かる。

「おととい、由美にきつい事を言っちゃったの？」

「きつい事？」

「本人が一番気にしてる事をつい…」

由美の母親の言葉を聞いて瞬時にだいたいの事は悟った。多分、体の事や性格の事だろう。

「由美に会っていいですか？今日、バスケをみんなでする事になったので由美も一緒に誘おうと思っていたんですよ」

「そうなの……どうぞあがって」

上野家にお邪魔をし、由美の部屋がある二階にあがる。

（コンコン）

「おい由美。浩だ。ドアを開けてくれ」

ドアには鍵がしまっていた。いつも俺が来る時は鍵なんかしめないのに…

「おい由美！！バスケに行くぞ。部屋にずっといたら頭がおかしく…」

俺が声をかけてる途中、由美がドアの中から声をあげた。

「今日はいいよ。浩一人で行って」

「おいバカ。由美が行くから面白いんだろうが」

俺はそう言い、ドアをもう一度叩いた。

「お母さん…そこに…いる?…」

由美が元気ない声で話かける。

「いないよ。今は下で朝飯を作ってる」

(ガチャ)

親がそこにいないと分かって由美はドアを開けてくれた。

「中に入るぞ」

「うん」

部屋の中に入ってみると、カーテンは閉め切っており、ゴミ箱には濡れたティッシュペーパーがたくさん入っていた。相当涙を流したんだなこいつ。自分の事を《男だー》とか言いながら、やっぱり本当の心は女の子なんだな。

――――

――――

――

「よし、外に出ようぜ。そして行こうよバスケ」

俺は元気がない由美を見て外に出したほうがいいとその時思った。

「ほら、今日は晴れだから外で遊ぶのは絶好の日だからさ。学校の冬休みも今日で終わりじゃん」

「……………」

全くおとといサッカーした元気はどこにいったんだよ

「胸」

「は！胸？」

由美がやつと話かけてきた。ここまでくるのに二十分はかかったけど。

「なんで僕に胸があるんだよ」

由美は泣きそうな顔をしていた。

「……………女の子だからだよ」

俺は冷静に答えた。

「前にも言ったけど胸だけじゃないし、声も、顔も、足も、手も、耳も、ほかぜんぶ女の子だよ」

その答えに由美は

「中学の時から自分の体を見て自覚はしていたんだ。小学校までは男の友達がたくさんいて、いっぱい遊んでいっぱい笑った。中学になると、周りの男子が僕の事を避けるようになってきたんだ。《一緒に遊ば》って言ったら、《お前女じゃなか。いやだよ女と一緒に遊ぶなんて》て言われたよ」

その話を俺は黙って聞いている。

「そう言われてからみんな僕を女扱いし始めたんだ。特に胸の事は一番僕に対して嫌いな言葉だったんだよ。それを昨日、親に言われた事がショックで…」

そつ由美は言い話さなくなった。

「……」

「……」

「だから!?!」

「え?」

俺はその場の空気を消そうと言葉を発した。

「親が娘の事を心配するのは当たり前だろ。そんな事をグズグズと引きずって、情けないよ」

「だって…」

「男なら……もっとシャキとしろよ。男ならな。そうだと由・美・君…」

俺のその言葉を聞き、由美の口元が少し笑った。

「よし由美、行くかバスケ」

「……うん」

よし。いつもの上野由美だ。

「あ、そうそう由美」

「何？」

「母さん心配してたぞ」

「うん。僕がいじけちゃったからね。今日ちゃんとあやまっとく」

やべ、由美にこんな事言っただけで女扱い出来なくなっちゃった。気をつけないと…

「ハァー」

「ため息しないよ浩。幸せが逃げちゃうよ」

立ち直るの早!!

第三話「ショック」(後書き)

見てくださっている方々、是非何かしらの評価をお願いします。 m

(・・) m

第四話「朝寝坊」

「ZZZZZ・・・」

(つつん)

「ZZZZZ・・・」

(つつん)

「……、せーの」

「ZZZZZ・・・」

「起きろろろろー」

「ギャヤヤ！なにになに何が起こった」

「じゃーん。僕だよ」

「え！？なんで由美が俺の部屋に…」

「朝だから起こしに来た」

「そういう意味じゃなくてなんで俺の部屋に無断で入ってきてるんだって聞いてんだよ」

「浩の親の了解を得て入ったよ」

……あのバカ親め

「で、何しに来たんだよ」

「今日から学校じゃん。だから迎えに来た」

……えーと、よく見たら由美の服装が学校のセーラ服になってるな。

……じゃなくて学校！？えーと……

……《思考中》……一分経過

（バツ）

俺は急いでベットから起きあがる。

「やべええええ、今何時だ由美」

由美は時計を見て冷静に答える。

「八時半」

「あと十分で始業式が始まっちゃうじゃねーか」

親め。なぜ起こしてくれなかったんだ。

俺はすばやく寝間着から、制服に着が……

「おい由美……」

「何？」

俺の着替えをジューツ見つめる由美に俺は言った。

「恥ずかしいから後ろに向いてくれないか」

「なんで？ いいじゃん。」

「あんな。やっぱりその……なんつーか……いいから後ろを向けコラ！」

「分かったよ。全く……」

そう由美は言うてから、後ろを向き俺の部屋のマンガ本を読みはじめた。

よし、さっさと着替えないと……

制服を着てと、あ、そうだ髪型も固めないと……

別に俺らが行ってる高校は普通の公立高校なので多少の生活の乱れでガミガミ言われる事はない。

「浩、まだー」

俺のベットに寝ころびながらマンガを読むコラ。

「よし、セット完了。早く行くぞ由美」

俺は急いで家から出た。

「ねえ浩。学校までどっちが早く着くか競争しない？まあ、僕が勝つだろうけど」

言ってくれるじゃないの。百メートル十二秒フラットの俺のスピードを舐めんなよ。

「おう、その挑戦のつたー！。じゃあ負けた奴は何かしらの罰ゲームだからな」

「いいよ。じゃあね、僕が勝つたら一緒にお風呂に入ってよ」

「……………」

「どうしたの？黙りこんで」

「お前はバカかああああ」

「なんで別にいいじゃん。昨日僕を男と認めてくれたじゃん」

なぜ、そこに持っていく。

「だめに決まってるだろうが。それはそれ、これはこれだ」

「じゃあ浩が勝つたらどうするのさー」

俺？俺ねー

「俺が勝つたら……俺の許可なしに部屋に入る事は禁止な。破ったら俺はお前を女の子として一生扱うぞ」

「絶対に僕負けないから」

(ゴゴゴゴゴゴ)

由美の周りに熱いオーラが…

「いや、無断で入んなければいいだけの話だから……そこまで気合い入れなくても」

「行くよ浩」

「おう」

(よい。ドン)

第五話「男の約束」

「ゴール♪やったー、僕の勝ちー」

「ぜえぜえ。ゴホッ、ぜえ、ぜえ、くそ負け…た」

俺は全てのエネルギーを消耗し、学校の門の前で膝をガックシとつけた。俺が今思っている全エネルギーとは、体力もそうだが、こいつに負けてしまったと言う精神的エネルギーの方が大きい。

また…負けた。サッカーでも勝てないし、昨日やったバスケットでも圧倒的に由美チームの完全勝利だった。陸上では絶対の自信があったのだがやはり勝てない。なぜだー！ー！ー！

「浩、大丈夫。目が完全にあっちの世界にいつちゃってるんだけど」

「……………え？…大丈夫大丈夫。気にすんな」

「本当に？まあ、あんだだけ自信満々に言っただけ負けたのはショックだと思っけど」

グサ！

「やっぱり浩は僕に一生スポーツでは勝てないんじゃないの」

グサ！

スポーツまんの俺からしたら、この一言一言は俺の心に深く突き刺さる感じがする。

《キーンコーンカーンコーン》

《みなさんおはようございます。始業式がもうすぐ始まりますので廊下にすみやかに…》

「やっべ、こんな事してる暇じゃねーよ。おい由美、早く行かないと…ってあれ？」

俺が由美を呼んだ時にはもうその場所には姿を消していた。

「あのヤロー。人を勝つてに置いていきやがってー」

俺はフラフラの足に一発気合いを入れてダッシュで上靴を履き、そして階段を登り、教室に着いた。

「おい浩！！遅いぞ遅刻だぞ遅刻」

担任の先生が怒鳴り声をあげて俺に言う。

「すみません」

ム力つくが俺が悪いので一応謝つとく。

「どうした浩？汗がすげーぞ。」

「朝から運動でもしてきたのか？」

同じクラスの男子が苦しそうにしている俺に問いかける。

「フー、まあーな。いろいろあつて」

そういえば由美はどこへ行った。あいつが見当たらん。勝つてに先に行きやがつて…

ちなみに由美も俺と同じクラスだ。しかも中学校の時も三回クラス替えがあるうちに二回とも同じクラスになったから。神様のいたずらなのかな。

と言うのは別に良いのだが…それより奴はどこだ？

「おい田辺。由美知らないか？」

「さっきまでおったけど…」

「…ったく。由美の奴。どこにいきやがった。もうすぐ始業式が始まるっていつのに」

（トントン）

誰かが俺の肩を叩く。

「なんだよ」

「僕ならここにいるけど」

「?…いつからいた」

「今」

「どこに行ってたんだ」

「トイレだよ」

その言葉を聞いた田辺は手をポンと叩き俺に言った。

「あ、そういえば由美ちゃんがトイレに入るのを見たわ」

今頃気づくなよ。

まあ、元々こいつはいつもボートしてる奴だからな。聞いた俺がバカだったよ。

「もうすぐ始業式が始まるぞ。廊下にちゃんと整列しろ」

先生のかけ声でクラスみんながすばやく整列する。この担任、結構やかましく、短気なので俺からしたら嫌いな先生ベスト5に入る。

「浩ー」

隣の由美がにやけながら俺に向かって言う。

「勝負は僕が勝ったから浩が罰ゲームね。僕の言う事ちゃんと聞いてよ」

しかたない。勝負だからな。

「一緒にお風呂に入る事。たまに僕が《一緒にお風呂入ろう》と言っても拒否してきたから。今度は絶対だからね」

「だーかーらー、それは無理に決まってるだろうがああ」

「おい！中原うるさいぞ！」

俺の怒鳴り声にまたしても担任がキレる。今は俺が悪かった。始業式前だもんな。

「男は一回言った約束は守らないと」

由美が俺に向かって偉そうに言う。

「約束も何も…ダメなものはダメ」

「いいじゃん。僕を男と思ってくれるなら」

なかなか風呂の事から引かねーなコイツ。

「もう一回言っぞ。ダメなものは…」

「はい、静かに。体育館に入場するぞ。」

俺の言葉は担任の掛け声で見事に消された。

「じゃあ決定ね、浩」

なんでそうなるんだよ。

第六話「勝った」(前書き)

物語の視点が由美になったり浩になったりするのでご了承ください。

第六話「勝った」

今は学校の始業式が終わり、浩と一緒に自宅に帰っているところ。正直、始業式はきつかった。校長先生がつまらない話を永遠にだらだと話すものだから、足は痛くて、腰も痛いし。なにより、席に座っている先生の一部は眠っている人もいたしね。

「あー、キツかった。校長って話長いよねー」

僕は、口を大きく開け、あくびをした。

「おい、口を開けすぎ、みっともないぞ」

「くしゃみの時、口をおさえない方がみっともないと思うけど……」

「……」

「そうでしょ」

「そのとおりです。人の事言えませんでした」

浩が頭をさげながら言った。

こういった浩の反応はいつ見ても面白い。一軒家が立ち並ぶ道を歩きながら僕は思う。こんなどうでもいい会話をするだけだけれども、なぜか、それが嬉しくてたまらない。

僕って変なのかな？

「ねえ、浩」

「何？」

「今日、僕が浩の家に泊まりにいくからね」

そう僕が言った瞬間、浩が僕の目を《ギロツ！！》と見つめた。

「何？その眼。何か不満でも……家が隣どおしなんだから別にいいじゃん。中学二年くらいまではいつも泊まりにいったんだから」

「いや、そういう意味じゃなくてさー。なぜ、いきなりそうなるのかなー、と思って」

浩は何か困った顔をしている。何がそんなにいやなのだろう。

「僕が泊まるのが嫌なわけ」

「違う違う。えーと、泊まってどうするのかなー、と思って」

歩道の信号が赤になり僕と浩は立ち止まる。

「一緒にお風呂に入るって約束したでしょ」

「……」

浩はその言葉を聞いて黙りこんだ。

「約束破るつもり。男とってくれるなら僕の裸を見ても別にどつてことないでしょ」

その言葉を聞いて浩の口が開いた。

「でも、明日学校だし…」

「制服とか一緒に持っていくから学校に行く時間に支障はないよ」

信号の色が青に変わった。

「意志はかたいのね」

浩は頭を抱えまま歩道を歩きだした。

「勝った！」

僕はガッツポーズを作り、再び浩の後を追った。

第七話「ありがとう」

「るんるんるんるんるんるん」

今、僕は浩の家に宿泊中。これで何回目になるのだろうか。浩の親も《どうぞ！由美ちゃん、遠慮せず泊まってって》と言ってくれたし、自分では第二の自宅みたいな感じがする。

で、なんで僕が鼻歌を歌っているのかと言つと、

「ねえー、浩。シャンプー取つて」

「つたく、自分で取れつーの」

そうです。今は、浩と一緒に入浴中。

しかし、浩はずっと後ろを向いたまま僕と会話をしている。

「俺、もう、風呂から出ていいかな？」

逃げ腰の浩

「だーめ。なんか一緒に話そうよ」

そう僕が言つのを聞き流しながらお風呂の出口に向かう浩。

「ちょっとー、こら！逃げるなー」

「……」

「いくじなし！」

「……」

「運動音痴！」

「……」

「……ま〜ざ〜こ〜ん」

「誰がマザコンだコラァァ」

やっと反応したか。

しかし、こっちに振り向いた瞬間。また、目をそらしながら後ろを向いた。

「もう、何恥ずかしがってんの？タオルを巻いてるんだからちゃんと人の目を見てよ」

浩の顔がなぜか、真っ赤に染まっている。

はー、男らしくないな。男ならもっと《ビシッ》としてよね。

「お風呂入ろうよ、浩。」

「分かった分かった。じゃあ、お互い後ろ向きなら入ってやるよ」

「《入ってやるよ》じゃなくて、は・い・る・の」

そう僕が言つと、渋々、浩はお風呂に入る。そして、僕も続いて後

る向きの体制で入った。

《ザップーン》

お風呂のお湯が二人が入ったせいで溢れだしてきた。

「はぁー、気持ちー」

やっぱり、お風呂はいいなー。体も心もリラックスって感じ。

「…そうか？普通じゃね」

呆気ない浩の一言。

気分が台無しだよ、もう…

ちなみに浩の家は、一般の家からしたら結構大きいほうで、勿論、風呂場もなかなかの大きさ。

大人が三人入ってちょうどいい感じかな。

僕の家とは大違いだよ。ちよつと大げさに言いすぎたかな。……
そして、いきなりだが少し質問を試みる。

「ねえ、浩」

「ん？」

「僕って変なのかな？」

あまり人には言えない質問を浩にぶつけてみる。

「何が？」

「いや…色々…」

なぜ、こんな質問をしたのか分からない。前にも同じような質問をしたのだが…

決まって浩は

「普通なんじゃないの」

いつもの答えを返してきた。

「ねえ、普通ってなんなの？よく分からないんだけど」

浩が僕の肩を叩いた。

「ん？…わ！何すんのさー」

僕が振り向いた瞬間、顔にお湯が…

「よし、命中。すごいだろ俺の水鉄砲」

笑いながら水鉄砲を連射する浩。

お湯が目に入り、手で擦る僕。

「目にお湯が入ったー」

「おら！どうだ。今までの恨みだコノヤロー」

「恨みって…なんのだよー」

「色々あつて分からないな」

――――

――

――

十分後……

僕もお風呂のお湯を浩の顔面にかけたり、かけ返されたりして、風呂場はお湯でビッショビッショ。

なんかもう、さっき僕がした質問がバカバカしくなってきた。っていうか忘れてたよ。

「ふうー、…楽しかった」

浩が笑いながら言う。

もう、後ろ向きで話をしてるのではなく、僕の正面に向かって普通に浩は喋っていた。

なんか分からないけど嬉しいな。

なんでだろ？

「ねえ、浩」

「プハ！何？」

「ありがとね」

「……何が？」

「い・ろ・い・ろとね」

僕はそう言ってお風呂からあがった。

「ちょっ！何、自分だけあがってんだよ」

「だって、のぼせちゃうじゃん」

「……そうきたか」

浩はそう言いながらブクブクと頭までお湯に浸かった。

《浩ー！夜ご飯が出来たわよ！。由美ちゃんも早くあがってらっしゃいな》

「あ！浩のお母さん。もうあがらないと……じゃあ先にあがるからね」

浩はまだ、全身ゆぶねに浸かっている。

「聞いてるの？」

その答えに浩は片腕を外に出し、親指を《グッ》と指した。

もう、何やってるんだか……

第八話「プロレス」

今、僕はパジャマではなく、浩のジャージを着用している。

パジャマでも良いのだが、やっぱりジャージの方が動きやすいので…

そして、浩のお母さんが作ってくれた夕食を食べ終え、浩の部屋に行く。

中原家の家族の人数は、料理が旨い母親と、僕のお父さんと同じく、滅多に家に帰らない父親と本人の浩の三人家族。浩には僕みたいに兄弟や姉妹はいない。

僕からしたら弟の大介は最近、反抗期なのか結構うざくてしかたない事も…

あ！《うざい》とかそういう言葉は使っちゃだめだね。でも、やっぱりやかましい事には変わりはないんだけど…

「なんで俺の部屋に来るんだよ。親父の部屋が空いてるからそこ使ってくれ」

「いいじゃん♪いいじゃん♪…気にしない気にしない♪」

浩は大きいため息をつき、僕を部屋に入れてくれた。

ちなみに浩の部屋は二階に上がり、廊下の一番端にある。そして、その隣が浩の父親の部屋である。

まあ、滅多に帰ってこないから、家族の色々な物置として活用されているらしいよ。

「じゃあ、俺はベットで寝るから、由美はこれで寝な」

そう浩は言い、床に薄っぺらい布団を一枚ひいた。

《……!》

勿論、僕はこの差に反論する。

「ずーるーい!僕、そっちのベットがいいんだけど」

「仕方ないだろ。二人でベットで寝るわけにもいかないんだから」

僕は顔を《プー》と膨らませた。

「何か嫌な事があると由美はいつもそうするよな」

浩は半笑いしながらベットに入った。

「えー、もう寝んの?何かして遊ばない?」

「やだ!」

呆気なく却下されちゃいました。

「ねえ、浩」

「なんだよ？もう寝ろ」

僕は浩の上に大きくジャンプをし、《ドス！》という音をたてながら上に乗った。

「ゴフアアアア！」

浩は、変な叫び声をあげながらベツトで脱力する。

「由…美、お前…な！」

相当痛かったのだろう。小声で僕に向かって何かを言う。

「そこをどけ！コラアアア」

いきなり大声をあげ、僕をどかした。

「痛いなー、もう…。暇だから何かしようよ」

その僕の答えに浩は

「そんなに何かしたいのならプロレスでもしてやるぜえええ」

僕に乗られたお腹を抑えながら浩が突進してきた。

「プロレス…負けないもんね」

《ゴス！ゴス！》

《オラアアア！バックドロップ！》

《甘い！バックドロップ返し》

《グフアア！くそ！ちょっと、待って、たんまたんま》

《問答無用！》

《ギャアアアア…》

二十分後…

浩、ノックアウト。

あー、楽しかった。

あれ？なんか眠くなってきた。

浩のベットで寝ちゃおうっと。

「イテテテ…っておい、俺のベットで寝るな」

「ZZZZZ…」

「ふー、全く。……………しゃーねなー。こいつと一緒に寝るか」

第九話「不味かったけど、ありがとな」

朝、僕は小鳥のさえずりを聞き目を覚ました。窓の外から見た空はどんより雲りぎみで雪がちらついていた。

「んー、もう朝かー」

僕は目を擦りながらベツトから起きあがる。

隣には今だ爆睡中の浩がいた。

「ねえ、浩。朝だよ」

浩の体を揺すりながら僕は言うが起きる気配が全くない。

それにしても今日は今まで以上に寒いなー。ジャージだけの服装では足りなかったかな。

そんな事を頭の中で思い、窓の外を見たら一面真っ白の雪景色になっていた。僕らの家の前の道路は小道なので滅多に車は通らないし、人も朝早くはほとんど通らない。なので、まだ誰も雪の上には乗っていないので真っ白だ。

…とその時、

「んーなんだ、んーもう朝か？」

ベツトから起き、浩は体を《グー》と伸ばす。

やっと起きたか。

「今、何時だ由美」

僕は左に付けている腕時計を見て浩に言った。ちなみに浩の部屋には時計はない。いつも、何かの勘で起きるらしい。

「えーと、今は七時だよ」

「なんだ！まだ七時かよ。じゃあ、もう三十分寝るわ」

そう言っただけで布団に再び潜る。

「もう起きろろろ」

僕は浩から掛け布団を奪う。

「ちよっ！由美！寒いつて」

掛け布団を再び奪え返そうとする浩。

――

――

五分後…

寝る事をあきらめた浩は渋々、学生服に着替え学校に行く準備をす

る。僕もセーラー服に着替える。
一応、お互い後ろ向きの状態で…

勿論、浩がそうしろと言ったんだけどね。昨日、一緒にお風呂に入
ったんだから別に恥ずかしがる事はないのに…

「よし、着替え終わり」

僕は、ほかの女子みたいに化粧とか髪の毛などの整えはしないので
着替えて身だしなみまでの時間は五分つてところ。
髪の毛は元々は短いから整えなくていいしね。

「浩、まだー」

後ろを振り向くと学生服に着替え終わった浩が髪の毛にワックスを
塗っている。

「先に下に行つてくれ。多分まだ、あのバカ親は爆睡中と思うか
らさー。勝手にパンとか何か食べていいから。ワックスが乾くま
でまだ時間がかかるしよ」

「はいー!」

僕はその一言を言ってから下の階に降りた。そして、キッチンに行
き…

…《よし!》…

――――

――――

――――

二十分後…

僕と浩は朝ご飯が並ぶテーブルに向かい合わせて座っていた。ちなみに朝ご飯は僕が作りました。

「これ何？」

浩は僕が作ったチャーハンに向かって指を指す。

「チャーハンだけど」

「…チャーハンだったのか！俺はてっきり、犬の食いもんかと」

《ムカ！》

せつかく人が作ってあげたのに…

まあ、確かに見た目は悪いけど…

「食べたらず以外に美味しいもんなんだよ」

僕はそう言い、チャーハンを一口食べた。

《…ウグ！》

「どうした由美。顔色悪いぞ」

「ちょっとトイレに行ってくる」

僕は席を立ち、一目散へトイレに向かった。

「やっぱり自分でも不味かったんだな。……せっかく作ったんだから一口食ってみるか」

《パク》

《グホオオオオ！》

「美味いとは言えない味だな……でもわざわざ作ってくれてサンキューな由美」

第十話「頭の中に浮かぶ浩の顔」

寒い教室に冷たい机。公立高校なので暖房はなし。
唯一の暖かさといったら生徒達の体温の温もりだけ…

私立高校は暖房が効いてて暖かいんだろうな。

今僕は、体育の授業が終わり体操服からセーラー服に着替え中。
今日は運動場いっぱい雪が積もっていて、見た目は綺麗なのだけれどはつきり言ってる寒いとしか言いようがなかった。
かき氷にして食べちゃいたいくらいのフワフワした雪だったけどね。

《はー、寒！》

《さーむーいーよ》

着替え中の女子達はみんな足を《ブルブル》いわせている。

ちなみに男子達は体育館にあるロッカーで着替えをしている。

「ねえ、由美」

いきなり誰かが僕の後ろから声をかけてきたので少しびっくりしてしまった。

「あ、何？原田さん」

僕の目を《ジー》と見つめた後、原田さんは何かを納得したように言葉を返した。

「由美って…何か変わったよね」

「え？何が…」

質問の意味がいまいち分からない。

「なんか違うのよね、今までと。いよいよ由美も恋の季節かな」

「な！何を…僕が恋なんてするわけないじゃん。知ってるでしょ、僕の性格」

なぜかは分からないが顔が真っ赤になってしまった。

「あ！顔がトマトのように赤くなってる！凶星じゃないの？」

「違っつてば！僕に限ってそんな事…そんな…」

言葉が詰まってしまう。言おうとするのだがなぜか言葉が出てこない。

そして、着替え終わった女子達が僕達の会話を聞いていたのだろう。

《由美も女の子ー》

《ヒューッヒューッ》

《私も男をゲットして冬のデートをしたいなー》

会話がもう僕の恋愛の話とか、冬のデートをどうするとか…

僕は興味ないのに…

ないはずなのだけれど…

なぜ、浩の顔が僕の頭に浮かんでくるのだろうか？

「ま、男の子としての由美もいいけど、やっぱり女の子としての由美も見たいわ」

僕の頭をポンポン叩きながら原田さんは次の授業の準備をし始めた。

このクラスの人達のほとんどは僕の《心の病気》…と言っているのかな。それを理解してくれている。でも中には、ほかのクラスの人達で僕の事をからかってくる人達もいるのも事実。僕がその事で心に傷をおったときなど、真っ先に声をかけてくれるのが原田さん。そして、それを理解してくれる人達。だから僕はこうして学校に堂々と胸を張って行けるのだらうと思う。

《あ！男子達が帰ってきたわよ。みんな早く着替えて》

一人の女子が着替え終わった男子達がこちらにくるのを確認しながら、みんなに合図をする。

まあ、女子の見張り役っぽい感じ。

男子：《おーい、もう着替えたかー》

女子：《もうちょっと待ちなさいよ。覗いたらぶち殺すから》

男子：《…こえーな。今の女子って》

外の男子がヒソヒソとほかの男子と喋ってるつもりらしいが、はっきり言って普通に聞こえてます。

女子：《何か言った！》

男子：《何も…》

まあ、いつもこんな感じの明るいクラス。だから僕もこのクラスに馴染めるのだろう。

しかし、さっきの恋愛の話の時に浩の顔が出てきたのは一体…

第十話「頭の中に浮かぶ浩の顔」(後書き)

少し更新が遅れてしまいました。すみません。

第十一話「商店街でお買い物〈前編〉」

今日は日曜日！

空はすんだ水のように青く輝いている。

雲一つない空の下で僕と浩は今、人混みいっぱい商店街に来ている。

なぜ商店街にいるのかと言うと…

今から三十分前…

「おい由美ー、いるかー」

僕の家の外から浩が大きな声を出して言う。

「……」

無視無視。たまにの休みくらいゆつくりしたいんだから。

多分、《サッカーしようぜ！》とか《バスケットしようぜ！》とかそんなんだろう。昨日の土曜日にバスケットの試合をしたばかりなので今日は骨休み骨休み♪

「ちょっと買い物に付き合ってくんねーかな」

なんで僕が…

「お前が好きな塩大福を買ってやるからさー」

ピク！

「ちょっと運動靴買いに行くだけだからさー」

「……」

「ちえっ！寝てるのか！じゃあ違う奴誘うからいいや」

僕は二階の自分の部屋の窓を開ける。

「塩大福十個…それで付き合っただけでもいいよ」

あー、せっかくの休み時間が…

でも塩大福食べたいし…

とにかく僕は塩大福系ならほとんどが好物なのでついついスーパーやコンビニなどで買ってしまっただけ…

…で今に至っているというわけ。

「なんで靴を買うだけなのに商店街に行くわけ？」

僕は片手に塩大福を持ちそれを頼む。

「この商店街に一つだけ靴屋があったら。そこが今日、安くなってるからな。…つーかお前大福食うの早いな」

十個あった大福は全て僕の胃の中に収まってしまった。

やっぱりおいしい♪

それにしても、ここの商店街にいる人達ってよく見るとオバサンばかり。

それとかなり派手な服を着ている人や、化粧を濃ゆく顔に塗っている人など、マダムみたいな人ばかりで、僕達みたいな若者があまり見あたらない。なので、僕らがつつい目立ってしまう気がする。気のせいかも知れないけど…

《いらっしやい！いらっしやい！魚が安いよ》

《今日限り、この蟹がお買い得だよ》

やっぱり商店街は活気がある。そして、《安い》と言う言葉に飛びつく主婦達を見てるとなんだか笑えてくる。

商店街の中を歩きはじめ十分がたちようやく目的の靴屋に到着した。

「はぁー、疲れた。早く済ませてよね浩」

「分かった分かった。お前も何か買ったらどうだ？隣に服屋があるから寄ってみるよ。いつも同じような服を着てるからたまには変えたらどうだ？」

今日着ている僕の服装はいたってシンプルだと自分では思う。赤色のモコモコした服を着てその上に茶色いダウンジャケットを羽織っている。下は勿論ジーンズを履き、頭にはNIKEの帽子をかぶっている。

まあ、普通の若者の格好であろう。自分ではこういった服装は気に

入ってるので別に新しい服なんかいらなただけど…

まあ、浩が新しい運動靴を選んでる間に、暇つぶしに服屋に寄る事にした。

それほど大きい店ではない。個人経営の小さな服屋という印象が高
いかな。

中に入ると人はさほどおらず、どこか懐かしい感じが漂ってくる。

「何かお探しですか？」

この店の女の店員が僕に話かけてきた。綺麗な服を無駄なく着こな
しているその姿が少し羨ましくも思えた。
前はそんな事なんか考えもしなかったのに…

第十一話「商店街でお買い物へ前編」(後書き)

次の物語に続きます。

第十二話「商店街でお買い物〈後編〉」

どうしてこうなってしまったのだろうか？

今僕が着ている服装は、可愛い熊の絵がついているシャツを着て、その上にはピンク色の、僕にしては大きすぎてダボダボしたパーカを羽織っている。

そして下は今まで僕がはいた事がないようなグレー色のミニスカートをはいている。

「お！いい感じ」

女の店員は僕を見るなりいきなり《あら？可愛い人！》と言ってきて《なんか格好が男の子っぽいわね》とか言いだしたと思ったら、ほぼ無理矢理に僕の今着ている服を脱がして更衣室に連れていき…

…

…そして今に至る…

「え〜と帽子は…これなんかどう？」

店員はそう言い、ブルーのニット帽を差し出した。またもや可愛い熊の絵がついているし…

「いや、あの…この格好はちょっと」

「あら？可愛いのに。どう？安くするわよ」

「いや、本当にこの格好はちょっと…」

「こんなに素敵なのに…じゃあ、これ全部で三千元！普通の半値以下よ。可愛いからオマケしちゃう」

どうしても僕に買わせたいのかなこの人。

三千元という値段はかなり安いと思うがこの服装はさすがにキツイというより恥ずかしい。

僕が必死に断る中、片手に新しいスポーツシューズが入っているビニール袋を持った浩が僕を呼びに来た。

そして浩は僕を見るなり黙りこんで、一歩後ろにさがった。

「……」

目を見開いたまま僕を見つめる。

「…それ…買うの？」

浩は僕に指をさし言った。

「いや、これはちが…」

「可愛いじゃん！」

ん？反応が少し違うな。浩の事だから《似合わねー、》とか《ダサいなー》とか言ってくるだろうと思っていただけ。

まあ、そう言ってくれたのは嬉しいけどやっぱり…

「すみませんやっぱり…」

そう言う僕の言葉を遮り、女の店員が浩に向かっていき、

「そうですねー。やっぱり可愛いでしょ！あなたは彼氏ですよ。是非、この服とスカートを…安いですよ。全部で三千円です」

――――

――

――

五分後… 商店街の帰り…

僕の反対を全ておしきり結局、この服を買わされてしまった。前着てた服は、浩が持っていたリュックに入れてもらい、グレー色のミニスカに熊の絵がついたピンクのパーカを着用している。

なぜ、嫌いな服を着て商店街を歩いているのかと言うと、浩が一回でいいからその格好で外を歩いたら…塩大福五つ買ってやるから《と言われたから…
食べ物誘惑には勝てませんでした。

「どう？そついった服装？」

僕はこの服装の恥ずかしさを塩大福を食べながらまぎらわす。

「ミニスカートって動きづらいし、なによりちょっと恥ずかしいんだけど」

下半身をモジモジさせる僕。

「そうか？そういう由美もいいと思うけどな」

《ドキ！！》

「ま！またー。嘘つくのうまいね浩はー」

なんでこんな言葉にわざわざ変な気分になるんだよ僕は。
なんか体が熱いよーな。

黙りこんだ僕を見て浩が一言。

「何、黙ってんだよ。嘘に決まってるだろ」

その言葉になぜか知らないが…

「あーそーですね」

不機嫌になってしまった僕。

心のどこかで何か浩に言われてほしいとも思っていたのだろうか…

僕は浩に向かってお馴染みの顔つきで頬を《プー》と膨らませた。

「……………」

それを見て浩は…

「何？やっぱり《素敵だよ》とか《綺麗だね》とか言われるのを希望してんのか！」

からかった浩の言葉に僕は最後の塩大福を食べながら言う。

「ホウ！ヒラハイ《もう！知らない》」

大福を一気に口に頬張って言った僕の言葉に浩は《なんて？》と言う顔をする。

まあ、この服は僕の部屋の押し入れにでも隠しておこう。弟にでも見つかったら多分、からかってくるだろうから。

しかし、この服装…

今思えば、まんざらでもないかも…

多分だけだね。

第十二話「商店街でお買い物へ後編」(後書き)

出来たら評価や感想をお願いしますね。

第十三話「カマクラと心の変化」

《フフン♪フフン♪フフン♪》

学校が終わり、家に帰宅をしたら僕の家の庭に雪がたっぷりと積もっていた。

学校に行く時は雪はまだ降っておらず、昼頃に大粒の雪がヒラヒラと降ってきた。帰り道も雪に埋もれてすごかったが、自分の家の庭は誰も手をつけていなかったので積もりに積もっていた。

…で僕が今、鼻歌を歌いながら何をやってるのかと言うと…

「大介！その雪、ちゃんと持ってきてよ」

「姉貴ー、本当にカマクラなんか作るの？」

大介は嫌々、雪を集める。

「寒いからやめようよ」

「いいから口より手を動かして」

僕は至って真剣。

まさかこんなに雪が積もるなんて思わなかったからね。この辺りはそこまで雪は積もったりしないんだが今日は普段より格段に気温が低く、路面が凍結するほど。なのでふり積もった雪は溶ける気配がない。さすがに大きいカマクラは作れないので大人が二人でギリギリ入れるくらいのもを作ろうと思う。

「姉貴ー、俺ギブアップ」

大介は手をさすりながら家の中に入っていった。

もう根性がないんだから…

でも高校生でこんな事やってるのって僕ぐらいだったりして…

しかも、なんか雪を見ると何か作りたくなるんだよね。

僕が小学生の時はよく小さい雪だるまをあっちこっちに作ってたっけ。

――――

――

小さい頃を思い浮かべながら作る事、三時間。形はぎこちないが小さいカマクラが完成した。手は赤く冷たくなり凍傷になっちゃったけど…

結局全部作るのに夜の八時までかかってしまった。

今日、家にいるのは大介と僕だけ。

お母さんは友達の家で飲み会に行っており明日の朝まで帰ってはない。

お父さんはいつも通り仕事で忙しく家にはいない。

ふと大介のいる部屋を見ると、さっきまで明かりがついていた部屋が暗くなっている。

リビングや台所を覗いても大介の姿はない。

多分、疲れて寝てしまったのだろう。

僕は白い息を吐きながら、家の中に戻ろうとする。

……とその時、

「お！カマクラじゃん」

その声に驚き、後ろを振り向くと浩が玄関に立っていた。

「あ！浩…、何やってんの？」

浩は僕が作ったカマクラを見ながら答えた。

「いや、今日は確か、お前の親がいないんだろう。だから、夜飯を持ってきたんだけど…」

「わー！ありがとう。ちょうどお腹ぺコぺコだったんだよ」

そういえば夜ご飯、まだ食べてなかったんだ。
大介は寝てるから起こさなくていいかな…

「なあ、由美」

「何？」

浩は僕が作ったカマクラに指をさし言った。

「あれ、お前が作ったんだろう？」

「もちろん」

自慢げに答える僕。

「あのカマクラの中で一緒に夜飯食わないか？以外にカマクラの中は暖かいもんなんだぜ」

「いいけど、壊れるかもよ。ほとんど僕一人で作ったやつだから」

「壊れたら壊れたらでいいんじゃないの。明日はどうせ天気予報によると雨らしいし…今のうちにカマクラに入っておこうぜ」

…という事で懐中電灯と水筒に熱いお茶を入れ、カマクラの中に持っていく。

「よいしょっと…んゝ、やっぱり少し狭いかも」

「結構いいじゃん。狭いカマクラも俺は結構好きだよ」

「そうかな？」

浩は袋から焼き芋を取り出す。

「さっき焼き芋を買ったんだ！…でも、もう冷めちゃったな。どうする？たべる？」

少しガツカリした顔で浩は言う。

「ありがたく、いただくね」

笑顔で僕は浩から焼き芋を貰い、口に運ぶ。

冷めてはいたが甘くて美味しかった。皮も以外にいけるかも…

「なあ、由美」

「ファヒ？《何？》」

焼き芋を口に頬ばりながら僕は答える。

「やっぱりあったかいだろカマクラの中って」

頬張った焼き芋をお茶で喉の奥へと流す。少し、熱かったけどね。

「そうだね。やっぱりこんな小さいカマクラに二人も入ると暖くなるもんなんだね」

僕と浩はお互いぎゅうぎゅうの状態。

なのでちよっぴり恥ずかしい気分。

浩とこんな形で会話をかわす事は僕にとって嬉しいのだが、とにかくお互い顔がどうしても近くになって話をしてしまう。それが…なんか…なんといったらいいか

《何を考えてるんだ僕は。僕は男！そう男だろ。浩も理解してくれただじゃないか。これじゃー、まるで…》

僕は必死に頭の中を整理しようとする。

「ん？どうした由美。何か考え事か？」

浩の顔が僕に近づく。

《カー》

浩の顔が近づき僕の顔は真っ赤になってしまった。

「な…なんでもないよ…多分…」

「多分って…なんだよ」

「いや、別に気にしないでいいから…」

そう僕が言った瞬間、カマクラが一気に崩れ落ちてきた。

「うわ!」

「うそ! まじで」

カマクラの雪に埋もれてしまった僕ら…

雪の中で僕らは馬乗りになった状態になっていた。

顔と顔との空間は空いていて、僕も浩も見つめあったまま。

…と言うよりこの場をどうすればよいかお互い硬直しあっている。

「え〜と、ごめん由美。今どくから…」

「う、うん」

浩がゆっくり動こうとした瞬間、

「やっぱりだめ！」

僕は思わず叫んでしまった。
何を言ってるんだよ僕は…

「もう少しこのままがいい」

もう頭の考えと浩に言っている事がめちゃくちゃになっている。

僕が言った言葉に浩は…

「ゆゆゆ由美がこここのままでいいいいっていうなら…」

明らかに動揺している浩。

なんだろうこの気持ち。すごいドキドキして心臓が熱い。
明らかに前の僕と違う。

浩が僕を初めてスポーツに誘った時…

浩が僕の考えや心を全て受け止めてくれた時…

日に日に、何か僕の心は少しずつ変わってきているのかな。

「あと五分だけ…」

「お、おう」

…やっぱり変わってきているのかも知れないね。

第十三話「カメラと心の変化」(後書き)

投稿が少し遅くなりました。すみませんm(・・)m

第十四話「恥ずかしいー!!」

《ここのXとここのYを割ると…》

今は今日最後の授業、数学をしている最中。

一時間目のロングホームルームで、高校一年最後の席替えをして僕は一番前の席になってしまったよ。

…もう最悪…

そして浩はというと…

僕の隣の席になってしまった！

浩はよく授業中に睡眠タイムに入るので一番前の席になった事を後悔していると思う。勿論、先生から一番目がつくからね。

…と言う事は置いて、今日の朝から僕は浩の目を見れないでいる。

昨日のカマクラの出来事、あの事が今日になって《恥ずかしいー!!》とってしまったのだ。

崩れたカマクラの雪に埋もれながら僕と浩は見つめ合ったまま五分もあの状態。

しかもそれをお願いしたのは僕という事。

浩の顔を見るとあの時の状況が頭の中を駆け巡ってしまう。なので浩が僕と話す時、なるべく目をそらして話をしている。

《おい！上野》

「……」

返事がない僕に、数学の先生はゆっくり僕の耳元に近づき…

《授業を聞ーいーてーるーかー！ー！》

ほかの生徒も《ビクッ！》とするほどの声を僕の耳元で叫ぶ。

「は！はい」

僕はいきなり大声に驚き席を立つ。

「な！なんですか？」

《なんですか！じゃないぞ上野。ノートに先生が言った事を全然ま
とめてないじゃないか》

「う、ごめんなさい。ちょっとボーっとしてて」

《全く頼むよ…》

僕の背中を少し強く叩きながら数学の先生は再び黒板に向かいあつて、難しい公式を書き始めた。

書きそびれた部分を慌ててノートに写し、今日の全ての授業が終わった。

はつきり言つて、今日一日の授業は昨日の事で頭がいっぱいで手がつけられなかったよ。

昼休みも普段なら外でみんなとサッカーや、バスケットをするのだが、今日はそういう気分ではなかったので図書室に行き、ひたすら昨日の事を思っていた。

しかし、思えば思うほど体が熱くなってしまう。

今まで感じた事がなかったこの気持ちはなんだろうか？

「おーい生きてるかー」

浩が僕の顔の目の前で手を交互に動かす。

「……え！何？」

「何？じゃねえよ。今日の由美なんか変だぜ」

浩が僕の顔に近づきながら言う。

それに対して僕は目をそらしながら答えた。

「別に……」

浩は頭を掻きながら話を進めた。

「今日の朝会った時から気にはなっではいたんだがよー、なんで俺の目を見て話さないんだ？」

「それは……」

やばいよー!!
なんて言ったらいいんだろう。

言葉につまっている時に浩が僕の耳元で小さく囁いた。

「もしかして…昨日の事か？」

「……」

「凶星だな」

《カァー》

その言葉聞き、僕は顔が熱くなってしまった。

「浩はあの後、何も思わなかったの？」

「……いや、……そりゃー……まあ……少しばかり……」

浩も自分で言っておきながら答えがあいまいになっている。

「いや、昨日は昨日。今日は今日だぞ由美」

《???》

言葉の意味が分からないよ。

「何言ってるの？」

「あー！…もうとにかく昨日の話は終わり！ほら帰りのハウムル

ームが始まるぞ」

浩はそう言いながら学校のカバンに教科書やノートを入れ帰りの支度をする。

「ねえ浩、顔が赤いよ」

「……うつせーよ」

なんか立場が逆になってしまったような…

浩も昨日の事、何か思い続けていたのかな…

まあ、なんだかんだ言っただけだね。浩のそういったところを僕は気に入って

親友として…

……親友として??

それよりもっと大事な言葉が当てはまるような気が！

気のせいかな。

第十五話「高校生初の風邪!!母編」

《ピーピー!》

体温計を見ると熱が三十九度もあった。どうりできついはずだよ。
この状況で学校に行ってもボタンキューだな。

今の時間は朝の七時。昨日から《なんかダルいな》とは思っては
いたんだけど、まさかこんな事になるなんて…

――――

――

――

「いいこと由美。ちゃんと寝てなさいよ」

「分かった」

と言う事で高校生活初めて、僕は学校を欠席する事にした。

《ピーンポーン》

家のインターホンの鳴る音が聞こえる。

多分、浩だ!

いつもなら僕が迎えに行くのだが、時間がたっても来ないので浩が

来たのだろう。

「あ、おはようございます。あのー、由美はいますか？」

下の階から浩の声が聞こえる。

やっぱり浩だったか！

「ごめんなさいね。由美は今日ちょっと熱が出ちゃって。学校は欠席する事にしたのよ。あ！そうだ浩君、担任の先生にこの事を伝えてくれない？」

「あー、そうですか。あの由美が風邪を…あ、はい分かりました。じゃあ伝えておきますね。じゃあ由美にもお大事にと伝えてください」

僕は自分の部屋の窓からこっそりと浩を見送った。

「ゲホ！ゲホ！」

喉が痛いよー

頭痛がするよー

体が熱いよー

くそ、この苦痛を回避する事が可能なのはただ一つ。

…寝てしまおう…

寝てしまえば大丈夫だ。

よし寝るぞ！

僕はお母さんが持ってきてくれた氷枕に後頭部と首筋を当て睡眠モードにはいるうとする。

――――

――

「……」

だめだ！氷枕一つじゃ足りないよー！。

「お母さん」

体の熱さに耐えきれなくなり下の階にいるお母さんと呼ぶ。

「何ー！？？どうしたの？」

「氷枕を追加してー！ー！！」

「分かった。ちょっと待っててね」

《ゲホ！ゲホ！ゲホ》

やばい！今の叫び声で余計に喉の痛さが悪化したような気が…
病院に行ったほうがいいのかな。

「はーい！持ってきたわよ」

お母さんは両手で四つの氷枕を持ちながら部屋に入ってきた。

「四つも！そんなにいらないよ」

「いいのよ。熱の場合はとにかく体を冷やすことよ」

いや違うと思う。

冷やしすぎても余計に体を壊すような気がする。僕は思っよ。

「一つでいいからちょうだい」

僕はお母さんから氷枕を一つとり、足の先にのせる。

「もう。せつかく持ってきたのに……」

「二個あれば十分だから」

頭と足を冷やすだけで随分体が楽になるような感じがする。

「あら、そう……じゃあ、お母さんはちょっと出かけてくるけど大丈夫？」

僕のおデコに手を当てながらお母さんが心配そうに聞く。

「大丈夫だから……何かあったら自分で対処するから安心して」

「この熱で安心してと言われてもねー」

「だーいーじょーうーぶ」

出かけるのを迷っているお母さんに僕は喉が痛いのでゆっくり答える。

「…そう分かったわ。じゃあ少し遅くなるけど、ちゃんと安静にとくのよ」

お母さんはそう言って普段僕がスポーツをする時に飲んでいるアクエリアスをベットの横に置き、《由美…気合いで治すのよ》と無理難題な言葉をかけ出かけていった。

第十五話「高校生初の風邪！！母編」(後書き)

次回に続きます。

第十六話「高校生初の風邪！―浩編」

だめだ！

熱が全然下がらない。

お母さんが家を出て三時間。

僕は、もうぬるくなった氷枕を変えようと冷蔵庫の前に立っている。

《ゲホ！ゲホ！》

「きついよーー！！」

僕が冷蔵庫を開けようとした瞬間…

《ピンポーン》

インターホンの鳴る音がクラクラしている僕の頭に鳴り響いた。

くそ…誰だよ…

《ピンポーン》

「はい今、ゲホ！ゲホ！…開けます…」

何か言葉を言う度に喉が痛い。

玄関までの道のりが地平線の果てのように長く感じるよ。

僕はふらふらの手でドアを開ける。

《ガチャッ》

「…どちら様…」

僕はドアを開け、目の前のぼやけている人物に目をやる。

「よ！由美、風邪は大丈夫か？」

「え！なんで浩が…学校はどうしたの？」

「今日は三時間授業で学校は午前中で終わりだぜ」

そつえば昨日、先生がそんな事を言っていたような…
だめだ。思考回路がうまく働かない。

「おいおいふらふらしてるけど大丈夫か？」

「大丈夫…とは言えないね」

浩が僕の額に手を当てる。

「おい！体が熱いぞ。…そつえば由美のお母さんはどうしたんだ」

「出かけてる…」

「出かけてるって…俺が何か手伝おうか？」

「一人でもゲホ！大丈夫だからゲホ！ゲホ！……じゃあ明日ね」

僕が玄関のドアを閉めようとした瞬間、浩が閉めようとするドアに手をかけた。

「由美のお母さんが帰ってくるまで俺が面倒見てやるよ……」

浩は真剣な目で僕を見つめながら言った。

「いや、でもゲホ！迷惑はかけられないよ。それに風邪がうつるし……」

「大丈夫大丈夫。俺は免疫強いし……それに何かと大変だろ」

《ビューー！！》

冬の冷たい風がいきなり僕達に向かって吹きつけてくる。

「……じゃあ、……お言葉に甘えて……」

「おう！まかしとけ」

――――

――

――

《トントントン》

包丁を使う音が僕の部屋に響いてくる。多分二階の小さい台所で浩が料理を作っているのだろう。

《ピピ！》

さて、体温はいくつかな。

「ふー、三十九度か…」

あまり変わらないな。

ふと、窓の外を見てみると小さい子供二人がサッカーボールを蹴り合っている。

「はぁー、体を動かしたいなー」

一日家にいるのは僕にとって一番のストレスだからね。

「まずは風邪を治す事だぜ」

いきなり僕の耳元で浩の声がしたので少しびっくりしてしまった。

「もうー、横にいたんなら声くらいかけてよ」

「かけたじゃん！」

「いや、そうだけど」

「それより、熱はどうだった？」

僕は首を横にふる。

「そうか。まあ、俺が作った昼食でも食べて少しはよくなったらいんだけどよ」

「何！もう出来たの？」

と言う事で台所に移動する僕と浩。

そして僕の目の前には以外にも美味しそうな卵粥が…

「浩って…料理作れるんだね！」

「当たり前だろ。今日のお粥は自分でも結構の自信作だと思うぞ」

さっそく椅子に座りテーブルに置いてある卵粥を一口食べる。

「どうだ？」

感想を聞こうと、浩は僕に詰め寄ってくる。

「おうひいよ」

「なんて？」

「お・い・し・い・い・と言ったの」

その答えを聞き浩は《よし！》とガッツポーズをとる。

「由美ももつとマシな料理を作ればな」

「ん？それってどういう意味」

「前、由美が作ったチャーハンとかさ」

《カチン》

「このお粥…味が薄すぎるような」

ちよつと今の言葉にスネル僕…

「あ！うそうそ。今言った事は冗談だから…機嫌悪くしないでくれ
よー」

浩は慌てて僕に対して謝る。

すぐに自分が悪いと思ったら謝るところ。そこが浩の良いところな
んだけどね。

――――

――

――

「もう夕方の六時か」

僕は布団に入り、眠ろうとするのだが、なかなか寝つけなく時間ば

かり気にしている。

「ねえ、浩」

隣で漫画本を読んでいる浩を呼ぶ。

「ん？どうした？」

「パジャマが汗でびつしよりだから新しいのに取り替えたいんだけど手伝ってくれない？」

その言葉に浩は《え！》と言い少し戸惑っている。

「いや、着替えくらいだったら由美一人でも出来るだろ」

「だって汗を拭く時、背中は一人居ゃ出来ないじゃん」

「それは…そうだけど…」

もう、何を恥ずかしがってるんだか…

「最近お風呂に一緒に入った中でしょ」

なぜか分からないが浩は両手を自分の顔に叩きつけ《バチン！》という激しい音をたてて首を傾けた。

「何やってんの？」

「自分でも分からん」

顔に赤い手形がついている浩の顔を見て少し《クスッ》と笑ってしまった。

――

――

十五分後、熱いタオルで体を拭き終わり、新しいパジャマに着替えてスッキリした僕。

「どうしたの浩？顔から湯気が立ってるよ。もしかして風邪が移っちゃったの！」

「ちげーよ。一応お前は女の体なんだから少しは俺に遠慮してくれよ」

「いいじゃん、僕は男と思ってるし、浩ももう慣れたでしょ、こういうの」

「バカ！慣れるか」

結構ウブなんだな浩って。

次の日、僕の風邪はケロっと治っており、逆に浩が僕の風邪を貰ったみたいで学校を休んでしまった。

《俺は免疫が強いから大丈夫》とか言ってたくせに。

という事で僕は学校の帰りに浩の自宅に寄り、浩の親がいなかった
ので僕、特製の卵粥を作り浩に食べさせた。

その時、浩の容体がさらに悪化した事に僕はまだ気がつかなかった。

第十七話「市民プールとバレンタインに送る相手？」

「やつほー！！市民プールなんか久しぶりー」

「ちょっと原田さん、走らないで下さい。滑りますよ」

「もう、田辺は神経質よ。そんな事は気にしないものの」

僕の目の前で原田さんは温水プールに飛び込み、それを注意する監視員に頭を下げる田辺君。

「相変わらず元気一杯だな原田の奴」

僕の隣ではプールに入る前に準備体操をしている浩の姿があった。

水泳キャップを付けて光の反射でキラキラ光るゴーグルを着用して泳ぐき満々だ！

この市民プールは僕らのすむ街では一番大きく冬の間でも人が結構立ち寄ってくる。この場所を水泳部の部活の場として使っている中学生や、五十代や六十代のおばさん達がリハビリやダイエットを目的として水の中で歩行や、体操などをおこなっている光景が良く目立つ。

まあ、その事は置いといてと、いつも気になるのは僕のこの格好…

プールにいくたびに思うのだが僕からしたら嫌な姿だ。

自分の事を男とっていいながらもやっぱり女の子が着る水着を着てしまふはめになる。

…当たり前だが…

ちなみに今僕が着ている水着は高校で使っているスクール水着だ。市販されているのは派手なデザイン物や、肌を妙に見せるタイプの奴が多いのでスクール水着の方がマシと言えばマシだと僕は思う。僕の格好に比べて原田さんは、まあ、男で言えばセクシーな水着と言うのかな？

ひまわり模様の柄がついた黄色の…うん分かりやすく言えばキャミソールみたいな感じかな？

浩と田辺君は至って普通の海パン姿。

「おし！早く行こうぜ」

準備体操が終わり体をほぐした浩はキラキラ輝くゴーグルを着用し、プールの中へと入っていった。

「由美もはーやーくー！！」

原田さんの声が広い市民プール内を反響しながら僕の耳に届く。

「あ！今行くから」

僕もみんながいる場所へと行く。

この市民プールには二つのタイプがあり、一つは体操などをおこなうおばさん達や、小さい子供が遊ぶのに使う浅いプール。

二つめは水深が三メートルある上級者向けのプールでシンクロの練習や、水泳部の練習などで使われている。端には自由に遊べるペー
スがあり、僕らはそこで立ち泳ぎをしながら遊んでいる。

「どう！私の今日の水着」

昨日買ったばかりの水着を浩と田辺君と僕に見せつける原田さん。

「うーん、冬にひまわりはどうかと……どう思う浩」

「うんうん。俺も同じ事を思っていたところだ」

「あーんーたーらー」

原田さんの怒りの殺気を感じたのか、浩と田辺君は、

「やべ、急になんか泳ぎなくなってきた。ちょっと向こうまで泳ごうか浩」

「おーおう」

慌てて泳ぎだして一番向こうの端まで行ってしまった。

「全く、普通あそこはノリで《可愛いー！！素敵ですねー！！」

《とか言つもんでしょ。ねえ、由美》

二十五メートル先にいる浩と田辺君にバチバチと怒りの視線を浴びせる。

「冬にそういった水着も結構いいと思うよ」

「もうー！！やっぱり由美は私の味方ねー！！」

いきなり僕に抱きついてきたので少しばかりびっくりしてしまった。足が届かないから溺れちゃうよ原田さん。

「由美もさー。スクール水着じゃなくてこういった水着を着ればかなりイケてると思うんだけどなー。今度来る時はこの水着を貸そうか？」

「それだけは勘弁。学校の制服を着るのも結構ためらってるのに」

「嘘よ嘘。由美の性格は人一倍知っているんだから。もう冗談を本気にするのね」

クスクス笑いながら僕の肩を《ポンポン》と叩く。

――――

――

――

…三十分後…

浩と田辺君は二階にあるトレーニングルームへ行き、僕と原田さんは水中に仰向けの状態でぶかぶか浮きながら会話をしている。

「由美ってさー。バレンタインのチョコとか誰かにあげるの？」

耳が水に浸かっているのでうまく言葉が聞き取れなかった。

「はい？」

僕は仰向けの状態の姿勢を、立ち泳ぎの姿勢に戻す。

「バ・レ・ン・タ・イ・ンの事だよ」

原田さんも立ち泳ぎの姿勢に戻し僕に向かって真剣に喋りかける。

「バレンタインって男にチョコをあげるあれでしょ」

「勿論。由美は誰かにあげたりしないの？」

バレンタインねー。僕が生まれて十六年。バレンタインのチョコなんて男にあげた事など一度もない。

「そういう原田さんは？」

「もちろんあげるわよ。もてない男達に義理チョコをあげて、後のホワイトデーでたっぷり自分の欲しい物を買ってもらうのよ」

義理チヨコを貰う予定の男子達に冥福を祈るよ。

「僕は…なしだね」

「えー！…なんでー」

「誰かにあげたいとは思わないし…」

原田さんは腕組みをし《そうかー》…となにやら呟きながら頭の中で何かを考えついたのか僕の近くに寄ってきた。

「じゃあさー。好きとかそういう恋愛対象は抜きとして、中原君に今までの感謝としてチヨコをあげるのはどう？」

「感謝って…浩に感謝なんかしてたっけ？」

僕は人差し指をオデコに当てながら考える。

「細かい事は気にしないの！ちゃんとバレンタインの日に中原君にチヨコを一個でもいいからあげるのよ。案外期待してるかもよ」

ハハハ！

まさか…ね

「おーい由美、原田。水にばかり浸かってないでこっちに来いよ」

浩が二階にあるトレーニングルームから僕らを呼ぶ。

ん！田辺君の姿が下から見た限りでは見あたらないけど。

「ねえー、浩。田辺君はー」

下にいる僕は上を見上げながら浩に向かって叫ぶ。

「あいつはもうへばってて、床でダウンしてるよ」

「ふーん…分かった。今からそっちに行くね」

僕と原田さんはプールからあがって浩と田辺君の元へ行く。

「由美！チヨコよチヨコ」

「ハハハ…」

チヨコなんか作った事がないから分からないよ。

えーとじゃあバレンタインまではあと三日か…

勉強をしとかないと。

自分で言って情けないがチャーハンもろくに作れない僕だからきつとチヨコレートなんて作ってしまったたら激物的なものが生まれるだろっから…

第十八話「高木聖子の本命チョコとラブレター」(前書き)

バレンタインデーに投稿を合わせようとしたのですがバレンタインデーより一日早く投稿しちゃいました。

第十八話「高木聖子の本命チヨコとラブレター」

バレンタイン当日。

学校が終わり帰りの門の近くでは男子達に義理チヨコをあげる女子や、本命チヨコを恥ずかしそうに手渡す姿が目につく。

その中にはあの原田さんの姿も…

僕はと言うと原田さんが言ったとおりに一応、浩に手作りのチヨコレートを持ってきてはいるのだが味見を一切していない為、どんな風な仕上がりになっているかは僕も分からない。レシピどおりに作ったと思うので多分大丈夫だろう。

今までの感謝としてチヨコを渡すのだが、やはり少しばかり恥ずかしい。

まあ、渡す機会ならいつでもあるんだけどね。

なぜなら今は浩と一緒に下校中なので。

「浩はいくつチヨコ貰ったの」

「フフフ！知りたいか？」

え？もしかして結構貰ったりしてるのか！

「原田から一つは貰ったんだが…《ホワイトデーの日に私が欲しい○○○製の鞆をちょうだいね！》とか言ってきたやつだ」

犠牲者の一人が僕の横に！

そして浩が原田さんに貰ったチョコを僕に見せてくれたのだが…

どっからどう見ても包み紙に《十円》と書かれた文字が見えている。しかもたったの一つだけ。

明らかに妥協を通りこして超妥協なチョコレートだ。

これで〇〇〇製の靴を買って貰うのはどうかと思うが。

「ふーだからバレンタインなんか嫌いなんだよ。日本国民が外国の行事なんかするんじゃないやねーよ」

十円チョコを一口食べ涙目になりながら日本に向かって愚痴をこぼす。

んー、どうしよう？

今、チョコレートを渡す時なのかな？

「あのさー浩」

「ん、何？」

僕は靴に入れておいたチョコを出そうとする。

「ほら、チョコ…」

「チョコレートです！…あ…あの…受け…あのー、えーと受けとって下さい」

いきなり僕の目の前に現れたその少女は浩に向かって赤いリボンが付いているカラフル色の箱を手渡した。

「これを…俺に…」

「は、はい…じゃあ失礼します！」

その少女は長い黒髪で顔を隠しながらその場を去っていった。

「おい由美これって」

浩はゆっくりとした手つきでリボンをほどき、箱を開ける。

そこにはハート型のチョコレートと一緒に小さい手紙がはいっていた。

《いきなりすみませんでした。あのー、はつきり言います。好きです。もう好きとしか言葉が出ないんです。私はS高校に通っている高木聖子「たかぎせいこ」と言います。よかったら、私が作ったチョコレートを食べてくれたら嬉しいです。あ、あと会って色々お話をしたいです。もし良かったら下に書いている電話番号にかけて下さいね。えーと…待ってます》

「……」

「……」

「なあ、由美」

「え？」

半分体が固まっている状態の浩は今起きた事と、この手紙の内容に驚いている。

「これって本命チョコ＝ラブレターだよな」

「よ！よかったじゃん。S高校と言えばこの辺りではお嬢様学校で有名どころじゃん。」

僕は浩にあげようとしていたチョコを気づかれないように鞆の中に戻す。

「じゃあこれから僕は用事があるから」

なんだろうこの複雑な気持ちは…

浩に感謝としてのチョコレートをあげるだけだったのに。

なんだよあの子！

いきなり割り込んできて。

しかも僕の浩にあんな手紙を…

???

今僕はなんて思った？

僕の浩？

何変な事を思っているんだよ僕は…

僕はただの浩の親友…

…なのに…

ほかの女子があんな手紙を浩にやった事に僕は………
・

嫉妬してる

心のどこかで嫉妬してるの？

自分の心に自分で問いたしたが答えが分からない。

浩の呼ぶ声を見捨て僕は走りながら家に向かった。

第十九話「嫉妬とその真実と否定」

あの気分はなんだったんだろう？

僕はお風呂に入り終わり、ホカホカの体が冬の冷氣に冷めないようなパジャマの上にジャージという異様なスタイルを着こなしながらベツトに横たわった。

あの時、浩が本命チョコとラブレターを貰った時に一瞬僕の心の中が嫉妬したような感じになったが、今になってもその時感じとった思いが心の中から取れないような気がする。

「チョコ...どうしよう...」

渡しそびれたチョコレートを鞆から取り出す。

「まーでも、どうしても良かったチョコだし.....食べちゃおうかなー」

.....どうでもいいか.....

自分で言うっておきながら何か違うような気がする。

僕はチョコレートを再び鞆に戻し深いため息をついた。

「姉貴ー！ー！！」

部屋の外からいきなり大介が叫ぶ。

「何か用ー??」

「原田さんって人から電話だよ」

「えーわ、分かった。今行くから」

僕は急ぎ足で一階に降りて大介から受話器を受け取る。

「もしもし、由美ですけど」

「あー由美。どうだった? チョコレートをちゃんと中原君に渡したか?」

それを聞く為にわざわざ夜の十時に電話を…

僕は受話器の向こうにいる原田さんに聞こえるくらいのため息を一回ついて、その場面の事を原田さんに聞いてもらった。

「…と言う事なんだけど」

「……」

なぜか沈黙する原田さん。受話器の向こうからは小声でなにか呟いているようにも聞こえる。

「よーうーすーるーに」

沈黙を解き放ち原田さんが、なにやら怒ったような声で言い放つ。

「それって告白よね」

まあ、そうなるけど。

「由美はなんとも思わないの？その高木聖子って奴に中原君が取られちゃうかも知れないんだよ！」

「なんで、僕がそんな事の心配なんか…」

「ふーん。……由美その時……嫉妬とかしたでしょ」

ドキ！

その言葉を聞き黙りこむ僕。

「凶星ね」

《クスッ》と原田さんの笑い声が聞こえ僕は顔が赤くなる。

この人の前では嘘はつけないな。

「そうだよ！少しは嫉妬してるよ！でもなんで僕がこんな思いをしなきゃなんないのさ！」

つい心で思っていた事が口に出てしまう。

勿論、親友である原田さんだからこそこんな事が言えちゃうのかも知れない。

「由美…」

僕とは正反対に落ち着いた声で原田さんはゆっくりと答えた。

「私ね。最近の由美は少し変わってきているなー、と思っていたんだ。チヨコレートを中原君に渡すように言ったのも、いつもの由美と何か違うと思っていたから。そして今の言葉ではつきりしたわ。あんたは中原君の事を幼なじみや親友としてではなく恋愛対象として見てるんじゃない？」

電話の奥から聞こえてくる原田さんの真剣な言葉が僕の心にひしひし伝わってくる。

「恋愛対象？」

「そうよ。用するに中原君の事を親友や幼なじみとしての好きではなくて異性として好きなんですよって言ってるの」

「ハハハ！まさか…」

会話の流れがおかしいよ。僕は確かに浩の事が好きだけどそれは良い友として好きただけで…

僕は自分の事を男と思ってるし…

「笑ってごまかしてもこの私はごまかせないわよ。つまり由美にも女の心が芽生えはじめてるって事よ」

…女の心…

…僕に…まさか…ね

「そういえば由美ってさー！。この前の、〇〇〇商店街で由美のミニスカート姿を見たんだけど。確か中原君とも一緒だったでしょ」

《ブハーーーー！！》

僕は思わず声を吹き出してしまった。

「原田…さん、あの場にいた…の？」

「たまたまね。声をかけようと思ったんだけど途中で見失っなちゃって」

あの姿を見られたのかーーーー！！

めっちゃ恥ずかしいよ！

「あの服装は女の私でも《キュン》となりそんな格好だったわよ。それに…」

「それに？」

「お似合いのカップルのようにも見えたけどなー」

え！カップル？

僕と浩が！！

僕はその言葉の後になんて答えればいいか迷ってしまった。そして、

「僕はやっぱり心は男なんだよ。だから…そのー、…なんていうかい」

その言葉に原田さんは何かを納得したように喋りはじめた。

「分かったわ！もう私からは何も言わないから。由美の心が男であろうと女であろうと由美は由美だもんね」

「…ありがとう」

親友からの嬉しい言葉に僕は心から何か救われるような感じがした。

「あ！でも中原君には明日にでもちゃんとチョコレートを渡しなさいよ。今までの感謝としてのチョコなんだから。そ・れ・と中原君に本命チョコとラブレターを渡した女の子には要注意ね」

「え！なんで」

「えーと、だってもしその高木聖子と言う人と中原君が付き合ったら多分、由美はもう中原君とは一緒にスポーツや勉強などはあまり出来なくなると思うよ。男はねー、女が出来たらそんな風になるものなのよ」

なんか奥が深い愛の話を聞いているような気がする。でも確かに、

「それは嫌だ！」

「そうよ！その意気よ由美。まあ、その女に浩が奪われないように

気をつけたまえ」

――

――

――

この後違う会話で盛り上がり、かれこれ合計二時間も喋っていた。

もう深夜の0時を回っているよ。

つい話が盛り上がっちゃったな。

特に商店街の服装についてが…

あの服は今だに僕の部屋の押し入れの中に保管をしているけどね。

まあ、それは言いとしてチョコレートは明日浩に渡そう。一日遅れのバレンタインもまたいいかもね。

そして僕は受話器を置き、自分の部屋に戻っていった。

「女の心ねー」

ベットに寝ころびながら僕は静かに呟いた。

第十九話「嫉妬とその真実と否定」(後書き)

バレンタインチヨコの話は次の話まで続くと思うのでどづぞよろしく
お願いしますm(.・.)m

第二十話「究極のチョコレート」（前書き）

一部の文に本来、ピザとかスパゲティとかに使うある物を毒物みたいに書きましたが、本来はこういった食材に欠かせない物なので決して毒物ではないです。なので勘違いしないでね！

第二十話「究極のチョコレート」

「はい！チョコ」

学校の帰りに僕は、一日遅れのチョコレートを浩に手渡す。

「え！なんだ、いきなり」

「昨日渡すのを忘れてたから今日渡したの。なんか悪い？」

僕のその言葉に浩は頭を《ブンブン》と横に振り最後に少しだけ口元が笑っているように見えたのは僕の気のせいなのかな？

「別に恋愛対象のチョコじゃないからね」

「分かってるって。でも普通、バレンタインの日にチョコ渡すの忘れるか？」

「言えるわけないじゃん。」

「昨日の事で渡せなかったて…」

「そっいえば浩はあの後どうしたんだろう。」

「あの女の子の本命チョコを食べたのかな？」

「やっぱり電話とかしたのかな？」

学校にいる時にさりげなく話そうと思ったんだけど全然切り出せなかったからな！。

「ねえ、浩」

「ん？」

「昨日の高木聖子って人にあれから会ったりしたの？」

人差し指で頬をポリポリと掻きながら浩は答える。

「会ってもないし、まだ電話もしてないけど。何で？」

《何で？》て言われたってどんなふうに答えれば良いか分からないよ。

「お！由美。足元」

「え？」

「足元にボールが転がってるぞ」

浩に言われ目線を下に向けて見るとブルーで表面がつるつるしたボールが僕の足元に転がってきた。

そして僕がそのボールを拾った瞬間、子供の声が横の空き地の場所から聞こえてくる。

『お姉ちゃん、ボールをこっちにパスして』

「OK！！ちなみに何やってたのー？？」

僕のその声にその子供は

『ドッジボールだよ』

ドッジボールかー。小学生の頃は良くやっていたけど最近はそのスポーツなんか忘れかけていたな。いつもサッカーとかバスケばかりだからね。

「僕達も混ぜてくれない？」

「お、おい由美。俺は今体を動かす気分じゃ…」

「いいじゃん。付き合ってよ」

十人いる男女の子供達はお互いの顔を向き合きあわせて

『いいよ』

『お姉ちゃんはこのチームに来て』

『お兄ちゃんはこのチーム』

「ほらこれで決まりだね♪行くよ浩」

若干の気ではない浩の手を引き子供達のところまで走って行く。

「ねえ、浩」

「ん？」

「えーと、昨日貰った本命チョコはあの後どうしたの？」

子供達に手や足の裾を引つ張られながら僕らは囲まれてしまった。

「手はつけてねーよ」

「え？」

浩はゆっくり座りこみボールを子供から受け取る。

「いや、やっぱりまだ昨日ほんの少し会ったばかりの人のチョコを食べるのはねー。抵抗があるというかさー」

ボールを人差し指の上のせてクルクルと回しながら答える。
子供達は永遠と回り続けるボールを見て《すげー！》とか《俺も俺も！》とか言いだし少し興奮気味。

「まー！今日貰ったお前のチョコはありがたく食べさせていただきますよ」

『お兄ちゃん！早くドッジボールしようよ』

「よし！やるか」

いきなり浩は立ち上がり今も回り続けているボールを僕にヒョイツと受け渡す。

「さて、エネルギー補給として由美から貰ったこのチョコを早速いただきますか」

浩は鞆から僕があげたチョコレートを取りだし、周りの包んでいる紙を破き、箱を開ける。

しかし、もうちょっと開け方というものがあるんじゃない？
もっと綺麗に破いてよね。

「お！うまそ」

その光景を見ていた子供達は指を加えながら凝視していた。

「じゃっ、いったきま……ん？なんだ。お前らも食いたいのか？
残念でした！やらねーよーだ」

子供達の目線の中、僕がやったチョコレートを一口で口の中にいれてしまった。

一生懸命作っただからもっと味わってくれてもいいんじゃないの。

…とその時、

「ブハー！！！」

変な声をあげたと思ったら浩はそのまま一直線に顔を地面に叩きこむようにして倒れてしまった。

『お、お兄ちゃん！大丈夫！！』

『救急車を！救急車を早く！』

子供達は一体何が起こったのか分からなくパニック状態。・・・

・ま、まさかこのチョコを食べたせいで…

恐る恐るチョコの残りがすをつまんで食べてみると、

「！！ゲホ！！」

「か、辛い。しかもタバスコの味が…なぜ？」

僕は考える。

あの時チョコレイトを作っていた時の事を…

《思考中》

――――

――

――

も、ももしかして。

苺味にしようと思ってチョコレイトの中にいれたのはタバスコ！！

苺シロップと間違えたんだ。

僕とした事が…

普通間違わないぞ、タバスコとシロップなんて。

それと確かあの時、瓶の中身を丸々一本入れたような記憶が。
あー、背筋に寒気がしてきたよ。

「ゆ、由……美」

口から熱い煙をただよせながら浩はゆっくりと立ち上がる。

「俺を……」

「いや……わざとじゃないから……許して……ね!」

子供達はオロオロしながら僕と浩を見あげる。

「俺を殺す気かあああああ……!」

鬼のような形相をしながら浩は僕に突進してくる。
勿論、その場から逃げる僕。

「わああああ……!」 「ごめんなさい……!」

「お前が前作ったチャーハンより百倍パンチが効いてたぞコノヤロ
……!」

「ひiiiiiiii……! 浩の顔が怖いよ……」

「待てやコラアアア……」

—————

――

――

この後、浩はタバスコという名の毒物が体に回ってきたのかその場にまた倒れこんでしまった。

目をグルグル回しながら。

勿論ドッチボールが出来る状態ではない為、自分から言っておいてなんだが子供達とのドッチボールはまた今度するという事を約束した。

その後、僕の鞆にたまたまアクエリアスが一本入っていたため、それを浩に飲ませた。

そしてなんとか復活した浩はその場で一言。

「由美、若二句教職だなこりゃあ」

いや、意味分かんないから。

しかもそれを言うなら、《弱肉強食》ね。字がハンパなく違うし。

とうとう頭の脳までタバスコの被害に…

そしてこの後、浩が元に戻るまで丸一日かったという事でした。

第二十一話「夢」

「ふふふ」

腰まで伸びている茶色い髪の毛を紫色のゴムで縛ってまとめながら頭の中であの浩さんについて考える。

「キヤー！ー！ー！とうとう浩さんに本命チョコを渡しちゃったわ！
！」

薄暗い部屋の中、一人私は浩さんについて考えていた。

「早く連絡来ないかなー」

長くて細い足をバタバタさせながらつついっつい私は感情に浸ってしま
う。

そういえばいつも浩さんの横にいるあの女は何？・・・は！もし
かして彼女だったりして！

少ししか顔を見なかったから良く分からなかったけど多分、私の方
が百万倍可愛いわね。

…って何自分で自己満足に浸ってんのよ。

とにかく浩さんから連絡が来なかったら私から直接会ってやるわ！

初めての初恋なんですもの！

高校一年、高木聖子。必ず浩さんのハートをゲットしてやるわ。

――――

――――

――――

《約一週間後》

僕と浩は今、桜が咲き乱れる空間に二人だけでお互い立っている。

顔を向き合わせながら・・・・・・・・・・

「浩。僕ね……」

いつぺんの迷いもなく真っ直ぐした目で浩を見る。

「……………」

「……………」

沈黙が続く。

一分だろうか？

一時間だろうか？

時間の感覚がまるで歪んでいるかのように時の流れがおかしく感じる。

桜の花びらが風で散った瞬間……

「好きです!」

僕の口から浩へ愛の告白。

浩は表情を和らげ、にこりと笑った。

今度は強い風が吹いて、桜吹雪と一緒に浩の姿がすー、と消えてしまった。

「浩!どこに行ったの!」

僕は視界が見えないほどの桜の花びらに阻まれて、浩の姿を完全に見失ってしまった。

「浩ってば——!」

「浩——どこ——!浩——!」

——

——

——

《ガバ!》

「浩——!」

片手を天井にあげて大声で叫びながら僕は朝をむかえた。

「夢か――」

胸に手を当ててホッとため息をする。なぜあんな夢を僕が見たんだろう。

浩に《好きです》と告白した変な夢。

今まで見た事がない夢だった。

《カアアアア》

思い出したら顔が赤くなってしまう。

あのバレンタインの日から一週間とちょっと。もうすぐ三月に入る。

そして暖かい季節に移動しつつある。僕の心もこの季節のように少しずつ移動しているように感じたのは気のせいだろうか。

第二十二話「まさか大介が…」（前書き）

ちよつと短い文になりました。すいませんm（・・）m

第二十二話「まさか大介が…」

外の気温はポカポカ暖かい。あと数日で三月に突入するからである。気温もちょうど良い感じに感じる。

今日は日曜日。勿論、学校は休みなのでずっと遅く起きてしまった。

目覚まし時計を見ると十時を指していた。

少し寝すぎてしまったかな。

今日は珍しく浩やその友達と遊ぶ約束はしていない為、今日は暇だ！……となんとなく考えている時、ふっ！とあの夢の事が頭の中をよぎった。

《…浩》

《好…きだ…よ》

「はぁー、また思い出しちゃったよ。最近よく見るんだよねー。僕が桜の花びらの中で浩に告白する夢」

僕はパジャマを着たまま一階のリビングへ行く。

「あ！姉貴おはよー」

そこには頭をワックスで固めており、服も普段は着ないようなおし

やれな服装を着こなしている大介の姿があつた。

「…大介…どうしたの？その格好？」

僕のびっくりした問いに大介は照れながら答える。

「今日、ちょっとデートにね」

「え?!大介がデート!」

あの大介に彼女!

「そんなに驚かなくてもいいじゃん。もう僕は中二だよ。恋愛もする年頃なんだから」

そう言つて大介は《やば、時間に遅れる!じゃあ!》と言いのこし慌てて家を出ていった。

まさか大介に彼女が出来るんなんで。

まあ、性格は明るくてなかなか真面目な奴だからきつとつまうくだろう。

頑張れよ大介!

窓の外から空を見上げながらひそかに応援する僕。

――――

――

――

「とうとう来てしまったわ」

浩さんからの連絡がくるのを一週間も待っていたけれど全然返事の電話がかかってこないのだから直接本人の自宅まで来てしまった。

私は緊張して震えている手をなんとか動かしてイヤホンを鳴らす。

第二十三話「浩の彼女の…」

「どうしたの？いきなりこんなところに呼び出して」

浩に呼ばれて近所のファミリーストランについた僕は浩がいる席についてウェ이터にシーフードサラダと烏龍茶を頼む。

「あのさ由美」

「ん？」

なんか浩の顔が真剣な表情だ。何か深い悩みでもあるのかな。

「俺はどうすればいいんだ」

いきなり頭を抱えながら浩は僕に言う。

「いや、何が？ちゃんと説明してよ」

そんなに重大な事を抱え込んでいるのか！

「いや、実は昨日、高木聖子って言う女が俺の家に来てよ」

高木聖子って・・・えーと・・・確か・・・

あ！バレンタインの日に浩に本命チョコをあげた人か。

「それでどうしたの？」

浩は大きなため息をつきながら答える。

「《なんで連絡をしてくれなかったんですか！ずっと待ってたんですよ。・・・グスン！本当に・・・待ってたのに・・・グスン！・・・》といきなり会った直後に泣いてきて、泣くのが止まったと思ったら《好きです。付き合って下さい！》とかいきなり言ってきたもう本当に困ってるんだよ」

浩はその事を必死に手でジェスチャーをしながら僕に伝える。

ちょうどその時、ウェイターが注文した物を運んで来てくれた。

「失礼します。烏龍茶とシーフードサラダです。ほかにご注文はないですか？」

「あ！大丈夫です」

僕は軽くウェイターに頭を下げ、再び浩に視線を戻す。

「・・・で、僕にどうしろと？」

箸を使いサラダの中に入っている海老やイカを摘みながら浩を見る。

「単刀直入に言うぞ」

その言葉と同時に僕は烏龍茶を口に流しこむ。

「俺の彼女になってくれ！！」

《ブフォ！》

何をいきなり言いだすんだ！危なかった！思わず烏龍茶が水しぶきをあげながら僕の口から吹き出すところだったよ。

「頼む！明日の夜にまた来るらしいんだよ。俺は付き合う事はちゃんと断ったんだけどなかなか諦めてくれなくて。明日、あいつを諦めさせる為に・・・お願いだ由美。彼女のフリをしてくれ」

両手をあわせながら必死に僕に言い寄る。

「浩の気持ちは分かったけどさー。普通女の子から付き合ってくれ！とか言われたら男子達は嬉しいもんじゃないの？」

僕のその問いに

「俺は嫌だ！」

即答に答える浩。

「確かに高木さんは可愛くて、性格も良さそうだけど・・・なんて言うか・・・なんか俺には合っていないような」

両手を交互に組み自分一人だけで勝手に頷いている。

「ま、それは良いとして・・・お願いだ由美。本当に頼む」

再び腕組みの体勢から両手をあわせる体勢に素早く変え必死に浩は僕にお願いする。

ここまで浩にお願いされたら・・・

「分かったよ。彼女のフリだからね」

「有り難う由美。助かるよ」

結局引き受けてしまった。

男として生きている僕が浩の彼女かー。

いや、別にフリだからいいんだけどさー。

なんかねー。

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

以外に僕の方が期待してるのかなー

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・・・て、何変な事を考えてるんだよ僕は。

・・・全く・・・

しかし考えてみると、なんで浩は彼女役を僕なんか頼んだんだろ
う？原田さんとかもつとほかの人に頼めば良かったのに。

僕はそんな事を考えながらホッとしている浩を見つめる。

「ん？どうした由美。やっぱり嫌だったか！」

「いや、別に・・・」

浩の彼女が！。

再び僕は浩の顔をチラリと見つめる。

第二十四話「条件」

「これで準備良し」

「どこがだよ！」

僕は前に商店街で買った「買わされた」服を浩からなかば強引に身につけられた。勿論、僕の部屋の押し入れからわざわざ出して。

「なんで僕がまたこの服を着ないといけないんだよ」

「大丈夫！俺の親は今日は家に帰ってこないから」

いやそういう意味じゃなくて。せつかくもう着ないように押し入れに封印してたのにさー

僕は両手を使ってグレー色のミニスカートをふわふわとなびかせる。

「おい由美！やめてくれ！下着が見える」

「だってまだ三月だよ。ミニスカートはスースーして嫌だよ。それに……」

僕は今自分で着ているピンク色のパーカーを指差す。

「この熊の絵がついた服とか男が着るもんじゃないね。そうでしょ
浩」

「そこをなんとか！今日だけ女の子として振る舞ってくれよ。やっぱりそこは女子が着そうな服を着たほうがいいと思ってさー。頼む！この通り！」

必死に頭を下げる浩に僕はそれ以上何も言えなかった。

しかしこの浩の対応を見るとあの高木聖子と言う女の子もなんか可愛そうに思えてきたよ。普通の男だったら逆に嬉しくてたまらないほどに飛び上がると思うんだけどなー。

「分かった。もう何も言わないよ。浩がそこまで言うなら仕方ないね・・・恥ずかしいけど我慢するよ」

「本当にすまない」

「そ・の・か・わ・り」

「はい？」

浩は頭に？マークを浮かべながら僕を見る。

「〇〇〇のスーパのそばに美味しい饅頭屋があるんだけど。その、し！お！だ！い！ふ！く！がかなりの人気って噂なんだってー。どう思う浩」

あえて塩大福の言葉を大声に出して強調する。

「分かりました。買わせていただきます。いくつですか？」

浩は苦い顔を浮かべながらズボンのポケットから財布を取り出した。

「え！おごつてくれるの！有り難う。でも今じゃなくていいから。もうすぐあの女の子が来るんでしょ。明日でいいから明日で。」

にこにこ顔の僕の横で、財布の中身を見ながら小さい声で浩が一言。

「確かあそこの饅頭屋って…」

その言葉に僕が答える。

「高級店だよ。確か大福の値段が一つ・・・五百円くらい・・・だったような」

その瞬間、浩の顔に無数の汗の粒が出はじめる。

「いくつ食うんだお前」

「えーと十個で勘弁してあげるよ」

合計すると約五千円。

僕にこんな役をやれと言うのだからこのくらいは当然でしょ。

「たかが大福で五千円も…トホホ」

浩は財布を見つめながら頭をガックシと下げた。

・・・とその時

《ピーンポーン》

浩の家のインターホンが家中に響きわたった。

「由美、もう一度言っけと俺の彼女のつもりでやってくれよな」

《ピンポン》

またもやインターホンの音が流れる。

「浩さんー、高木聖子です。開けて下さいよー」

玄関のドアを叩く音が聞こえてくる。

これまた凄い人だな。一度浩につき合いを断られてもなお、ここまでの積極性があるんだから。普通に喜んだらいいのに浩も…

「ねえ浩」

「何？」

「彼女のフリって何をすればいいか分からないんだけど」

浩は一度、目をつむり考えむといきなり僕の肩に手を乗せ言い放った。

「勘でなんとかしてくれ」

そう言っただけ浩は玄関まで歩いて行き、今だノックされているドアをゆっくりと開けはじめた。

第二十五話「迫るライバル」

「こんばんわ」浩さん。ドア開けるの遅いですよ」

半分ニコニコ顔、そして半分怒っているかのような目つきで玄関の中に入ってくる高木さん。

「あら？そちらの方は？」

僕が存在に気づいた高木さんは浩に質問をする。

「あー、そうそう紹介がまだだったな。こいつは上野由美。俺の彼女だよ」

「え！？」

浩の言葉を聞き、一瞬、高木さんの体が固まった。

「浩さんの彼女！？」

「そうなんだよ。俺には心に決めた奴がもうここにいるからさー。諦めてくれないかな」

何が心に決めた奴だよ。　恥ずかしいからやめてくれないかな。

「そう…分かったわ」

顔を下にむけながら高木さんは呟いた。

「お！マジで！有り難うな」

浩は腰に手を当て、頭を数回かたむけた。

しかし、嬉しがる浩をよそに高木さんは僕に対して指を差し言った。

「じゃあ、あなたは私のライバルね！！」

「は！？」

「僕が！？…じゃなかった私が！！」

なぜこうなるんだよ。どう間違ったらそうなるの！！

「あなたの事は上野さんと呼ばせていただくから」

明らかに高木さんの目は炎の瞳と化している。

「いや私、勝負とかちよつと…」

自分の事を私とか言うのはなんか恥ずかしいな。

「問答無用！少し美人だからって天狗になるなよ」
「いやなつてないから。」

それにしても。言わせて置けばまたシャーシャーと・・・

こんな事はしたくはなかったが・・・

「ひどい！」

僕はその場でうずくまりながら噓泣きを実行した。

瞬時に浩は僕のこの行動が「噓泣き」と分かったらしく急いで僕に近寄りクサイ演技をはじめた。

「おい由美大丈夫か！俺の命より大事な由美」

言い方がクサイよ。

「な、泣いたって譲らないんだからね」

お！動揺してる。

これはいけるかも！

「ねえー浩、あの人嫌い。追い出してよ」

うぐー！なんか自分が自分じゃなくなってきたような。

「よし！この俺が追い出してやる。ちょっと待ってる」

浩はすばやく立ち上がり高木さんの元まで歩み寄る。

「おい！俺の彼女を泣かせ・・・」

《ジワ》

高木さんの目はじんわりと潤んでいて今にも泣き出しそうな顔だった。その顔を見て浩は口をパクパクさせている。

「いや、つーのは嘘で・・・やっぱり高木さんも可愛いなーなんて・・・」

おい！

さっきの自信満々な態度はどこにいったんだ。

「やっぱりそう思うー！！やっぱり私ってスタイルが良くて瞳はパツチシしてて、頭もいいし、えーと、それと・・・」

嘘泣きかい。

なんかム力つくよあの女。僕と同じ戦法を使うなんて。

僕の目線の火花が高木さんをとらえる。

高木さんの目線の火花が僕をとらえる。

お互いの目線の火花がぶつかり合ってお互い一步も譲らない状況になった。

「あの一、二人共」

その場でおどしている浩をよそにますます目線という火花がお互いヒートアップする。

「勝負よ上野さん」

「受けてたつよ高木さん」

「ちよっ！高木さん。しかも由美まで…」

浩はお互いに歩み寄っている僕と高木さんの腕を掴みなんとか説得を試みようとするのだが僕と高木さんは強引に腕を振り払う。

「・・・でなんの勝負をするの？」

僕の質問に高木さんはニヤリと笑みを浮かべ答えた。

「お題は3つにしましょ」

「3つ？」

「このほうが引き分けがないでしょ」

「なるほどね」

浩はというと玄関の隅の方ですっかり黙りこんでいた。

「内容はどうするの？」

「勿論、浩さんの彼女にふさわしいかどうかの勝負なんだからまず第一は料理でしょ。料理が出来ない女なんて最低だからね」

その言葉に浩はピクリと体を反応させ小声で呟いた。

「料理対決…終わったな」

その声を聞いた僕は

「なんか言いました浩くん」

僕の冷徹な視線を見て浩はすばやく今の言葉を弁解する。

「二つ目は…えーと…浩さんの彼女になる条件はと…」

高木さんは二つ目の勝負が思い浮かばないのか必死に頭をフル回転させている。

「浩さんはどういう勝負がいいのかしら」

「俺？俺ねー。…もうこのさいだから料理対決だけの一発勝負で良くないか」

その答えに高木さんは《確かに…》と軽く納得する。

しかし僕は浩に歩み寄り小声で耳元に向かって言い放った。

「僕が負けてもいいのかよ！料理対決だけだったら確実に僕の負けじゃなか」

「あ！自覚してやんの」

「・・・」

《ドス!!》

僕の肘うちは見事に浩のわき腹に命中した。

床に転げ回っている浩を高木さんは哀れ見るような目で見つめてくる。

「高木さん。私ちょっとあっちの部屋で浩と話し合いをしてくるので少々ここで待っててもらっていいかしら」

「別に構わないけど」

僕はわき腹をおさえている浩を六畳の和室の部屋へ連れていく。

「ちょっとなんであんな事を言っただよ」

「イテテ・・・落ち着け由美。よく考えてみる。料理対決と言う事は多分誰かがその料理を味見して判定すると思うんだ。やっぱり味の判定ならば本人のこの俺でしょ。そして俺が由美の料理を選べばめでたく由美の勝利。どうよ？」

まあ、確かに。浩が気に入る料理を出すんだから浩が食べないと意味がないし。

「分かったよ。でも作った物はちゃんと食べてよ」

「大丈夫♪大丈夫。勝負の日はちゃんと胃薬を大量に調達しとくから」

《ゴス!!》

僕の肘はまたしても浩の横腹に命中した。

――

――

僕と浩「顔が泣き出しそうな浩」は和室から出て再び高木さんがいる玄關に歩み寄った。

「料理勝負でOKよ」

僕の自信満々の言葉に高木さんも

「これで決まったわね。勝負は料理の味だからね」

やる気十分な態度を示す。

「判定は勿論、浩が行うけど文句はないでしょ」

「ダメね」

「え？」

高木さんからの予想もしなかった答え。

「浩さんが判定をしたら絶対に上野さんが勝ってしまうじゃない。もう作戦が見え見えよ」

僕と浩の考えが見事に玉砕された瞬間だった。

「私の近所に小学生の子供がよく集まるのよ。お互い顔も良く知ってるからその人達を三人連れてくるから。・・・場所は明日の夕方六時にここの浩さんの家で勝負しようね。じゃあ私はもう帰るので。あ！作る料理はフリーにしようね。そのほうがお互い全力を出し切れると思うから」

そう高木さんは言って帰っていった。

「ねえ、浩」

「なんだ由美」

「僕、この勝負おりていいかな」

「ダメだ」

くそ！なんで僕がこんなにも頑張らなきゃいけないんだ。

「俺の為にも頑張ってくれ由美」

「・・・」

《ガス！！》

僕の肘はまたしても浩の横腹に命中した。

第二十六話「ハプニング」

料理対決を約束し三十分後、僕は浩の家へ泊まる事にした。
理由は・・・

わざわざ外に出るのがだるかったから。

家が隣なので時間を気にせず泊まる事が出来るよ。

「ねえ、浩。一緒にお風呂に入る」

その言葉を聞き浩の顔が赤くなり手を横に振る。

「なんで！ついでだから一緒に入ろうよ」

「いいから一人で入ってくれ。俺は夜ご飯の支度をするから」

もう・・・

そこはノリで入ってくれたっていいじゃん！！

「ねえ浩。僕がお風呂からあがるまで料理は作らないでね。明日の為に僕も料理の手伝いをするから」

「お前と一緒に俺と夜ご飯を作ると？」

《コクリ》

僕が頭を傾けると浩は

《フ！》

僕から目をそらし床に目をむける。

「なんだよ！その人を見下した目は！」

僕は頭からプンプンと煙を出しながら浩をお風呂場の場所へと強引に引っ張っていった。

「ちよっ！由美。なんで俺まで一緒にお風呂に入んなきゃならないんだよ」

「僕を見下したから」

腕を強引に引っ張り浩が床にひきずられているので浩はとても痛そうな顔をしている。

「いや、その事とは関係なくね？」

僕はお風呂場にたどり着くと自分のミニスカートと熊の絵がついた服を脱ぎだした。

それと同時に浩は両手で目を覆う。

「はい！そこ！目を隠さない」

「普通の男なら隠すぞ」

目を覆いながら浩は後ろを向く。

「だーから、隠さないでよ！普通に一緒に入りたいただけなのに」

僕は最後に下着を脱ぎ終わると、横にかけてあった大きめのタオルで体を巻いた。

「俺、やっぱし夜ご飯の準備を・・・」

明らかに後ろから見ても動揺しているという事が見て取れるよ。

「ねえ浩ってば！タオルを巻いたからこっちを見てよ」

その言葉を聞くと浩はゆっくりとこちらを向き、目から両手をどけた。

「浩の為に明日の料理対決を約束したんだからそのお礼として風呂呂に一緒に入ってくれたっていいじゃん」

「お礼って・・・まだ勝ってもねーじゃんかよ」

その言葉を聞き少し僕は頭にきたのかな？
浩の服を僕は強引に脱がせはじめた。

「ちよっ！由美！おい・・・やめろ！・・・やめてくれー！！」

「僕は必ず勝つ！」

「分かったから・・・やめ・・・おいおい下は自分で脱ぐから・・・」

・・・と言う事でなかば強引に浩とお風呂に入る事になりました。

《シャカシャカ》

僕はシャンプーで頭を洗いながら浩に質問をする。

「浩ってば本当に僕を男として見てんの？」

《シャカシャカ》

浩もシャンプーで頭を洗いながら答える。

「・・・まあ・・・もちろん・・・」

「何その曖昧な答え」

僕はお湯で髪の毛についているシャンプーを洗い流す。髪が短いので洗い終わるのはいつも早い。

僕はまだ頭を洗っていて目をつぶっている浩の後ろへ回り、そっと抱きついて見た。

「うわああああー!!」

抱きついた瞬間、浩は大声と共に後ろへとすばやく移動する。

「やっぱり男と思ってくれてないんだ」

僕は顔を《プー》と膨らませながら体を洗い、お風呂の中へと入った。

「いや、今のは条件反射と言っか・・・」

あたふたする浩を見て僕はまたしても頬を膨らませる。

「条件反射ねー」

十分後・・・

また後ろを向き体を洗っている浩に僕は言った。

「いくじなし」

そう浩に言っただけはお風呂からあがり、出口へと向かう。

そして浩の横を通りすぎようとした瞬間、

《バサ!》

お湯を含んでいた重みで体に巻いていたタオルがズレ落ちてしまった。

振り向いた浩と僕の視線が合った。

距離・・・二十センチほど・・・

「うわあああああああああああ」

「きゃあああああああああああ」

僕と浩はお互い即座に後ろを向く。

・・・え？今僕、《きゃあああ》って言わなかった？

自分の事を男と思ってる僕が女みたいな声を・

僕は再びタオルを巻き直しお風呂場を後にした。

――――

――

二十分後・・・

お互い目を合わせなく会話もしないまま夜ご飯を作る準備をする。

「ねえ、浩。砂糖ってこれ？」

「え！あ、うん」

砂糖が入っているタッパだけを見て答えると浩はすぐに目を戻す。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

沈黙が続く。

なんで僕は今、こんなにドキドキしてるんだ？

別に裸を見られたぐらいどうでもいいじゃないか！

いつも僕から望んでるのに・・・

今日だって僕から望んだのに・・・

そうだ、そうだよ。いきなりのハプニングだったから少し恥ずかしかっただけだ。そうに違いない。

僕は自分にそう言い聞かせる。

《浩の思考》

俺は何やってんだ。この会話のなさだったらさっきの事を気にしているとはれてしまう。

・・・しかしやっぱり気になる。俺も男なので目の前にいきなり全裸になった由美がいたら普通は仰天するだろ。いくらハプニングとはいったって・・・

あ！そうだそうだよ。いきなりのハプニングだったから戸惑ってるだけだ。そうだ、うんうん！

「由美」

「浩」

お互いの声が重なった。

「何？そっちからいいよ」

「いいよそっちからで」

「ゴホン！じゃあ俺から・・・さっきはごめんな」

「え？何が？」

「その・・・は・・・は・・・はだ」

「聞こえないんだけど」

「裸を見てしまつてすまん」

その言葉に僕はニコリと笑う。

「可愛いね浩も」

「可愛いってお前・・・どこがだよ」

僕はジャガイモの皮をむきながら答える。

「そうやってすぐに謝るところがだよ。別に見たって構わないよ。ならもう一回見る？」

「・・・でどうだった僕の裸を見て」

「は？」

浩は、なぜそんな質問をする！的な顔をして僕を見る。

しかし、なにやら深く考えこんで喋りはじめた。

「うん！由美はやっぱり男だよ。だって胸が小さいから・・・」

《ドス！！》

僕は本日4回目の肘うちを浩の横腹にキメる。

「イテテ・・・なぜ、肘うちを。自分の事を男と思ってるんだろ」

ジャガイモの皮をむくのをやめ両手で自分の胸を触ってみた。

・・・何やってるんだろうね僕は。

なんか一歩ずつ僕が女の道にむかっていっているような気がするの
は気のせいだろうか。

いや！そんな事はある得ない。僕は男だ。さっきのはやっぱりなん
かこう、僕の心の隅にいる小さい女の心が動いただけだ。

僕はそう自分に言い聞かせた。

第二十七話「お互い様」

「はい、朝ご飯だよ」

「姉貴・・・これは何？」

「あら！由美が朝ご飯を・・・珍しいわね」

今日僕は朝早く起きて浩の家を出た。そして自分の家に戻り、大介とお母さんに少し早めの朝食を準備する。

「ねえ、姉貴。これは食パンだよね？」

大介は丸焦げになった食パンを箸でつつく。

「当たり前じゃん。多少焦げたけど普通に食べられるよ」

僕がギロツと威嚇の眼差しで大介を見つめると《最悪！》と言つ言葉を放ち大介は渋々と食べはじめた。

「ねえ由美。これは何？」

お母さんが真っ黒になった物体を箸でつつく。

「それは目玉焼き・・・のつもりだけど」

「姉貴、これは目玉焼きじゃなくて単なる炭にしか見えないんだけど」

大介が横から口をはさむ。

「炭って例えはヒドいんじゃない!？」

僕は大介の頭を一発殴る。

頭を殴られて少し不満気味の大介。

――――

――

《朝7:40》

僕は浩と一緒に学校に行きながらさきほどの朝ご飯の事について喋りはじめた。

「・・・でさー。僕が作った目玉焼きを大介が、《苦い、クサイ!》とか言っただよ」

話を聞いていた浩は目を細めて、僕の肩に手をのせる。

「それはお前が悪い」

耳元で浩は呟く。

そしてさらに一言。

「彼女役・・・お前には無理だったかな」

「・・・」

僕の無言の反応と表情に浩はすぐさま言葉を言い直した。

「・・・というのは嘘で。やっぱり・・・ちよっ、痛い！ごめん。まじごめん」

「浩まで言うかー」

浩の頭を両手でポコポコと殴る。

そして、浩をその場に置きざりにし僕一人で早歩きで学校に急いだ。

「おい！待てよ由美」

急いで浩も僕の後に続く。お互い早歩きのまま横に並んだ。

「頬・・・膨れてるぞ」

横から浩が指で僕の頬をつつく。

「ちよっ！触らないでよ」

僕は顔を横に振るってさらに歩くスピードを上げる。しかし歩道の信号にひっかかってしまいその場に立ち止まることになった。そして再び浩は僕の横に並ぶ。

「さっきのは冗談に決まってるだろ」

「冗談には聞こえなかったけど」

不機嫌な僕の答えに浩は自分の頭をポリポリと掻く。

「・・・ごめん。あやまるよ」

頭をその場に下げる浩。

信号が青に変わった。

一分くらいの時間がたち、信号が青に変わった。

「・・・許す。僕も悪かったし。ごめんね」

僕も頭を下げてあやまる。信号が点滅すると同時にお互い頭を上げて学校まで走りこんだ。

「料理のコツを原田さんに教えてもらおうと！」

第二十七話「お互い様」(後書き)

次の話からは料理対決・・・かな？

第二十八話「料理対決開始」

いよいよこの時が来てしまった。

中原家の自宅のキッチンには僕と、高木さん、浩に、判定係の近所の子供三人がテーブルに座っている。

《お腹すいたよー》

《ハンバーグ食べたい》

《お姉ちゃん早く作って》

座っている椅子をガタガタと揺らす子供三人組。

どっからどう見ても幼稚園児だ。

「さて、さっさと始めましょうか」

スーパーから買ってきた食材を袋から出し、それを高木さんはキッチンにきれいに並べる。食材を見てみると《豚肉、ジャガイモ、ニンジン、インゲン、醤油、みりん、砂糖、焼酎、》など

「高木さん・・・肉じゃがを作るんだね」

「そうよ。家庭的な料理にしてみようと思ったから肉じゃがにしてみたのよ」

肉じゃが・・・

確かに子供達も大好きな料理かな。

「上野さんは何を作るのかしら」

「私？・・・私わね・・・」

僕もさきほどスーパーで買ってきた食材をキッチンに並べる。

「えーと、材料は《お米、卵、ウィンナー、タマネギ、ケチャップ》
《などだよ》」

「分かった。オムライスでしょ！」

器用に指をパチンと鳴らす高木さん。

《はーやーく》

《もうペコペコ》

《・・・・・・ぱく・・・おいしい♪》

三人の子供のうち、一人の男の子が机に置いてあったチョコクッキーを一口食べた。

「あ、ちよつとまだ食べちゃだめだよ」

僕はその場のクッキーをすばやく取り除き子供達の世話を浩に任せ

た。そして浩が小さい声で一言。

「だる・・・」

「文句を言わず早くする」

浩の背中を押しながら横のリビングに移動させる。

「分かった、分かった。じゃあお前ら、トランプでもするか」

《やだ!》

《お姉ちゃん達と遊びたい》

《ぶ〜ぶ〜》

この言葉に浩は・・・

「このガキヤアアア」

キレちゃいました。

「はい!そこ!」

僕は浩の服を引っ張ってリビングに叩きつけようとしたが子供達の前だったのでそこは我慢した。

「上野さん。そろそろ始めましょうか」

「あ、はい」

・・・という事で変なところで料理対決開始。

原田さんから作り方を教えてもらったから・・・うん大丈夫。・・・
自分に自信を持って由美。

そしてリビングから浩の声が響いてくる。

「由美ーーーー！食べられる物を作れよ」

僕はドアの向こうから見えている浩にむかって怒りの眼光をキラリとむける。

その視線に気がついたのか浩はドアをゆっくり閉めはじめた。

「????」

僕の行動に高木さんは首をかしげる。

第二十八話「料理対決開始」(後書き)

めちゃくちゃ投稿が遅くなりました。すみませんm(u|u)m

次もいつになるのやら・・・

出来る限り早くする努力をします。

第二十九話「オムライスVS肉じゃが」

今俺と子供達は綺麗な色で彩られている肉じゃがに目をむけている。

そして、・・・横のオムライス？に目を向けて見ると・・・

「おい由美。これはなんと言う食べ物？」

あえて疑問系で聞く俺。

「ふわふわ卵のマヨネーズとケチャップの香りにビバ！オムライス・
・・・だよ」

自信満々に答える由美に俺は首を傾げる事しか出来なかった。

「上野さん。それはオムライスと言えるのかしら？」

勝ち誇った顔で高木さんが口を開く。

「ご飯の上に卵が被さっていれば全ての食材はオムライスになるんだよ」

横目で高木さんを睨めつけながら由美は答える。

《早く食べたいよー》

《お腹がペコペコ》

後から騒がしい子供達が腹ペコの罵声を浴びせてきた。

「ここで争っててもあれだから早くこの小さい審判達に判定をさせ
ましょうか」

「望むところだ」

――――

――――

――

10分後

俺はビクリしていた。

なぜ？って

俺が聞きたいくらいだ。

だって俺の目の前には膝をガックシ床につけうずくまっている高木
さんの姿があったからだ。

そしてその横には子供達を高々と上げて喜んでいる由美の姿があっ
たからだ。

まさかの結果！！

俺の横にはいまだにオムライスをつまそつに頬張っている男の子の

姿が・・・

ちなみに俺はまだ食べてはいない。

勿論、怖かったんで・・・

だってチヨコレートにタバスコを混ぜる人の料理なんか不気味で俺の体が動こうとはしなかったからだ。

俺はスプーンで由美が作ったオムライスに手を伸ばす。

《パク・・・》

オムライスが俺の舌にのつた時、正直驚いた。

「美味しい!!」

思わず口に出してしまった俺であった。

「でしょー。やっぱり私って天才かも」

ガツポーズをとりながら喜ぶ由美。相当嬉しかったんだな。しかし由美の奴結構慣れてきたんじゃないのかな。自分の事を《私》と言っのが・・・

一応高木さんの前だけでの演技らしいけど。

「まさか・・・あんなぐじゃぐじゃな料理に負けるなんて」

高木さんの周りには哀れと言う名の暗いオーラがどんよりと漂っている。

「高木さん」

由美が高木さんの肩に手をのせる。

そうだ由美！

正々堂々の戦いだっただから何か仲直りの言葉を言ってやれ。
まあ、原因は俺だが・・・

「料理は見た目じゃなく味だよ」

その言葉を聞きさらに落ち込む高木さん。哀れすぎる。

――――

――

――

三十分後、高木さんは無言で俺の家から立ち去っていった。

「おい由美」

「何？」

笑顔に満ちた顔が俺の方へ振り向く。

「お前どんな裏技をつかったんだ？」

「別に使ってないよ。ただひたすらオムライスを作る練習をしただけだよ。卵が40個ほど無駄になったけど」

卵さん、俺のせいですみません。俺は頭の中で卵に深い謝罪をした。

しかし味は良いとしてそんなに練習して原型があれば・・・
小学生の時の図工が悪かったわけだ。

「ねえ、浩」

「ん、なんだ？」

「僕、将来はシェフに・・・」

「やめとけ」

途中で話を強制終了させた俺であった。

第二十九話「オムライスVS肉じゃが」(後書き)

本当に遅くなりました。すみませんm(u|u)m
マジすみません。

第三十話「複雑な思い」

桜の蕾がふくらんでいる。

暖かい春風が僕の顔を撫でていくように通りすぎた。

「もうすぐで4月か」

そんな事を考えながら商店街を歩く僕。

特に用事はない。ただ歩きたかっただけ。

一人でただ歩きたかったんだ。

高木さんとの料理バトルに勝ち嬉しかった。

でも複雑な気分。

あれから一週間と少し、高木さんとは一度も会っていない。

何か悪い事をしたような気分だ。

だって高木さんはただ単に普通の恋愛をしたかっただけだと思う。それを僕は浩の為とはいえ浩の彼女という嘘をついた。小さな嘘だけれども何か心が痛む。あの時、はしゃいでいた自分がバカみたいに思えてきた。

もう一度会い本当の事を話して浩と高木さんをくつつけるようにしてもいいんじゃないだろうか？

どうせ僕が浩の彼女になる事はないだろうから・・・

《トントン》

肩を叩かれて後に振り返る。

「よ！由美ちゃん」

そこには田辺君の姿。片手にぶら下がっているビニール袋に《○○店限定、果実まるごと苺大福》と書かれていた。

「由美ちゃんは今何やっているの？」

「・・・苺大福・・・」

その答えに一瞬田辺君の頭に？マークが浮かんた。

しかし即座にその答えを理解したのか苺大福がいった袋を僕の顔に近づける。

「食う？」

勿論その言葉に僕は頭を数回縦に傾ける。

――――

――

――

今僕らがいる場所は商店街から少し離れた小さな公園。

小さいベンチで田辺君と二人で苺大福を頬張っている。

「おいしい」

「本当に由美ちゃんは大福が好きだね」

お互い口に白い片栗粉をつけながら食べる姿は少し幼く見えてしまう。

「そういえば由美ちゃんが一人でこの辺を散歩なんか珍しいね。大体いつも浩が横にいるか、弟の大介君とかがいるのにな」

「たいふけとはさいひんいつひよにいはいよ」

口一杯に詰まった大福により由美の言葉は田辺君には伝わらなかった。

「未知の言葉で分からなかった。もう一回言って!」

僕は苺大福をのみこむと同時に片手で胸を《ドンドン》と叩く。

「《大介とは最近一緒にはいないよ》と言ったんだよ」

「へえーあんなに仲が良かったのにな。やっぱりお互い年頃だからかな？」

「そうそう年頃なのよ。ね、由美」

「うんうん」

「そーか」

「・・・」

「・・・」

約5秒間沈黙。

――――

――

「ってうわぁ――！！原田さん！！」

「びっくりした――」

いきなりの原田さんの登場にかなりびっくりした。なぜなら 僕と田辺君のお互いあいていたベンチの中央にさりげなく座ってるんだもん。

いつの間に……

「ごめんごめん。偶然見かけたから気配を消してきちゃいました」

なぜ気配を消す必要が？

というか気配を消せるの！！すごい……

そして服装もオールレッド。上から下まで赤で統一している。目がチカチカしてきたよ。

「こんなところで二人きりとは……怪しい」

目を細めながら原田さんは僕らを睨めつける。

「違うよ。田辺君から莓大福を貰って食べてただけだよ」

「そうそう。変な誤解するなよな」

「アハハ！！嘘よ嘘。少しからかっただけよ」

手を横にふりながらその綺麗な唇が微笑んだ。

「そうそう由美」

笑いがおさまったところで原田さんが口を開く。

「そつえばさっき商店街のゲームセンターに大介君がいたよ。なんか髪を染めた奴と一緒にいたけど大丈夫かな」

「本当に？」

それを聞いた瞬間、なんか嫌な予感するのは気のせいだろうか。

第三十一話「前兆」

「おい、一万円持ってこいっていったじゃねーかよ」

「でももうお金が・・・」

「貯金箱でも壊して何でもいいから持ってこいっていったよ」

「そんな・・・」

ゲームセンターの裏の路地に数人の男達に囲まれ自分はただその言葉に従うしかなかった。

・・・姉貴・・・俺はどうすれば。母さんや姉貴に心配事なんかさせたくない。ましてや俺がいじめにあってるなんて聞いたらみんなどんな顔をするか・・・

・・・ぐすん・・・

瞳から一粒の涙がこぼれ落ちた。

《リリリリリリリリ》

「ん」

《ガチャ》

目覚まし時計を止めまだ眠りかけている顔に冷たい水をかけ目を覚ます。

「んゝ眠い」

階段から降りていつもの朝の食卓の場に目をやると・・・??

大介がいない。

もしかしてまだ寝てるのか。

「お母さん、大介は？」

「用があるからって朝食抜きで学校に早くから言ってたわよ」

昨日の夜の余りである味噌汁を温めながらお母さんは言った。

「なんか最近元気がないように見えるのは私の気のせいかしら」

ため息を一回吐きながらお椀に炊きあがったご飯を盛る。

炊きあがったばかりのご飯はやっぱ食欲がそそられる。大介も食べ
てから行けばよかったのに。

――――

――――

――

《十分後》

朝食を食べ終わり時計に目をやる。

「もうすぐだな」

「何がもうすぐなの由美」

「今に分かるよ」

「???」

お母さんの頭の上にはハテナマークが浮かんでいる。

《ピンポン》

「よし！ぴったし七時」

僕が玄関のドアを開けると面倒くさがった表情の浩の姿があった。

「おはよー浩」

「ふぁー！！ねみーな」

「おはよー浩」

「・・・ねみーな」

「おはよー浩」

「・・・あと三十分寝かせろ」

「・・・」

「・・・」

《ボタン》

僕はドアをゆっくりと閉めた。

そのドアの外から浩が必死に謝ってる声が聞こえた。自業自得だよ。

しかし・・・まあ、許してやるか。

僕は再びドアを開ける。

しかしそこに浩の姿はなかった。

「あれ？」

左右に目をやるが見あたらない。

「さては先に学校に行つたな」

僕は急いでカバンを持って家から出る。

と、不意に僕はドアの裏に目をやった。・・・え？なぜって？それはそこでいびきをかいて爆睡している高校男児の姿があつたからだ。しかもよく中年の親父が酔っぱらつたまま寝ていて出すいびきのかきかたにそっくりだ。

「はー、しかたない」

僕は浩の耳元に口を近づける。

そして・・・

「コラアアアア、起きろおおおおー！！！！！」

多分自分としては最大級の声を出したと思う。

んゝ、のどが痛いな。

そして浩はというと・・・

固まっていた。

驚いたと言う感情を通り超して体が硬直していた。

「もしもし」

僕は浩の目の前で手を左右に振るが反応は・・・なしだ。

なので・・・・・・・・

無視して先に学校に行く事にしました。

数分が経ち浩が後から走ってきた。半分泣きながら・・・というより涙目になりながら・・・

「おい由美、俺を捨てていくなんてひどいじゃないかな？」

なんで疑問系なんだよ。

しかも高校生の男が涙目で走り叫ぶ姿。・・・あ、オバサン達が哀れみの目で浩を見てるよ。しかも僕まで・・・恥ずかしいからやめてくれ。小学生の低学年っぽい奴まで《あ！大人が泣いてるよ！しかも若干鼻水が出てるし・・・キモ・・・》・・・的な目で絶対見てるってあれ。

「ちよっ、近寄らないで」

僕は両手を前方に突き出す。

・・・が、しかし、

浩の予期せぬ言葉。

「じゃあいいよ」

そのまま僕をスルーして先に走っていつてしまった。

・・・ムカツ

なんか分からんが凄い頭にきた。昨日の罰ゲームで結局僕が勝ち、朝は早く起きるようにと提案しただけなのに。しかもあの時はノリノリで親指を立ててたクセに・・・まさかこうなるとは・・・

「ふ、じゃあな由美。先に学校に行つとくから。寂しく虚しく悲しく一人で登校しててくれ」

走りながら僕の方へ振り向いて笑っている。

「ん！浩、前前！」

「え？」

《ドス！！》

浩が前に振り向いた瞬間一人の男の子と正面衝突してしまった。

「ばか・・・」

ぼそりと呟く僕。

ふ、自業自得だよ。

「痛ってーーーー!!ごめんよ」

浩が倒れている少年の手をとろうとした時、
.....

「お！大介じゃん。久しぶり」

「え！なんで大介がここに・・・学校は？」

大介はなぜか頭を下に向けたまま黙ったままだった。

第三十二話「いじめっ子」

大介の目からは涙が流れていた。朝の日差しに反射してキラキラと光るその涙は僕に何かを訴えているようにも見えた。

「大介・・・どうしたの？」

僕は太介に問うが返事は帰ってこない。

「ごめん。ぶつかった時にどこかに当たったんだろ。俺が悪かった、ごめん」

「違うよ浩。あの泣き方は・・・」

「あの泣き方は？」

太介の目の前まで行き僕はもう一度質問した。

「どうしたの？」

その時太介の瞳から大粒の涙が流れた。今までこらえてきた物が全て出ていくようにも見えた。

「ぐすん・・・うえ・・・ぐすん」

「はいはい泣かないの男の子でしょ」

僕はその場の空気から太介の頭を手でなでなでする。

「なんか一瞬由美がお母さんに見えてきたよ」

「何それ。せめてお父さんと言ってよね」

その後、大介に泣いていた理由を聞いた。その話を聞いた時僕と浩は怒りで頭がいっぱいになってしまったのは言うまでもなかった。短く言うところ《お金》の問題だ。大介はその子供に約十万ほどお金を貸してるらしい。と言うより強制的に捕られたと言ったほうが良いかもしれない。

「浩」

「なんだ？」

「僕、ちよつと学校に遅れるね」

大介の手を引き僕はいじめっ子の家へ案内してもらった事にした。

「おい由美。俺も行くぜ」

僕の肩に手をのせ、大介の頭をもう一つの手で頭をくしゃくしゃする。なぜかその時、とても温かく頼りになる手の温もりを感じた。

「姉貴、やめようよ」

「いいからお兄ちゃんに案内しなさい」

その言葉に浩の顔がひきつる。というより笑いを耐えているような表情だ。

「どうしたの？」

「いや姉ちゃんだろ」

「いいのお兄ちゃん。一回言ってみたかったんだから」

「・・・ふ・・・」

浩の口から出た一文字の言葉。

「あーバカにしたな」

「いやしてないしてない」

・・・と言う会話を二十分ほどしていると気がついたらその人の家の前に来てしまった。この家の子がいじめ組のリーダー的存在らしい。

「よし」

僕は家のブザーを鳴らそうと手を近づけた。

・・・とその時、ブザーを押そうとした瞬間、人の気配を感じ後ろを振り向く。

そこには大介と同じくらいの身長の子が立っていた。

「ん？大介じゃん。何でここにいるんだよ」

「ご……ごめん」

大介の体が震えている。こいつが大介をいじめた犯人か。

僕は前に立ちその男の子に向かって叫んだ。

「あんたが大介にたかったの？」

「……」

僕のその言葉に反応はない。わざと聞き流されているような感じだ。

「……っせー。ば……ば」

「何て？」

いきなりぼそりとその男の子は呟いた。

「《うつせーよババア》って言ったんだよ」

「……ぷっん!!」

あれ？今の言葉で一瞬殺意が……

この男の子、中二だね。大介と一緒にの年だね。年下の子にこのように言われるとは……やばい!!僕の手がグーになっているよ。

「ちょっと」

僕はその子の手を思わずつかんで自分の元へ引っ張った。

「兄ちゃんーーーー!!!」

手を引っ張った瞬間、その子は大きな声で自宅にむかって叫んだ。

第三十三話「万死に値する」(前書き)

浩に必殺技がありました。(/ / / /)

第三十三話「万死に値する」

《ボタンー!!》

家のドアが勢いよく開く。

「んゝ、どうした武弘「たけひろ」」

この子供の名前は武弘と言っらしい。

「このブスと変な男が俺をいじめるんだよ」

「だーれーがブスだってー！ー！ー！」

ブチ切れ状態の僕を浩が必死に両手でおさえる。大介はその場でおろろしていて何をしていいか分からない様子。

「へえー、俺の弟をいじめるとはお前らしい度胸・・・ん？」

そいつは僕の方に近づきまるで品定めをするかのように見つめる。

「おいお前！由美に近づくな！殺すぞコラ」

浩の声はそいつにはきこえてはいなかった。

「か、可愛い」

「は？」

何をいきなり言っただ。

「この松本龍平」まつもとりゅうへい「の目に狂いはない」

あ！バカだこいつ。なんか分からんがバカだと僕は心で思った。

「兄ちゃん・・・何を言っで・・・早くとっちめてよ」

「武弘は黙ってる」

「ひー！ごめんなさい」

展開がおかしくなっできてるよ。

「黙るのはお前だぜ龍平ちゃん」

僕の前に立ち浩が龍平に目で睨みつけ威嚇をする。浩にこんな表情が作れるなんて・・・怖いよ浩・・・

「なんだお前・・・誰に向かって口を聞いてるんだ」

龍平も負けずと睨み返す。

「誰っでお前に決まっでるだろ。バカだろお前バカだろ」

そう言ってる浩も言葉が幼稚じゃん。

「あん？あれがお前の彼女だろーが俺はいただくぜ」

なんの話をしてるんだよ。話題が180度違うんだけど。

「彼女じゃねーよ。彼女を超えるほどにもう大人の関係なんだ・・・
ゲフー！！」

「気持ち悪い事言つな」

浩の顔に僕の拳がめりこむ。うん、これは絶対痛いね。

「ゲホオ！・・・っと言うのは冗談とし・・・え？あ、あれ、天から神様が」

「ちよっ！浩大丈夫！！ごめんやりすぎたよ」

龍平と武弘を完全に無視・・・と言うか完全に忘れている由美と浩
龍平の頭には血管が浮かんでおりブチ切れモードになりつつあった。

龍平は由美の髪の毛を掴み自分の顔に強引に近づけた。

「いくら可愛いからうがシカトはないだろこのアマ！！やっぱ駄目
だ！！こいつはクズに等しいようだ。こういう糞は俺にはあわん」

龍平はそう言い由美に向かって言い放った。その迫力により大介はガタガタと足を震わせ、武弘はニコリと笑みを浮かべた。

「そのー手を」

後ろから龍平の髪の毛をグツと掴む怒りのオーラ全開の男がいた。

「どけるコラー……!!」

龍平の茶色く染めているロングヘアをまるで芋掘りでもしているかのように思い切り引っ張る。痛さのせいで由美を掴んでいる手は離れる。

「浩」

さすがの由美もあの龍平の迫力に圧されたのか目は涙目になっており足がガクガクと震えている。

「由美の髪の毛を引っ張る行為は万死に値する」

浩はそう言いながら龍平の髪の毛を持ちながらなんと!!

「どりやややや浩流背負い投げだ死ねコラー……!!」

「おい？ちよつと・・・」

《ドコー!!》

「ぎいやああああ」

龍平は家の玄関の目の前でガックリと倒れそのまま動かなくなった。

「ふ、正義の裁きだ」

第三十四話「仲直り」

浩は気絶している龍平の頭を指でつつんと動かす。

「やっべ、やりすぎたかな」

浩の背負い投げ？は見事に龍平の頭から地面にクリンヒットしてしまった。まあ、下がコンクリートではなく芝生で良かったよ。

「に、兄ちゃんーーーー！！」

その場の出来事で放心状態だった武弘はやっと正常な意識に戻り泡を吹いている兄貴の場まで駆けつける。

「兄ちゃん、兄ちゃん」

「うゝ・・・」

弟の武弘のかけ声に龍平は目を半開きにさせ意識を取り戻した。

「大丈夫、龍平君」

由美が近くまで行き龍平の体を起こした。さきほど自分にされた事を微塵にも感じさせていない。

「いたた・・・」

腰をさすりながら龍平は起きあがる。

「この糞野郎!!」

意識が正常に戻り戦闘モードに切り替わろうとする。

浩と龍平の睨み合いがバチバチと響き合う。

「死ねコラー!!!」

「上等だかかってこい」

二人がまさに衝突する瞬間!

「ちょっと待った!!!!!!」

由美が二人の間にわって入る。

「!!」

「!!」

二人の拳が由美の顔すれすれでストップした。

「おい由美!危つく顔面をグーで殴るところだったぞ」

「浩は黙ってて」

「・・・はい・・・」

由美はそう言い龍平の方へ振り向いた。

「僕達の目的は僕の弟の太介をいじめていたこの武弘君に注意をしようと思つて来ただけなんだよ。なのになんでこうなっちゃったんだよ。それに喧嘩は駄目！何も解決しないよ」

「・・・」

黙りこむ浩。

そして龍平が一言。

「うぜーよ」

この言葉に由美も一言。

「うざくないよ」

「いやうざいね。男の喧嘩に女は口を出すな」

「いやうざくないね」

「うざいつて言ってるだろうが」

「いやうざくないね」

「うざいんだよ」

「うざくないよ」

「・・・」

「・・・」

「ひかねーな」

「ひかないよ」

「・・・」

「・・・」

「家に戻れ武弘」

「え？兄ちゃん」

「戻れって言ってるんだ」

「わ、分かったよ」

武弘が時々後ろを振り向きながら大介を睨む。

「いいか。今日はこの女に免じて引いてやるがまたここに来て見る。殺すぞ！」

「それはこっちのセリフだ」

またお互い睨みはじめた。

「はいはい終了ーーーー！！僕達はもう来ないから。そのかわりに

武弘君にはちゃんと注意をしてね。大介から奪った金はもういいからさ」

「金を奪った？」

「うん、そうだけど・・・知らなかったの？」

由美達はこの兄がその事を知っているとばかり思っていた。そして僕は龍平君にこうなった事情を丁寧に説明してあげた。

「ガキのただの喧嘩だと思ってたわ。それがまさか恐喝でそいつから金をふんだくるなんて」

あれ？さつきと様子が違うような？

「あのバカ！男同士の殴り合いならいざ知らず金銭的トラブルだったとわな」

いや殴り合いもどうかと・・・

「すまん！！一応謝っとく。俺は人の物を盗る奴とぶりっこ女は大嫌いなんだ」

「俺は好きだぜぶりっこ女」

浩の目が変わってる。違う意味で怖いよ。

――

「ごめん・・・な・・・さい」

それから龍平が武弘を呼び出し頭にゲンコツを一発入れた。

「おら！もつと心をこめて謝れ」

「もういいよ」

大介が武弘の側まで行き手を前に出す。

「仲直りの握手」

「・・・」

「あ・く・し・ゆ」

《ギュツ》

二人の手が合わさってこの一件は事を得た。

「俺も悪かったよ。髪なんか引つ張ったりして」

「大丈夫大丈夫！全然気にしてないよ。それに龍平君は弟思いのお兄ちゃんということが分かったから安心したよ」

「そうか・・・」

「うん」

「あ！あと一つ言いたい事があるんだけど」

「何？」

「お前さっきの度胸といい、言葉の使い方といい・・・なんつか・・・男みたいな奴だな。そういうの俺タイプなんだぜ。活発少女みたいな」

「え？」

「ちよつとたんま！！」

その会話を妨げたのが浩であった。

「残念だがこいつはお前には興味はない。と言つか論外だ。さ、学校に行くぞ由美。今頃、先生は怒りに満ちてるはずだからな」

そう浩は言って大介と由美を引っ張って去っていく。

「ちよつ！浩、痛い」

「うるさい早く行くぞ」

「浩兄ちゃんヤキモチ妬いてるんでしょ」

大介の言葉に浩の顔は真っ赤になった。

「違うわい。早く中学校に行け大介」

「はい」

第三十五話「胸筋」

「だりー」

「だるいね」

「重いぞこれ」

「重いねこれ」

教室の前の廊下で由美と浩は水が入ったバケツを両方の手で持つて
いる。理由は学校に遅刻したからだ！

「なんだよこれ。今時こんな罰なんかないだろ。漫画の世界のの○
太じやあるまいし」

「僕達は大介をいじめていた奴を叱りにいっただけなのにね」

よりによって一時間目の授業が社会だった。なぜ社会が最悪かと言
うとその担任の先生がめっちゃうざいのだ。というか真面目を真面
目で足したみたいな存在だ。

* 授業が始まる5分前には席につく。

* 忘れ物一つにつき反省文を一枚。

* 授業に遅れた場合はそれなりの罰を受けさす。

* 男も女も公平に罰を受けさす。

e t c . . .

と言うような事を最初の授業の時に言っていた。

「やべ、腕がふるふるしてきた」

「ファイト浩！あと5分程度だから頑張って」

「よく平気だなお前は」

「やっぱり男は力がないとね」

「・・・あっそーですか」

《十分休み》

「ぷ！災難だったわね由美」

ん！今原田さんの唇がゆるんだぞ。

「笑い事じゃないよ。もう腕がつりそうでしょうがないんだから」

「どれどれ」

原田さんは僕に近づき胸を触った。というか掴んだ。

「ちょっ！！何やって」

「お！ちゃんと締まってる胸なこと。でも私の方が・・・」

そう言い片方の手で自分の胸を触る。

「由美はブラジャーはしないの？いくら男の心であろうと体育の時とか透けちゃうよ」

・・・とその時、

男子A

《いいんだよ由美ちゃんは男なんだから。ねー由美ちゃん」

男子B

《そうそう当たり前だ。なあ、由美ちゃん」

男子C

《・・・無論だ》

「変態共」

ぼそりと原田さんが呟く。

「由美、6時間目は体育だから私のブラを貸すから。陸上だから絶対汗かくよ」

男子達

《えーーーーー！！》

「今中原君もさりげに《えーーーー！！》って言ったでしょ」

そう言われ浩は口笛を吹きごまかす。

男子A

「何ごまかしてんだよ。実はもう由美ちゃんと《ピー》的な事をして《ピーピー》的な事をやったんだろ」

「な！」

「は！」

僕と浩は男子Aを廊下に引きずり出してその場に正座をさせる。

「そんな事は断じてあつてほし・・・じゃなくて絶対ない」

ん？今言葉の内容に違和感が・・・

「僕だってなんで男の浩と《ピー》をしないといけないんだよ。絶対有り得ないね。というか無理無理！」

「そこまで否定しなくても」

浩はその場にうずくまりぶつぶつと何やら小声で呟いている。
そして正座をしていた男子Aがいつの間にか浩をなぐさめていた。

「どんまい」

この言葉を言い残し男子Aは教室の中に入っていった。

《ぼん》

原田さんが浩に近づき頭に手を置く。そしてさらに一言。

「人間は・・・繊細だね」

「うるせー」

浩は・・・涙目になっていた。

第三十五話「胸筋」(後書き)

おまけ♪

由美

「体育の時間に僕にブラジャーを貸すと言ったけど自分のはどうするの？」

原田

「予備に二つ持ってるんだ」

由美

「何で！」

原田

「一つは由美専用のブラだから」

由美

「いらんわ!!」

第三十六話「大胆」

「バスケ♪バスケ♪バスケは何でバスケなの♪」

何を口ずさんでるの原田さん！

「由美は何でと思う？」

「え、僕！えつとそうだね・・・ん」

「真剣に考えなくても答えは一つよ」

いやそんなに胸をはって言われても。

「それはバスケだからだよ」

意味が全く分からない答えを言っただよこの人。

「誰にも言っちゃだめよ由美」

「・・・う、うん」

次の授業は体育である。そして今は体操着に着替えている最中。

「はい♪由美のブラジャー」

笑顔で原田さんが僕に代わりのブラジャーを渡す。一応、僕専用らしい。

「そっか！由美はブラジャーの付け方が分からなかったね。私が付けてあげる」

そう言い由美の後ろに回ってブラジャーをつけてくれた。

ちなみに色は紫！

汗で透けたらはっきりと分かるね。

・
・
・
とその時！

いきなりドアが勢いよく開いた。

《ドスン!》と言っ音と共に男子達4人が倒れこむ。

《キヤ————！！》

《なんで男子が！見張りの女子はどうしたの？》

《あ、ごめん。忘れてた》

《忘れるな！！》

男子A

男子B

男子C「あー、神様今俺は、とても幸せ……グブ……鼻血が……」

男子D《俺は悪くないぞ。こいつらが俺を誘って来たんだ》

「もう隠れるならバレないようにしないと」

由美は倒れている男子達の目の前まで行きしゃがりこむ。

男子A B C D《ブハーーーー！！》

男子達はいつせいに鼻血を吹き出した。

それは由美の格好を見れば明らかだ。

女子達《ちよつと由美、なんて格好で近づいてるの！！》

由美の格好・・・それは上にブラジャー、下には下着だけというな
んとも大胆な格好だった。

「由美戻れー。そして体操服を着ろ」

原田さんが僕に向かって叫ぶ。

「あ、うん分かった。それと君達ももうこんな事しちゃだめだよ。
今度したら先生に言うからね」

男子B《ふあい。もふしましえん》

両手で鼻をおさえながら男子達は去っていった。

女子達《由美はやさしすぎだよ。あれはれっきとした犯罪だよ》

「しかたないじゃん。男なんだから！そして僕もね。だから全然恥ずかしく・・・」

「へえー、じゃあ中原君に見られても」

原田さんの言葉で僕は・・・

「恥ずかしい」

今になって恥ずかしさのあまり顔が真っ赤になった。

「うんうん。やっぱり由美は○○○・・・だね」

「え？今なんて！よく聞こえなかった」

「何でもないよ」

第三十七話「こわっ」

桜の蕾が開きつつある。

ゆっくりと

ゆっくりと

もうすぐこの木全体に春の色が咲き誇るのだろう。

ゆっくりと

ゆっくりと

春が開花していく。

「由美こっちにパスだ」

「OK」

「させるか！」

バスケットボールが由美の足の間を交差しながら相手を翻弄する。まるで自分の体の一部のように・・・

「くそ！」

「ほらとってごらん」

由美の目の前で翻弄されているのは浩である。

「前やったサッカーのようにはいかんぞ」

「口より体が動いてないけど」

まるでプロのようなそのテクニックに応援している女子達が興奮する。

《由美ーーーーファイト!!》

女子達の声が体育館全体に木霊する。

《浩ーーーー奪いとれーーーー!!》

男子達も負けずに応援する。

コートの中は女「VS」男の熱気に包まれていた。

《試合終了》

みんなすごい汗をかいておりその場に倒れ込んだ。

由美は体操服をパタパタとおおぎ体に風を送りこんでいる。

浩は・・・仰向け状態で・・・落ち込んでいた。

「また・・・勝てなかった」

ぼそりと呟き、また沈黙する。

女子選手達は水分補給やストレッチをしているのだが男子選手は浩と同じく体育館の冷たい床に寝そべっている。

女子強し!!

・・・男子弱し・・・

「ほら立った立った」

浩に手をのばす由美。

だが浩は《床は気持ちいい》と言い由美の誘いを拒否！

同じく床に寝そべっている男子が由美に言った。

男子A《浩なんかほつといて俺に愛の手を》

男子B《いや俺に愛の手を》

男子C《いや俺に愛のハグハグを》

・・・ゴス!!

由美の蹴りが男子Cの顔に直撃。

男子C・・・戦闘不能。

その光景を見ていたほかの男子はゆっくりと自ら立ち上がった。

さすがにハグハグは気持ち悪かったであろう。

由美は戦闘不能になっている男子を上から睨みながら去っていった。

「由美・・・こわっ」

浩は身震いしながら呟いた。

第三十八話「なぜに？」

《朝7時》

朝の日差しが差し込みちょうど良い温度だ。

今日は土曜日。なぜか休みの日は早く起きてしまう。この中原浩の唯一の幸せの時間こそがこの休日なのだ。

さてもう一度深い眠りとつきますか。

俺は右に寝返りをうつた。

そこで俺が見た物。

由美だ。

ん？・・・由美？

・・・・・・・・・・・・・・・・何で由美があ
あああああああ

俺はびっくりして掛け布団をはいで由美を起こす。

「おい由美！！」

「・・・・ムニヤ」

起きねーし。

そして俺の視線は由美の顔から下半身へ……

なぜって？

それはね――

あのね――

着用してないんだよおおおお。

ぎりぎり下着はしているがそれを覆う物を身に着けていないのだ。

しかもよく見たら上着もタンクトップのみだしよ。なぜにタンクトップ？まだ3月じゃん。もうすぐ4月に入るがまだ朝は寒いぞ。

頭で色々ツツコミを繰り返している俺。

「起きろ！おい由美起きろ！」

体を揺さぶるが反応なし。

こいつわざとやってるのか？

俺は由美の顔に近づきこいつの鼻をつまんだ。

口ではなく鼻で息をしていたのでびっくりしたのだろう。いきなりとび起きやがった。

《ガン！！》

由美の頭が俺の顔面に直撃した。

俺・・・鼻血ブーーーー。

「わっ！！大丈夫、浩」

俺、鼻折れたんじゃない。

《5分後》

「何でお前がここにいるんだよ」

鼻にティッシュを詰めながら俺は言う。

「別にいいじゃん」

「よくねーよ。しかも何だよその格好」

俺のその問いに由美は。

「だってタンクトップって格好良いじゃん」

「いや違・・・ってそれもそうだけどおのれの下半身を見ろおのれの」

俺は目をそらしながら、由美の下着を指差す。

「全く・・・このくらいで。僕はただ夜に浩と一緒に寝たかっただけなのに」

「アホかお前は。しかも理由は《一緒に寝たかった》・・・俺の心を壊す気かお前は」

《プー》

由美必殺の顔を膨らませる攻撃。

しかしその格好でその姿をされたら世の男性方は理性を抑えられな
いぞ。

「まあ、いいや。僕帰るね」

「まずズボンを履け」

「はいはい」

由美はめんどくさそうに俺のタンスからジーンズを取り出し履きは
じめた。

「ちょっと待てえええええ」

「もう何！」

「もう何！つじゃねーよ。それ俺のなんだけど」

「別にいいじゃん。同じ人類なんだから」

理屈が分かんわ！

・・・その時、足がズボンの裾に引っかかり由美が前へ転倒しよ

うとしていた。

「由美危ねーーーー」

俺の鋭い反射神経で由美をキャッチ。

・・・出来なかったーーーー！！

由美はその場で転落。

「あわわ、大丈夫か？」

俺は由美に歩みようとするが何か殺気のようなオーラが漂っていた。

半分は俺が悪いが半分は由美の不注意だろうが。

「頭ぶつけた。バカになっちゃう」

頭を撫でている由美。

「大丈夫大丈夫。お前は石頭だから」

「せっかくあと少しで春休みに入るのに怪我でもしたら浩のせいだからね」

100パーセント俺のせいですか！

そういえばあと一週間ほどで春休みか。

何をしよう？

何か嫌な予感がするな・・・

家でごろごろタイムをエンジョイしたいが絶対邪魔が入る予感がするよ。

第三十八話「なぜに？」（後書き）

由美

《タンクトップって動きやすくて快適だね》

浩

《まだ着るのが早いわ》

由美

《あ！言い忘れたけどこのタンクトップも浩のを借りたから》

浩

《どうりで見た事があると思ったわああああ》

由美

《最近短気だな浩は・・・》

第三十九話「旅行!!」

花は咲かすもの。

木の実のみならずもの。

心は開かすもの。

そして・・・

恋は・・・

「恋は奪いとるものだね」

何をいきなり言ってるん原田さん。

今は原田さんと一緒に春休みのプランを考えている。

しかしなぜ僕の自宅で？

「・・・と言うように春休みは気合いを入れて遊びまくるぞ!」

「そんなに今から計画を立てなくても」

そう言うと原田さんは僕に人差し指をビシッと向ける。

「一年に一回の青春の休みだよ。恋を奪いとるバトルロワイヤルなんだから」

「どこが青春の休みなんだよ。怖いよ」

原田さんはテーブルに置いてあった母大福を手にとり頬張りながら何やら考え事をしている。

「どこの県に行こうかな」

どこの県？

どこかに旅行でも行くのですか！

「無理無理。僕はこの区域で春を過ごすからね」

「却下」

即答ですか！！

「大丈夫大丈夫。由美のお母さんには話をつけたし、浩の方は・・・多分大丈夫でしょう。田辺は無理矢理連れてくしね。あとは2名ほど欲しいわね」

ほぼ強制的じゃん。

「それに私決めたの。由美と浩の仲をラブラブでキヤーキヤー的な感じにするって」

狙いはそこか！！

・・・結局、春休みが始まったらすぐに旅行に行く事に決まった。

場所は僕や浩、田辺君に相談なく東京になってしまった。

今になって言うが僕達の住んでいる街は福岡県。

九州では都会だが東京と比べたら微々たる物だろう。

一度行っではみたかったのだ。まだ一度も日本の大都市に行った事はなかったからね。

それと僕達親の意見は《怪我をしない程度にデレデレしてらっしゃい》とか《浩が・・・ついに男に・・・》とか《お土産は東大の赤門のかけらで・・・》などなど、とても親が心配して放つ言葉ではなかった。

唯一マシな事を言ってくれたのは大介だった。

飛行機と新幹線のどちらにしようか迷ったあげく田辺君が以外にも高い所が苦手で飛行機には乗れないらしいので呆気なく新幹線で東京を目指す事になった。

「お金が・・・ぐすん・・・」

僕は今までコツコツ貯めていた貯金箱に手をのばした。

第三十九話「旅行!」(後書き)

由美

《お金が・・・》

浩

《金が・・・》

田辺

《僕の全財産が・・・》

原田さん

《パパー!!東京の美人の女の子を連れてくるからお金ちょうだい》

パパ

《マジで!!いくらだ》

原田さん

《30万ほど》

パパ

《な!!》

由美、浩、田辺

《アホか――――!!》

第四十話「春休み初日」(前書き)

短文になりました。

第四十話「春休み初日」

やっと訪れた春休み。春休み初日の昼にはもう駅に集合らしい。つまり今日だ！
せつかくの休みがばたばたではないか。

荷物を詰め込もうとするがカバンに入らない。もうギュウギュウである。

「しょうがない。これは外すか」

僕はカバンの中からサッカーボール、テニス道具、卓球道具などを出す。

「やはり無理だったか」

「当たり前じゃん。旅行に普通こんなのいらないよ」

いきなり後ろから大介が話しかけてきた。

「いやー、念の為にと……じゃなくてそれはともかく部屋ちゃんとノックしたの？」

「そんなの関係ねー。そんなの関係ねー」

「誰の真似！」

「昔あつていたお笑い芸人のネタ」

「そんな悲しい事を言うな大介。みんな頑張ってるんだから」

「姉貴も旅行でラブラブを頑張ってこいよ」

何の応援!!

「まあ、とにかく東京は色々な人種がいるから頑張ってね」

「何をまた・・・本当は僕がいなくなって寂しいんじゃないの?」

「・・・」

「寂しいんですよ」

「・・・別に」

「ふーん」

「早く行けば・・・」

「じゃあ早く行くからいいよ!」

僕は大介を部屋から追い出し最後の荷物点検をする。

「んゝ何か足りない気がするな」

《ガチャ》

部屋のドアがゆっくり開いた。隙間から大介の顔がチラリと見える。

「何？」

「姉貴これ・・・」

そう大介は言っと、赤い色のお守りをくれた。

「恋が実るお守りだから姉貴にあげるわ」

「・・・ありがとう」

第四十話「春休み初日」(後書き)

由美

「え〜と・・・旅行費が・・・ん・・・な!!」

大介

「どうしたの姉貴」

由美

「僕の貯金箱が0になってしまっ」

大介

「・・・」

由美

「だ〜い〜す〜け〜」

大介

「やだ! お金は貸さないからね」

由美

「こういう時だけ勘がいいな」

第四十一話「因縁」

「東京♪東京♪」

「秋葉原に一度行ってみたいな」

「田辺・・・きもいよ」

「原田さんも一緒に行く？」

「えー!!」

原田と田辺の会話にもう二人の男女が会話を妨げた。

「由美ちゃんも来るんだろ？」

「浩さんも来るんでしょ」

高木聖子と松本龍平だ。

原田さんの行動力はすごい。普通ならこの二人だけは絶対に呼ばないほうが良いに決まってるのだがそこは《気分的な感じ》にまかせてこの二人を招いたらしい。なぜ原田さんが、松本龍平の事を知っているのかと言うとそれは勿論由美からの情報だ。この女にはあまりベラベラと秘密などは喋りたくはないものだ。

デカイバツクを持った四人の男女は新幹線のチケット売場前で由美と浩を待つ。

「ねえあんた、上野さんの事を狙っているんならやめたほうがいいわよ。あの性格悪いし、浩さんと一緒にお風呂に入った事もあるらしいし、料理はまともに作れないんだから。しかも激マズ！」

聖子は龍平に由美の事を言いまくる。しかしほとんどが愚痴だ。料理の事は自分が負けた事の言い訳にしか聞こえない。

「あん？てめーこそあの浩って奴狙ってるんだろ。やめとけやめとけ。あいつは駄目だ。暴力は使うは、身長は俺より低いし、ナルシストだし。この前なんかあいつから背負い投げされたしよ。あ、やべ腰がまだ痛い」

龍平は自分の事を自己紹介しているように聞こえる。大介達の件で先に暴力をしかけてきたのは龍平だ。しかも浩とは身長は二センチくらいしか変わらないし、それにナルシストは龍平本人だ。

「だいたい俺が本気を出せばあの時の喧嘩は俺が勝ってたんだ」

その時、ぬぐつと後ろから黒い影が出てきた。

「へえーてめーが勝ってたんだ」

「おう！当たり前・・・っていつの間に！」

バチバチとお互いの視線がぶつかり合う。因縁の対決がスタートしてしまふ。

「はい、ストロップ」

由美が間に入り二人を落ち着かせる。

「なんでこいつがここにいるんだよ」

浩は原田さんに向かって言い放つ。

「格好いいから」

全くもって意味が分からない返答に浩は啞然としている。

「キヤー、浩さんお久しぶり」

いきなり背後から聖子が抱きしめてきた。

「げ！そついえば何でお前までいるんだよ。それと離れるコラ！」

「お前とか言わないで聖子って呼んでいいからね」

「絶対呼ばん。前までは《高木さん》だったけど今からは高木って呼び捨てで呼んでやる」

「呼び捨てで呼ばれるのも何か心に突き刺さる物が・・・」

浩は一步後ろに下がり一言。

「こいつMなのか？」

その時後ろから浩は何か殺気を感じてしまう。

「うわぁ、由美のオーラが・・・赤い」

「ねえ、原田さん。何で高木さんが？」

その質問にも原田さんは・・・

「可愛いから」

由美の眉がぴくりと動く。

「ちよっ！何その・・・」

「はいはい話は終了。じゃあそれではlet's go」

由美の話は・・・流された。

上野由美VS高木聖子

中原浩VS松本龍平

ここに開幕！！

「え？僕、忘れられてる」

田辺はみんなに聞こえないようにひっそりと呟いた。

第四十一話「因縁」 （後書き）

聖子

「何あんたもつとセクシーな服を選べないの？」

由美

「高木さん・・・大きなお世話だよ」

聖子

「もつと胸元強調させるとかミニスカで浩さんを誘惑したりするものでしょ」

由美

「変態」

聖子

「貧乳」

由美

「な！」

由美

「・・・このチビ」

聖子

「な！」

女は怖いです。

由美

「僕は男だ――」

第四十二話「いざ！東京へ」

「なんで俺が高木と隣なんだよ」

「それはこっちのセリフだよ。なんで私がこんな不良少年と横にならないといけないのよ。浩さんがよかつたわ」

新幹線の席がたまたま隣どおしになってしまったのを不服に思っている二人。

前の席には由美と浩が座り、その前の席には原田と田辺が座っている。

「ねえ、浩。東京に着いたらどこにまわろうか」

「んー、そうだな。そういえばまだ考えてないな」

浩はカバンから何かの雑誌を取り出す。東京の案内ガイドだ。

「これもいいし、これも・・・お！ここも行きたいな」

「え！どこどこ」

由美と浩は自然にお互にくつつきながらいろいろ意見を交換していた。

その光景を後ろの座席の隙間から見ていた聖子をとて不機嫌な顔をしている。

「くー、私の前でイチャイチャしやがって」

「別にイチャイチャはしてないと思うが」

龍平は窓の風景を眺めながら言った。空は快晴で田んぼにはつてある水が反射してとても綺麗に空が写しだされている。

「ふーんだ」

聖子は横を向き親指を噛み締める。

「田辺お腹すいたー」

「コンビニで買ったサンドイッチがありますけど」

「却下」

「え！何ですか？」

「おにぎりが食べたい気分なの」

「じゃあツナおにぎり食べますか」

「昆布がいい」

「・・・わがまま娘」

「何か言った」

「いや別に」

田辺はコンビニ袋から昆布おにぎりを一つ取り出し原田さんに手渡した。

「もぐもぐ……ん、やっぱりおにぎりはセブン〇レブンに限るねー」

「これロー〇ンのおにぎり何ですけど」

「……別にロー〇ンもセブン〇イレブンも変わらないわよ」

《無茶苦茶だこの人》……田辺は頭の中で呟いた。

……《二時間後》

「ムニヤ・・・あー、だめだよ浩。そこは台風の目だよ・・・危ないってちよつ！・・・だめ突っ込んだら！・・・あーだめだつて・・・ムニヤZZZZ・・・」

「なんつー夢を見てるんだ。しかも俺が出てきてるし」

由美は今爆睡中である。ヨダレを垂らしながら本当に深い眠りにはいつていた。

「仕方ないな」

浩はポケットからハンカチを取り出し由美のヨダレを拭き取る。

その光景を聖子は後ろから見ていた。

「あの野郎ー、浩さんのハンカチで口元を拭いて貰って・・・くーやーしい」

「黙れM女」

横から龍平の罵声が飛ぶ。

「何ですって」

「あん？喧嘩売ってんのか。早くさっき買った駅弁でも食って寝ろ。マジ気がちるんだよ」

「ふん！あんな自分の事を《僕》とか呼んでいる女のどこがいいのよ。私と初めて会った時は《私》とか言ってたくせに。だんだんボ口がでてきたんじゃない」

「バカかお前は。その言葉使いがまた男の本能を駆り立てるんだよ」

「キモいんだけど」

「お前もな」

「ZZZZZ・・・」

同じく田辺も爆睡中である。

横で原田さんが田辺の顔をぼんやりと見ていた。

「こうして見ると田辺も結構可愛いもんだな」

「ZZZZZ・・・」

「・・・どれどれ」

田辺のほっぺを指でつまんで引っ張ってみせる。

「おー、やわらかい」

《びよーん》

《へによーん》

ほっぺを触りまくる原田さん。

「伸びる伸びる♪・・・・・・・・ん？」

《ムギユツ》

田辺の手が原田さんの胸をわしづかみにした。

「ZZZZ・・・・・・・・肉まん・・・」

「な！」

田辺はいやらしい手つきで原田さんの胸を揉みだす。

「キヤーーーーー！！このウンコ野郎」

女の子が絶対に口にしてはいけないであろう単語を言い放ちながら田辺のほっぺをビンタする。

その大きな声で周りの人や由美が目覚めました。

「あ！すみません。何でもないです。ホホホ・・・」

席を立ち原田さんはそう言って顔を真っ赤にしていた。そして再び座ると田辺の方を振り向いた。

本人の田辺は何があつたか分からない状況で放心状態でした。

「・・・痛い」

ほっぺを抑え涙目の田辺。

「ご、ごめんね。そんなに強く叩くつもりじゃ。でも私の胸を揉んだ罰だから少しはそっちも責任があるんだからね」

その言葉を聞き田辺の顔は驚いた様子だ。

「え、マジで？」

「マジよ。それも嫌らしい手つきで」

「・・・どっちの手？」

「・・・」

「左だけどそれがどうしたの？」

「・・・洗わないど」

「この変態があああああ」

原田さんが恥ずかしがる姿がここにあった。とてもレアである。

第四十二話「いざ！東京へ」（後書き）

今回のみんなの服装です。

由美

・上着は下に白いＴシャツを着て上は黒のパーカーを着ている。勿論、下はジーンズである。

浩

・下は由美と同じジーンズを履き、上は肌を少し露出した着こなしをしている。

原田

・とにかくスカートがかなりミニである。

龍平

・下は迷彩のダボダボのズボンを履き、上の服は黒いＴシャツに気味悪いガイコツの絵が《ドン》とのっている。

聖子

・若干太ももまで覆っている青色のハーフパンツをはいている。上は・・・露出しすぎて説明できません。

第四十三話「いざ！東京へ〈後編〉」

《次は神戸。神戸です》

アナウンスが流れる。

「まだまだかかりそうだね中原君」

後ろを振り向き原田さんは浩に言う。

「そうだな」

「ねえ、浩はどこにいきたいの？」

「あんな原田。前々から言おうと思ったけど《中原君》とか《浩》とか別々に名前を呼ぶな。どっちかに統一しろ」

「別にいいじゃん。気分で名前の呼び方は変えたいの」

変な考え方である。

「あーそれより暇だよ。何か暇つぶしの道具とかないの」

原田が足をバタバタさせていると田辺がそれを注意する。

「うるさいですよ。携帯でもいじってたらいいじゃないですか」

「その手があった」

「ばか！由美がいる前で携帯は禁句だぞ」

浩が原田の耳元で囁く。

「あ！」

「ごめん」

「どうせ僕だけ携帯を持ってませんよ」

「何、上野さん携帯持っていないの？今どきださくない？道理で携帯をいじくる光景を見ないわけだ」

聖子はそう言うのとポケットから携帯を取り出しわざと画面を開いたり閉じたりした。

「別によくな？俺も携帯は持ってるけどよ、バイトを最近し始めてやっと買ったばかりだしよ。だいたい由美ちゃんにイチャモンつけすぎだよお前」

「あんただって浩さんにイチャモンばっかつけてるじゃない」

「は！キレていいかなおれ」

「どうぞお好きなように」

お互い睨み合う二人。

「喧嘩するほど仲が良い」

原田さんは龍平と聖子に聞こえるように今の言葉を口ずさんだ。

「な！原田テメー、これが仲が良い風に見えるのか」

「マジありえない。こつもつるさいなんて。やっぱり浩さんの隣が良かったわ」

お互いご機嫌ななめ状態がマックスである。

「あ！そうそう由美」

「何？原田さん」

「あんたバイトっていつから始めるの？」

「んー、春休みが終わってぼちぼち探してみるよ。携帯も買いたいし」

「早くしないとなくなっちゃうよ」

「うん」

その会話を隣から何気に聞いていた浩が会話にはいつてくる。

「別にそんなに焦らなくてもいいと思うけどな。全員が全員携帯電話を持ってるわけでもないし。ゆっくりと探せば・・・なあ由美」

「・・・そだね」

「はあ、それにしても」

原田はため息を一回つき言葉を続ける。

「お腹すいた」

「まあ確かに腹はへったな」

龍平はお腹をおさえる。

「僕は全然大丈夫」

「あんたはさっき大福を十個ほど食べてたでしょ」

「高木さんだってコンビニで買ったシュークリームをたくさん食べてたじゃん」

「シュークリームは別よ。あれは・・・え」と・・・とにかくシュークリームは関係ないわよ」

「ほらよ」

いきなり龍平が聖子にコンビニで買ったおにぎりを四つ渡した。

「な！という風の吹き回し」

「お前らがごちゃごちゃうるさいからだよ。原田と分けて食べや」

「・・・ありがとう」

「つーか早く東京に着けこの野郎」

「もう少しだから頑張る龍平君」

由美が席の隙間から龍平に言う。

「別にイライラなんか・・・全然・・・してないぜ」

「良かった♪」

「何でれでれしてんだか」

聖子がおにぎりを食べながら言う。口にシーチキンのマヨネーズを付けたまま。

第四十三話「いざ！東京へ〈後編〉」

（後書き）

由美

「携帯電話・・・ほしいな」

原田

「前持ってた私の携帯をあげようか？」

由美

「使えないじゃん」

原田

「音楽が聞けるよ。由美が大好きなコブ○口の桜や蕾が入ってるよ」

由美

「なんかむなしいよ」

田辺

「それはそうと前の後書きで僕だけ服装の紹介が書かれてませんでしたよ」

作者

「すまん。忘れてた」

田辺

「さくしゃああああ・・・涙」

第四十四話「ホテル」

「着いた――！！」

「ほっぺがまだヒリヒリする」

「肩こったわ」

「ババアかお前は」

「ねえ、でっかいビルがたくさん」

「由美、興奮しすぎだ」

僕は渋谷と言う街をブラブラ散歩している。はっきり言って長く新幹線にいた時は眠くて、だるくて頭がおかしくなりそうだったよ。

「あー、あの服いいな」

聖子はガラスの中に飾っていた服の前で立ち止まる。

「その横の服もなかなか・・・」

原田さんも一緒に立ち止まる。

「女って・・・」

龍平はため息をつき二人の袖を引っ張りながら前に進もうとする。

「ちょっとまだ見学中なのに」

「ちょっと何さわってんのよ」

二人は文句を言いつつもその場を諦める。

「まずは泊まるホテルを探すのが優先だろうが」

「それなら大丈夫よ。私がちゃんと人数分の部屋を予約してるから」

自信満々に言う原田。

「・・・早く言えよ・・・で、そのホテルってどこなんだよ。荷物をまず置きたいんだけど」

「あんたの目の前にある奴だよ」

原田が人差し指で指をさす方向に全員目をむける。

「これって・・・」

「・・・」

「嫌、だめだろ」

「俺は無理だ」

「絶対いーや」

《心と体をリフレッシュ！！一つの個室で二人だけの空間を！オモチャそろえています》

と言う看板文字が目の前にあった。

さきに突っ込んだのは浩だった。

「おいおい！明らかにあっち系のホテルじゃんか。なんだよオモチャって！何のオモチャなんだよ」

「震える奴なんじゃないの？」

「サラッと言いやがったよコイツ」

「ねえ浩、震えるオモチャって何？」

由美はわくわくした目で浩に質問する。

「いやお前には関係ないから。関係あるようにで全く、とにかくオモチャって言うのはアレで、それでもなくて・・・あれ？なんかもう訳が分からなくなってきた」

「もういいじゃない。ここで一泊二日過ごすわよ。意外に安いんだから」

「ラブホか・・・」

田辺が一人で呟いた。

第四十四話「ホテル」（後書き）

由美

「浩って好きな人いるの？」

浩

「何を突然！」

由美

「いや・・・何となく」

浩

「・・・一人いるよ」

由美

「・・・そう」

浩

「なんで落ち込んでだ」

第四十五話「告白」

「結局入ってしまった」

「別にいいじゃん。気にしない気にしない」

「よくねーよ」

なぜだ！どこをどう間違ったらこんな部屋割りになるんだ。

《由美、浩ペア》

《龍平、聖子ペア》

《原田、田辺ペア》

おかしくね？明らかに何か仕組まれてるよこれ。

絶対原田のせいだよ。

しかも泊まる場所からして終わってるしよ。なんでラブホっぽいホテルに泊まってんだよ。つか90パーセントラブホだよここ。

頭の中でいろんな点について突っ込んでいる俺。

「おー、でっかいベッド！」

由美はベッドに寝転がる。

この部屋を少し詳しく説明すると外装はたいして派手ではない。部屋の広さは二人では十分すぎる広さだ。ただ部屋の壁に貼ってあるポスターが気になる。よく見るとママシンドリンクのポスターだ。このポスター貼った奴死んで下さい。

「ふかふか♪寝ちやいそう・・・ん、何だこれ？」

由美が手に持っているものは・・・

「香水か、シャンプー？」

由美は手にその液体を垂らしてにおいを嗅いだ。

「なんかヌルヌルするんだけどこれ」

俺は由美からすばやくその物体を取り上げた。

「ねえ浩、何それ？」

「これはローシ・・・じゃなくて男が使う物だからお前には必要なし」

「ふーん。じゃあこれは？」

由美はベッドの下からバ〇ブを取り出した。

「ぶはー!!」

俺は吹き出しながらも由美からそれを強引に取り上げた。

「これは子供が使うオモチャだからお前は必要ないんだよ」

「ふーん、オモチャね。でも何でホテルに・・・」

「ストープ」

俺は由美の言葉を強引に終わらせた。

「この話は終わりだ。荷物の整理をしてこんな部屋早く出よう」

やべ、俺の身が持たない。由美もどれだけ天然なんだよ。普通、あのくらいの道具くらい見当がつきそうだが。

「なんで私が龍平となのよ」

「お！ちゃんと下の名前で呼んでくれたな・・・じゃなくて俺も高木とじゃなくて由美ちゃんと一緒にがよかったんだけど」

「余計なお世話よ」

「あー、そうですか」

二人の目線に火花が散る。

「汗かいたから着替えるわ。向ここの部屋にいつてちょうだい」

「誰もお前の裸に興味なんかないし」

「何ですって！」

「何でもねーよ」

龍平は隣の部屋に入る瞬間に小言で呟く。

「普通にしたら可愛いのに」

「絶対仕組んだでしょ原田さん」

「そうよ。あの組み合わせが一番面白いと思ってね。それに・・・」

「それに？」

「私、あんたの事が好きかもしれないから」

「は？」

突然の原田の言葉に田辺は困惑している。

「好きかもしれないじゃおかしいわね。じゃあ言い方変えるね・・・
・・・好きなのよ」

まさかの告白！！

田辺の答えは・・・

「僕も前から原田さんは好きだったよ」

にこりと微笑む田辺の顔はとても嬉しそうな表情を作り出していた。

「まあ、うすうす感ずいてはいましたけどね。僕によくちよっかいを出してくるんで」

「ばれた！」

「でもそんな風な原田さんに僕も惚れたんですよ」

原田の顔からなぜか涙が流れていた。

告白できた嬉しさの涙であろうか。今までの原田の顔にこのような表情を見るのは多分初めてであろう。

「ちよっ！大丈夫ですか」

田辺は原田の顔に近づく。

・・・と次の瞬間。

《チュッ》

「%×○* #」

口と口が合わさった。

田辺は驚いてその場で硬直しており、原田は目を閉じ田辺の口にやさしいキスをした。

少しの時間が経ち、口と口はゆっくり離れた。

「田辺のファーストキスいただいたぜ」

「僕は・・・今・・・キス・・・マジで・・・」

頭が沸騰してるかのように顔が真っ赤だ。

《五分後》

お互い緊張の糸がほぐれて会話を弾ませている。

「しかし原田さん。告白の場所がここというのはどうでしょう？」

「二人だけの空間だったからつい。あ！でもこれはまだ駄目だからね」

そう言い原田さんはベッドの下にあったオモチャを取り出した。

「まだ駄目ってどういう意味？」

「そういう意味よ」

《ブー！！》

鼻から大量に鼻血が出た田辺であった。

「冗談が通じないのね田辺って・・・」

第四十五話「告白」（後書き）

原田

「やったわ。やっと田辺に告白できたわ」

田辺

「あんな場所じゃなかったらもっと良かったんですが」

原田

「気にしない気にしない」

田辺

「原田さん」

原田

「何？・・・！！」

田辺

「・・・」

原田

「・・・」

田辺

「今度は僕がいただいたぜ」

原田

「田辺の分際で」

第四十六話「オタクの聖地」

ホテルから出た由美達は地下鉄である所に向かった。

すごい！

すごいぞ！

地下鉄から下りて地上に出ると異様な空気が漂っていた。

未知だ。未知の世界だ！

この六人もそう思ってるであろう。

「おい原田。やっぱ帰らね」

「だって田辺が行きたいって言うんだもん」

「一度は行ってみたかったんですけど・・・実際に見てみるとアレですね」

「田辺君ってこういう所に行きたかったの？きーもーい」

「黙れM女」

「うっさいわよこのDS男」

「僕は楽しそうでいいけどな」

由美だけ興味津々だ。

そう、この場所はオタクの聖地・・・

秋葉原である。

ゴスロリの服を着た女の子がチラシを配っていたり、メイドさん姿の女の子が客引きをしているのは当たり前前の風景だ。

「やっぱ帰ります?」

みんなの反応を見た田辺が言った。

「せっかくここまで来たんだから少しくらいよってかないか?」

浩はティッシュを配っているナース姿の女を見つめていた。

その姿を見た由美は浩のホッペを引っ張る。

「イテテ・・・何するんだよ」

「浩の顔が気持ち悪かったから」

その横で龍平が原田に言う。

「なあ、腹減ったからどつか寄らないか?」

その言葉に一同は一緒に顔を傾けた。

いざ飯屋を探しに秋葉原の街を散策する六人だが・・・

「なんでこの辺の人ってみんな揃って『デブ、ガリガリ、眼鏡、リュック』が一致してるのかしら」

聖子はけいべつした目で通りすがりの人達を見る。

「ここにしようよ。はい！ここで決まり！！」

由美が示す方向を一同が見る。

『オムライス屋』と書かれたその店に結局全員が入る事にした。理由は腹のすきすぎで。理

しかしここは秋葉原。

普通のオムライス屋ではなかったのだ。

第四十六話「オタクの聖地」(後書き)

大介

「姉貴・・・今頃何してるんだろ」

彼女

「お姉さんの事心配なの？」

大介

「・・・いや・・・ただ姉貴・・・って何考えてるんだよ僕は、よし、早く映画を見に行こうぜ」

彼女

「ふーん。大介君って・・・」

大介

「どうしたの？」

彼女

「かわいいiiiiiiよおおお」

大介

「え！何が何が！」

彼女

「全てがかわいいiiiiiiの」

大介

「意味が分かんないよ」

彼女

「その……とぼけた顔……抱きしめてあげる」

大介

「恥ずかしいよ……って本当にやるなあああ――！！！」

第四十七話「殺気と殺気」

「男って・・・」

「浩の顔が・・・」

「田辺のバカ・・・」

由美達三人はテーブルの端でウーロン茶を飲んでいる。

「お！君可愛いね。俺とつき合わない？」

龍平は目の前のメイド姿の女の子に話かける。

《はいご主人様。今、オムライスが美味しくなる魔法をかけてるので話かけないで下さいね♪》

遠回しにふられた瞬間だった。

「それにしても・・・君いくつ？」

顔の表情が崩れている浩が質問する。

《女の子に年齢を聞くのはショットガンで人をズタズタにしちやいたいくらいやばいので聞いちゃだめですよ》

「なんか色んな意味でごめんなさい」

浩の顔が青ざめてしまった。言葉のインパクトが強すぎたのだろう。

《はいご主人様、魔法をかけおえました。一口食べて下さい。はい、あーんして》

メイドの女の子は田辺の口元にオムライスを運んだ。

「うん、美味しいよ」

ご機嫌が絶好調の田辺に何やら凶悪な殺気を放っている人物がいた。

「・・・し・・・ね」

ぼそりと原田がつぶやく。由美と聖子もその殺気に気付いたらしくビククリしている。

「どうしたの？原田さん。顔が今から人殺しをしようとしている人の顔に見えるんだけど」

「え！あ、ごめん。ちょっとお腹が痛くて・・・」

「とてもそうには思えませんでしたけど」

聖子はウーロン茶を飲み終わり原田のところに近づく。

そして耳元で・・・

「もしかして田辺君の事が・・・」

その話をさえぎるかのように原田はトイレに向かって走っていた。

「あやしい。もしかしてもう・・・」

聖子の勘は鋭く良かった。

「なにになに？どうしたの？」

「上野さんには関係なくてよ」

「何それ！」

田辺は気づいていた。さっきまでの原田の殺気に・・・

「どうした田辺。顔色が悪いぞ」

ついさっきまでご機嫌がピークに達していたのに今は顔色が非常によろしくなかった。その事に浩は少し心配していた。

「いや、なんかこう・・・鎌を首筋に当てられたような感じが・・・」

「気のせいだよ。バカ女は置いとして《由美ちゃんは別で》盛り上

がろうぜ。なあ姉ちゃん、パンツ何色？」

龍平の頭が少しずつ壊れつつあった。

「やべーよ田辺。龍平がこの世界に汚染されつつあるよ」

「・・・いや、なんかもうこの店は出たほうが良い的な・・・」

《え！もう帰っちゃうのですかご主人様。もう少しだけいて下さいです。ドリンクをサービスしちゃいます》

そう言いメイドの女の子が浩のほうへ抱きついてきた。もちろん浩はいきなりの行動にビックリ仰天！

「む、胸が・・・」

しかし奥からグラスを割る音が聞こえてきた。

「ちよっ！何やってるの上野さん」

「え！別に・・・なんかイライラしてきたからつい手に力が・・・」

浩は命の危険を感じたのかメイドをやさしくどけた。

「浩、女って怖いね」

「そ、そうだな・・・」

浩と田辺には目をくれず龍平はこの店を満喫していた。

第四十七話「殺気と殺気」（後書き）

由美

「最近浩が女にデレデレしているとイライラしてくるのはなぜ？」

聖子

「子供ねー、あんだ。それは嫉妬というものよ」

由美

「まさか・・・僕に限って・・・」

聖子

「前から思ってたんだけどその《僕》って言うのはやめたほうが良いわよ」

由美

「余計なお世話だね」

聖子

「あらそうですか。余計なお世話でしたね。・・・・・・貧乳が・・・」

由美

「今なんか言ってたかなM女」

聖子

「な、なんですってええええええ」

第四十八話「嫉妬？」

「イテテ・・・耳を引つ張るな由美」

「イタ！痛いです原田さん・・・首もとを掴まないで！」

「ちよつ、痛いつて！なんでテメーが・・・・・・・・おい、髪を引つ張るな！痛いつてマジで」

由美、原田、聖子はバカ三人組を強制的に店から連れ出した。この男達の変貌をこれ以上見る事が出来なかったのであるう。

「ねえ、浩。今度知らない女の子が声をかけてきても返答しちゃだめだからね」

「え！なぜ？」

浩がそう言った瞬間、掴んでた手が耳から浩の髪の毛に移動し、グイツと自分の顔に引き寄せた。

「なんかム力つくんだよ」

「・・・」

「ね」

「はい・・・分かりました」

由美のその迫力に浩はただ従うしかなかった。周りの人間もそのオラに驚いている。

「全く浩さんも浩さんですわ。あんなブスにデレデレしちゃって。私がいるのに・・・」

「最後のは余計だな。あと髪を掴んでいる手を離せ」

「あら・・・悪かったわね」

そう言うと聖子は龍平の髪の毛から手をどけた。《むしりとった》

「ぎいやああああ髪が！！何しやがるテメー！！！！」

「ごめんなさいね。手が滑っちゃった」

由美と同じく凄い顔の形相で龍平を睨んだ。

「さっ、殺気！なぜ？」

龍平の体が震えていた。死の恐怖を本能が感じ取っていた。

「首の鍛え方がたらないわよ田辺。なんならもっと強くなるように私の握力で握りつぶしてあげようか」

鬼！それはもはや人の姿ではなかった。原田の手にメキメキと力が入る。

「ひえーーーー！！！！ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

必死に謝る田辺。しかしこの光景は周りから見たらただのイジメにしか見えないであろう。

「ねえ由美、お腹すかない？」

「同感だよ原田さん」

「私も小腹がすきましたわ」

三人の目はこの男達に向けられた。

「どうぞ。好きなところへ」

「ぼ、僕達が・・・払います・・・グスン・・・」

「なんで俺まで・・・」

女は・・・強かった。

第四十八話「嫉妬？」（後書き）

田辺

「原田さんって僕のどこに惚れたんですか？」

原田

「え！何をいきなり」

田辺

「だって僕って特に何か変わった事が出来るわけでもないし、顔も・・・普通だし・・・」

原田

「何マイナス思考に考えてるの。好きになったんだからしょうがないじゃない」

田辺

「好きですか・・・その言葉をラブホではなくもつと違ったところで聞きたかった・・・」

原田

「まだ引きずってるのかあんたは」

第四十九話「KY」

「はあ、食べた食べた♪」

「まあまあの店だったわ」

「田辺達のおごりだから気にせず食べちゃった♪」

由美、聖子、原田・・・気分良し！

お腹いっぱい笑みで男達に次の任務の命令を出した。

「次は服のお買い物ね！勿論、田辺のおごりで！」

「僕限定ですか原田さん！」

男達は不服であろう。ちょっとオムライスの店で可愛い女の子にデレデレしていたら《女の嫉妬？》が爆発してしまい今に至ってるわけなのだから。

「あのさー」

龍平が聖子に向かって不服そうに言った。

「なんで俺までこの仕打ちなんだよ。しかも聖子、貴様なんで俺の髪の毛をひき抜いた？リアルに痛かったぞ」

頭をおさえながら聖子に言い放つ。

しかしその言葉もむなしく逆に聖子に打ち返された。

「そんな事も分からないの？それはあんたが能無しの変態野郎だからよ」

「なんだと貴様ああああ！！」

怒る龍平を田辺と浩が取りおさえる。

周りの人々がびつくりしたようにこちらを見ている。

「本当に短気ねあんた。地球の空気に生まれ変われば平和になるのにな」

さらりと毒舌を言う聖子だが本人はあまり気にしてないらしい。

「まあまあ落ち着け龍平。ここは俺に任せてもらおうか」

二人より一歩前に立ち由美に問いかける。

「由美・・・」

「な、何？」

浩の真剣な眼差しに戸惑う由美だがそれは見事に崩れさる。

《お兄ちゃん、ここの店に寄って行ってニヤン》

「喜んで」

手を握りしめネコミミ姿の女の子に歩み寄った。

「ねえ浩・・・」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

由美の殺気が・・・

膨張していく・・・

「げ！しまった！あ、由美今のは・・・」

ドガ！バキ！ゲス！ゴキ！ドス！ガス！・・・

浩・・・その場で戦死。

《あ、あのー、えーと・・・うえーん！・・・店長殺人鬼がいますよー！！・・・》

ネコミミ娘・・・その場を離脱。

相当な恐怖だったのだろう。まあ確かに目の前で人が半殺し状態にあったのを見てしまったら普通は仰天してしまうはずだ。

「見損なったよ浩」

まだ怒りがおさまらない由美を聖子と原田は必死になだめる。

「全く、あんな衣装のどこがいいのか分からないんだけど」

「いや、由美ちゃんはブルマ姿が似合うと思うよ」

龍平が由美の肩に手をのせながら言う。

「KY」

原田がぼそりと言った瞬間、横を龍平が吹き飛びながら通過した。

第四十九話「KY」（後書き）

新しく投稿していた話を消して、この話に変えました。

前のは秋葉原の殺人鬼が出る話だったんですが・・・やめました。
・・・実際にニュースでやっていて興味本位でネタにしたのですが
やはりこのような事はいけませんね。

違うストーリーで執筆していきます（＾＾ゞ

第五十話へサイン

由美の拳で吹っ飛ばされ龍平は頭を抑えている。

「あれから結構たったのに頭の痛みがとれないんだけど」

龍平は由美に愚痴をとばす。

「ブルマ姿がどうか言うからだよ」

ご機嫌ななめの由美に聖子がさきほど買ってきたシュークリームを食べながら言いかける。・・・が、しかしその前に浩が聖子の行動について突っ込んでしまう。

「なぜにシュークリーム？」

気がついたら聖子が片手にシュークリームを所持していたので浩は少しビツクリした様子。

「シュークリームは女の子の宝石なんですよ」

全くもって意味が分からん言葉に浩は《こいつもバカだ》と心の中で思ってしまった。

「由美さんはすぐに暴力に走るからいけませんわ。私ならもっと違う選択をしますのに」

上品ぶりながら二個目のシュークリームを頬張る。

「《きまつた!》と思った顔をしているけど口に白いクリームが大量に付着してるよ」

由美の指摘に慌ててハンカチを取り出し口を拭う。

顔を真つ赤にし聖子は浩の顔を見る。

「ごめんなさい」

その言葉に浩は《なんで?》と思った事だろう。

実際にも・・・

「は?」

この一言は疑問でいつぱいだっただでしょう。

「なんか喋りなさいよ田辺」

あの萌え萌えの店に行った田辺は原田の視線を浴びて微妙な空気となり原田の顔を見れないでいた。

ちなみに今、田辺達がいる場所は小さい公園であってそのベンチに腰をかけている。なので六人がベンチに横に並んでいる状態。

なぜこの状態なのか?

理由は特にない。

ただ歩き疲れたので休んでいるだけである。

「なんか・・・風流だね」

由美のこの一言に聖子がぼそりと呟く。

「意味分かって言ってるのかしら」

「聞こえてるよバカ高木さん」

「なんですっ・・・」

「はいはい、おしまいおしまい。もう遅いからホテルに帰ろう」

原田が途中で会話を止めて立ち上がった。

「ホテルの名前に《ラブ》が抜けてるけど」

龍平が現実に戻った瞬間だった。

「原田さん！」

さっきとは違ってかわり勢い良いよく田辺は立ち上がり原田に親指でサインをする。

みんなには何が起きたか分からなかったであろう。

田辺がいきなり倒れたのだから。

後ろには原田の姿があった。

いつの間に移動したのであるか？

「男は変態の塊ね」

田辺のサインはそういうサインだったのだ。

気絶している田辺を残しみんなはラブ？ホテルに帰っていった。

第五十話へサイン（後書き）

由美

「ねえ、高木さん」

聖子

「何よ」

由美

「高木さんってなんでシュークリームがそんなに好きなの？」

聖子

「美味しいからに決まってるじゃない」

由美

「・・・そうか・・・」

聖子

「何悟ってんのよ」

由美

「いや、高木さんも意外に可愛いところがあるなーって思ってね」

聖子

「それ・・・褒めてるの？」

第五十一話〈トイレ?〉

一階には変なグッズが売っており各部屋からは変な喘ぎ声が聞こえてくる。

浩と由美は今日の疲れが溜まっておりベッドの上で二人テレビを見ている。

「やっぱりこのホテルはいかんよ」

天井についている怪しいライトを見上げながら浩は呟く。

「何が?」

そんな浩の気持ちを全然意識しない由美であった。

「何が?じゃねーよ。お前はどれだけ天然なんだよ」

「何怒ってんの?意味が分からない」

右手でリモコンの操作をし左手で大福に手をのばしている。

「おい、いつの間に大福なんか買ってきたんだ」

「別にいいじゃん、好きなんだし」

ピ、ピ、ピ

ピ、ピ、ピ

「おい、どれか一つの番組にしてくれ、目が疲れる」

「分かったよ。じゃあこれね」

由美はリモコンの上のボタンを操作しテレビにむけた。

・・・しかし、それがヤバかった。

《ん、あああ、いいいいあ！》

「ストオオオツツツツ」

浩はダッシュでテレビの前までいき驚異の指の早さで電源をOFFにした。

由美はその出来事に目を驚かせていた。

「どうしたの！」

「いや、何でもない。ちょっと駆け足をやりたかったので」

顔の汗を拭いながら浩はトイレに行く。

「このままでは身が持たない」

トイレのドアを開けた瞬間そこには異様な光景があった。

トイレの周りにはそのく、えくと、まあ要するに子孫を繁栄するためにおこなう刺激的なポスターや数々の道具が常備されていたのだ。

あれ？この黒い鞭って何に？

つか、何種類あるんだよ震える奴。

はじめてトイレに入っただけで全然気がつかなかったよ。

もう200パーセントあっち系のホテルじゃないか！

浩はトイレの使用を中止しゆっくりとドアを閉めた。

「おい由美」

「あれ？もうすませたの」

「いや、このトイレ壊れてるから、一階にあるお客用のトイレを使おうな」

浩は顔を真っ赤にしながら由美がいる場所に再び戻る。

「一階のトイレに行かないの？」

「いろんな意味でもう引っ込んだ」

時を同じくして聖子もトイレの目の前で仁王立ちになっていた。龍平はベッドで爆睡中でありこのトイレに入るのも聖子が初である。

「何・・・これ・・・」

浩達のトイレよりここはハードであった。

なんかもう色んな意味で・・・

口では表現出来なかった。

つか、ここトイレ？的な感じであった・・・

聖子はゆっくりリドアを閉めると顔を赤くしながら龍平の方へ歩いていった。

そして寝ている龍平の隣に座り顔を見つめる。

あゝ、別に好きでも何でも、うん多分、好きじゃない奴に・・・え！
欲情！みたいな感じになっちゃう自分が怖くなっちゃうよ！。

聖子の頭の中はパンクしそうなくらい思考中。

「・・・って私のバカ！何考えてるのよ。・・・でもあの黒い鞭つて何に・・・」

浩と全く同じ事を考えていた聖子であった。

さらに時を同じくして・・・

トイレの前に原田、田辺が立っていた。

「原田さん、僕、頭が壊れそうです」

「何気にこの部屋は何？的な感じで開けたらトイレだったね」

「いや、トイレとかそういう問題じゃなくて根本的にここはどこ？

みたいな」

二人で呆然になりながらトイレに関して色々突っ込む。

「いやー、原田さん、僕もう我慢が出来・・・ゴボ！」

原田は田辺の言葉が言い終わる前に腹部にキツイパンチを与えた。

田辺は変なうねり声をあげながら地面をのたうち回っている。

「私が選んだホテルとはいえ、ちょっといろんな意味でハードだわ」

そして頭をおさえながら田辺を睨み一言放つ。

「夜這いとかするなよ」

「・・・げほ！げほ・・・何で赤くなってるの・・・」

「・・・」

「ふーん原田さん、実は・・・」

《ゴス！》

思い拳が田辺の頭に響いた瞬間だった。

田辺・・・ご臨終・・・

「全く・・・この変態・・・そういえばあの黒い鞭って・・・」

「

第五十一話《トイレ?》（後書き）

由美

「ねえ、最近浩おかしいよ」

浩

「そりゃあこんな部屋にいたらおかしくなるぞ」

由美

「・・・そうかな?」

浩

「読者のみなさん、こいつ、おかしくない?」

由美

「僕は普通ですよ。ねえ読者さん」

原田、田辺、聖子

「ないない」

龍平

「いや、由美ちゃんは可愛いし普通だぜ」

聖子

「キモいわ」

龍平

「
テーマもな
」

第五十二話へ過去

《深夜0時》

一日の楽しい？旅行は終わり明日の昼過ぎくらいには福岡に帰る予定。

「ZZZZZ・・・」

一つしかない大きなベッドに由美と浩が一緒に寝ている。

由美は今日の疲れのせいかすぐに爆睡！

俺も眠いのだがいざ寝ようとしてもなかなか寝れない。

「ん、ZZZZZ・・・ん・・・浩・・・」

由美の寝言に浩の言葉が出てきた。

「お！こいつ俺が出てくる夢を見てるな。どんな夢かな」

「・・・むにゃ・・・ハリケーンを飲むのは・・・NGだよ」

「・・・聞かなかった事にしよう」

俺は由美の顔まで近づき言葉を交わす。

「いい夢見るよ。今日は楽しかったな」

寝ている由美にそう告げて浩は横になり目をつぶった。

《ムギユ!》

「・・・おい由美・・・手を・・・」

後ろから抱きついてきた由美をどかそうと目を開けて浩はビククリした。

顔が・・・近い・・・

由美の唇が俺の唇ギリギリのところにあつた。

吐息が俺の顔にかかり俺は一気に硬直した。

「改めて見ると・・・は！いかんいかん」

頭の中の欲望を無理矢理削除し浩はベッドの中に潜り込んだ。

「普通の男だつたら一線を越えてるな。偉いぞ俺」

「・・・ZZZZ・・・。浩・・・」

「また変な夢を・・・」

「好きだよ」

ぼそりと言ったその言葉に浩はビクリする。

「今何て言ったコイツ」

あ！あれか？

実は起きていて俺をからかってるんだな。

全くだかんよ、うん。

「由美、起きてるんだろ」

俺は由美の頬をツンツンとつつくが反応はない。そのかわり口からチラリとよだれが垂れていた。

ガキかお前は！

あ！ガキだったか。

頭の中で色々突っ込んでいると、ふと昔の事を思いだす。

俺がまだ小学3年生の時だった。

俺の家で遊んでおり由美と二人で何げない会話をしている時にそれは起こったんだ。

第五十二話へ過去へ（後書き）

次から少し過去の話に入ります。

第五十三話へ忘れられない出来事

「ねえ、浩！お風呂に入ろう」

「でもまだ冬休みの宿題が終わってないよ」

小さき頃の浩と由美の光景。

浩の自宅で一緒に冬休みの宿題をやっていたのだが由美が飽きてギブアップしてしまった。

「ねえお風呂入ろうよー」

ダダをこねる由美に浩はすごく困っていた。

「まだ30分しかやってないじゃん」

《プー》

その答えに由美は風船みたいに頬をおもいつきり膨らます。

昔からこの技に浩は弱かった。

・・・だつて・・・

可愛いんだもん！！

「じゃあ先にお風呂入ってよ。すぐ準備するから」

「イエッサー」

軽い敬礼をし由美は風呂場へ直行した。

場所《風呂場》

「僕！逃げまーす。あ、間違った、脱ぎまーす」

誰もいない風呂場で由美は意味不明な言葉を言いながら洗濯機の中へ服を脱ぎ捨てる。

全裸になった由美はお風呂に入るとおもいきやそのままトイレへ走っていく。

「オシッコ！漏れるー」

トイレのドアをあけた瞬間そこには浩が便座に座っていた。

しかも大きいほうを排出していた直後。

「おわあああ由美！俺を見るな！見ないで下さい！」

由美が全裸なのは突っ込まなかった浩。

「臭い！」

そう言い放つと由美はドアをおもいつきり閉めた。

そして考えたあげく2階のトイレへダッシュする。

これまた全裸で・・・

場所《お風呂の中》

シャンプーの泡をタツプリと含んだ髪の毛を浩に顔にバシツとすりつける。

この時の由美の髪型はまだ長髪で腰までの長さだった。それを本人は結構気に入っていたらしい。

なのでその髪は水分をいっぱいに含んでいたので鞭みたいに浩の顔面をとらえた。

「ぎゃああああ目がー、しーみーるー」

慌ててシャワーで目をすすぐ。相当痛かったのであろう。目が充血していた。

「由美のバカ！俺だって怒るからな」

「・・・ごめんなさい」

体を縮こまして由美は深く謝罪をした。《多分だが・・・》

子供の喧嘩も遊びにうち！

先程の事はすっかり忘れ去られ浩と由美はお互い体を寄せ合いながら温かいお湯に浸かっていた。

「寒いね浩」

「そうだな、冷えるな」

由美はタオルと空気の泡を使い、ぷつくりとタオルが風船のような形に変形した。

その空気の風船を浩は両手で握り潰す。

《ボシュ！》 という音とともにタオルはしおれてしまった。

この握り潰す時の快感がなかなか癖になるのだ！

「ははは！ボシュ！だってー、もう一回つくるね浩」

「やめられないなー」

普通の子供の日常。

普通の子供の会話。

それがこの後の夜、あの忘れられない出来事が起こってしまったのだ。

あれから何年も経ち少しは心の中から消えたかと思っていたがやはり完全に忘れる事は出来ないであろう。

「痛いよー痛いよー痛いよー！ママー、ママー・・・ひぐ・・・えぐ・・・ママー・・・」

「由美！大丈夫だよ。俺がここにいるから」

由美を抱きしめながら浩は必死に励ましていた。

そう全てはあの夜に起こった出来事。

第五十三話へ忘れられない出来事（後書き）

由美

「お！ついに過去の話にいつちゃうのか兄貴」

浩

「誰が兄貴だコラ！」

由美

「実際、あの過去の事は触れられたくありませんよ兄貴」

浩

「仕方ないだろ！夢に出てきてしまったのだから」

由美

「・・・僕もたまに見るよ兄貴」

浩

「ごめんな。あの時俺・・・全然力になれなかった」

由美

「嫌な事は忘れようぜー兄貴」

浩

「・・・そうだな。それと何回も言うがいつ俺がお前の兄貴になった！」

由美

「何となく」

浩

「シャンプーの泡を目に入れるぞー」

第五十四話〈恐怖の始まり〉

自然の恐ろしさは誰もが知っている。地震、台風、大雪、洪水、火災などの出来事は学校の教科書で勉強するであろう。

このような場合は防ぎようのない事だが、今からの出来事は一人の人間の何気ない行動で始まったのだ。

夜《8時》

「ふー、今日も疲れたな。あー！イライラする」

仕事の疲れのせいか溜め息を吐きながら煙草を吸う中年の男性。給料は安く、上司からはこき使われ全てのストレスを頭の中で抱え込んでいた。

「・・・スーパー、スーパー・・・ふー、煙草だけが俺をリラックスさせてくれるな」

肺に心地好い煙が入り一本の煙草はみるみるうちに縮小していく。

「もう一本吸うか・・・」

そう言っただけで火がついている煙草をある家の庭に投げ入れた。

風が強かったのか、その煙草は庭には落ちず窓を開けっ放しにしてあった一階の部屋に落ちていった。

《2階の浩の部屋》

「お風呂でさっぱりー！心もさっぱりー！体もすっかりー？僕はすつきりー！」

由美はパジャマ姿で頭から湯気を出してはしゃいでいた。それを見ていた浩は何か由美に言いたそう表情をしていた。

その疑問は由美の姿を見れば一目瞭然である。

う〇い棒を食べている仮面ラ〇ダーの絵柄がついたパジャマを着て？おり、手にはゲームボーイ《カラー版》を持っている。

しかし浩の疑問はこの異様な服のキャラクターと今から宿題をするではあるうという人間がなぜにゲーム機を所持？と言う所ではない。それよりも不自然なものがあるからである。

「お前・・・寒くないか？」

「いや、全然」

パジャマを着ている・・・のではなくパジャマを巻いている異様な姿。分かりやすく言うと腰にパジャマを着用していたのだ。袖をリボン結び状態にして《器用だなおい！》本体の服は垂れ下がっていた。

全くパジャマの意味がない状態であった。下の白いシャツだけが由美の体をおおっている。

「おい！袖がビローンビローンになるぞ」

「さて！ゲーム♪ゲーム♪」

「無視か！無視するのか！しかもなんでゲーム！宿題しに来たんだろっが」

「えー、だって今日の宿題終わったんでしょ」

「風呂入ったらするんじゃないの？」

「ち、ち、ち、甘いね浩は・・・子供は遊んだほうが脳が発達するんだよ」

「子供のお前に言われたくないわ」

本当に仲が良い幼なじみである。幼稚園から一緒だった二人はみるみるうちに仲が良くなった。お互いの家が横どうしでもあったので絆は幼いながら人一倍あったのであろう。

《一階、浩の親の寝室。》

まだ小さい明かりがついた一本の煙草は冬の冷たい強風の風により疊んであった毛布の上に落ちていく。毛布は非常に燃えやすい素材で出来ている為すぐに火が移ってしまった。しかも季節は冬である。乾燥している空気でその燃えるスピードも速かったのだ。

チリチリと毛布に着火していく炎はあっというまに成長していった。

二階にいる浩達はそんな事が起きているとは知らずにいつもの夜を満喫していた。

第五十四話〈恐怖の始まり〉（後書き）

由美

「いや、ゲームボーイとか懐かしいねー」

浩

「そうだな、あの時は特にポケ○ンとかよくやったよな」

由美

「うんうん。青春だったな」

浩

「青春の意味を君は分かってるのか？」

由美

「・・・0・2割ほど」

浩

「分かってねーじゃんか！」

由美

「別にいいの。青春は青春なんだから」

浩

「いつも思うがお前の言葉はたまに理解が出来ない」

由美

「しかたないよ、お母さんに似たからね。遺伝なんだよ」

浩

「DNAのせいにしやがったよコイツ。絶対クラスに一人は言ってしまう言い訳だよ」

由美

「あまり突っ込みはよしたまえ浩君。読者が退いているよ」

浩

「ごめん・・・あれ？なんで俺が謝ってるんだ」

第五十五話〈絶望〉

火とは恐ろしい自然の脅威である。小さな発火が原因で山火事などの大きな脅威に変身するのだから。

それと似たような事が今ある家で起きているのだ。

燃える炎はけたたましく、部屋の空気を熱風へと変えていった。さきほどまでの平和な日常はそこにはもはやなかったのである。

「由美！大丈夫か？」

「ゲホ！ゲホ！息が苦しいよー」

浩達が一階の火事に気づいた時にはもはや遅かった。黒く熱風のある煙は二階の部屋へと侵入し浩達の呼吸を奪っている。

火事での死亡の原因は焼死ではなく煙を吸う事での呼吸困難が主な原因である事が多い。

消防車が数台、目の前の小さな小道に詰め寄って並んでいた。必死に消化活動を実施するが意外にもその炎はとどまることをしらない。

近所には野次馬がぞろぞろとその場を見学していた。その時だった！その人だかりの中をかい潜って二人の人間が燃え盛る家に向かって行った。

その人間を消防士が必死に止めようとする。涙を流しながら叫ぶその姿は由美の母、そして無表情の父であった。あまりにも突然の出来事で表情が造れないでいたのだ。

「由美！由美！放して下さい、私の娘があの中にいるかも知れないんです！浩君も一緒かも知れないんです」

泣きじゃくる母の頭はもはや真っ白。

「そこをどいてくれ！娘を・・・娘を・・・早くどけ！」

父は消防士の中をかくぐり中へ飛び込もうとする。しかしギリギリの所で一人の男性によって止められてしまう。

「上野さん！落ち着いて！」

顔を見上げるとそこには浩の父親の姿があり、後ろでは浩の母親の姿があつた。母親の方はただ呆然と我が家を眺めている。

「浩・・・浩・・・浩・・・うわああああああ、浩ー、浩ー、浩ー、いやああああああー！ー浩ー浩ー」

そしていきなり理性を失いその場にしゃがみ込む浩の母。

「奥さん、落ち着いて！」

消防士の一人が浩の母を安全な場所へと移す。混乱を通り超して普通の精神状態ではなかったのだ。

「中原さん、由美は中にいるのですか」

「・・・」

「答えて下さい！」

「私の息子もあの中にいるんだ。落ち着くんだ」

「落ち着けだ！これが落ち着いていられるか！」

父親同士の争いに由美の母が駆け寄ってくる。

「もうやめて！お願いだから・・・神様・・・由美と浩君を助けて下さい」

ズルズルと腰を下ろし涙をこぼす母。

しかしその願いもむなしく炎の勢いは激しくなる一方であった。

「飛び火が周りの家へと移る可能性があります。住民の人は警戒をお願いします」

消防士は大声で周りの住民へと指示を出す。それほど大きな火事だったのである。

二階《浩の部屋》

「うそ！ベランダはもう炎で埋まっているよ」

由美は布団にしがみつきながら浩に話かける。浩は二階の台所から出る蛇口から水を出しそれを布団に染み込ませ由美と二人で覆いかぶさっていたのだ。

「大丈夫か由美」

「うゝ．．．全然大丈夫じゃないよ」

半泣き状態の由美を浩は必死に慰める。

「もうすぐ消防士が火を消してくれるよ。頑張る由美」

「えゝぐ．．．．．うん、頑張る」

涙を拭き取り浩に密着する由美。

「由美、大丈夫だ。俺が守ってやる」

両手で由美を抱きしめながら濡れた布団を出来るだけ由美へと被せる。

《バキバキ》

その時突然、床が鈍い音とともに抜けはじめた。

「くそ！うそだろ」

「う．．．う．．．ママー！ママー」

二人の思いは届かずそのまま瓦礫と一緒に一階へとたたきつけられる幼い子供の体。

その音は外の者にも聞こえていた。

「いやあああああ、由美ー、由美ー」

もはや絶望感で由美の母も精神が不安定の状態のあった。

「くそ！くそ！くそ！まだ消化は出来ないのか」

消防士に歩み寄り胸倉を掴む由美の父。

「お気持ちは分かります。こちらでも今全力で取り組んでいます」

その言葉を聞き弱々しく答える。

「お願いします。私の．．．私の．．．大切な娘と、浩君を助けてくれ」

涙を初めて見せる由美の父の姿。その光景を遠くから見つめる幼い少年がいた。

「・・・姉貴」

ぼそりと呟き、燃え盛る炎を見つめる大介の姿がそこにあった。

「う・・・痛！」

浩の体は切り傷や擦り傷でいっぱいだった。幸い軽い怪我ですんでいた。ゆっくりと立ち上がり由美を捜すが姿が見当たらない。

「由美ー！由美ー！」

涙をこらえながら必死に捜すがどこにもその姿はなかった。

ふと足元を見ると由美が腰に巻いていたパジャマがボロボロの状態。でそこにあつた。浩はそれを拾い両手でギュツと握りしめる。

「由美ー、お願いだー、返事をしてくれ」

返答はない。

ただ炎が燃えさかる音と瓦礫が徐々に崩れさる音しか浩の耳には入らなかった。

第五十五話〈絶望〉（後書き）

由美、小学生の時代《子供の遊び編》

由美

「みんな、ケイドロしようよ」

浩

「ケイドロよりヨンムシなんかどうよ？」

由美

「うゝゝ、ヨンムシするくらいなら二歩当てたほうがいいもんね」

浩

「もう間をとってドッジボールにするか」

由美

「間・・・とれてないけど・・・」

浩

「由美に駄目だしされてしまった・・・トホホ」

作者

「ちなみに読者のみなさん。小さい頃の遊びで自分はよくケイドロや三歩当てをしておりました。ヨンムシという遊びもよくやっておりましたよ。みなさんはどういう遊びを《ゲーム機以外》をしておられましたか？」

第五十六話〈助けて・・・〉

痛い痛い痛い痛い！

「足が痛いよー」

瓦礫の奥深くに由美は下敷き状態になっていた。幸運が幸運を呼び由美は折り重なった瓦礫の中の小さな空間で一命をとりとめていたのだ。

「ゲホ！ゲホ！ここどこなのー。浩どこー」

熱と煙と埃の攻撃により由美の意識は朦朧とし始めてきた。

「ママー！浩ー！」

小さく薄れる声。

その時、色々な出来事が由美の頭をよぎりはじめた。

死を覚悟した人間は楽しかった思い出が甦る事があるという。

由美は自分では気づかずに目をつむり、頭の中で家族の事、そして浩の思い出を想像していた。

「大介・・・算数の点数が悪すぎ・・・・・・ママ・・・僕の料理どう？美味しい？・・・パパ・・・またお仕事？・・・今度一緒に野球・・・しようね・・・・・・ねえ浩・・・僕達・・・ずっと・

・・」

夢を見ているのだろう、由美にはもう意識はなかった。小声でブツと楽しかった思い出を呟く。

「ずっと……ずっと……ずっと……」

その言葉と同時に由美の声は途切れた。

火事の煙をたくさん吸いすぎたためだ。

そう、一酸化炭素中毒になりかけていた。

吸いすぎると体を蝕み意識を低下させ最後には全ての機能が停止し死に至る。

由美の瞳から一粒の涙が流れ静かに頬をつたった。

燃え盛る炎に包まれている家はもはや全焼に近い状態であった。全ての人が子供達の生存は絶望的と感じていた。

「もう我慢の限界だ、俺が中に入る」

由美の父はバケツ一杯の水を頭に被り中へ飛び込もうとした。

その時、原型を保っていた家が半分崩壊し始めた。バリバリと壁や屋根は崩れ去り赤い灰と化していく。

「くそ！今いくぞ」

「危険です！はやまらないで下さい」

消防士が数人がかりで由美の父を取り押さえる。

その横では大介が必死に涙を耐えていた。

「姉貴・・・姉貴・・・あね・・・うわあああん」

溜めていた涙が溢れた瞬間であった。《必死に我慢していたのに・・・なぜ今泣くの？姉貴はまだ生きてるよ・・・でも・・・》

頭の中では諦めてはいなかったがこの絶望的な光景を見たらもう大介には泣くしかなかったのだ。

瓦礫は力無く崩壊の一途を辿っている。周りの人達の希望はもう薄かったであろう。

燃える炎。

黒い煙。

・・・実に無惨な光景。

上空を包むけたたましい煙はまるで原爆のキノコ雲のようにも見える。

飛び火を受けボヤを出すところも後をたたなかった。

《ドゴーーーーン》

突然の爆発が周りの人々を襲った。かろうじて窓に張り付いていたガラスが《パリン》という音とともに周囲に飛び散ったのだ。

幸い負傷者はいなかったのだがこの状況を見て消防士達は人々をこの近くから遠ざける。勿論、中原、上野家達も例外ではなかった。

第五十六話〈助けて・・・〉（後書き）

由美の五歳の誕生日会

由美の父

「由美よー！ほら、仮○ライダーのベルトだぞー。ピカピカ光るんだぞー」

由美

「わぁー、パパありがと」

由美の母

「もうー、パパったら。由美は女の子なんだからもう少し考えてよねー」

由美の父

「ふふふ、いいんだよ。由美は仮○ライダーが好きなんだから。それにこのまま女の子らしく育ったら由美はきつと《お父さんは臭いからお風呂は先に私が入るね。・・・足が臭いよ、近寄らないで》とか言いだすんだよなきつと・・・ぐすん・・・」

由美

「パパは臭くないよ。とってもいい匂いだよ。由美ね、パパがだいすきだよ」

由美の父

「由美・・・おまえ・・・パパは・・・パパは・・・」

由美の母

「はいはい、感動に浸ってないで。由美、ケーキのロウソクをふって消そうか」

由美

「うん」

由美の父、母

「せーの」

由美

「ふーー」

由美・・・五歳の誕生日おめでとう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3524b/>

自分は男だ！！

2010年10月10日06時09分発行